

580
10

580-110
1200501521947

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

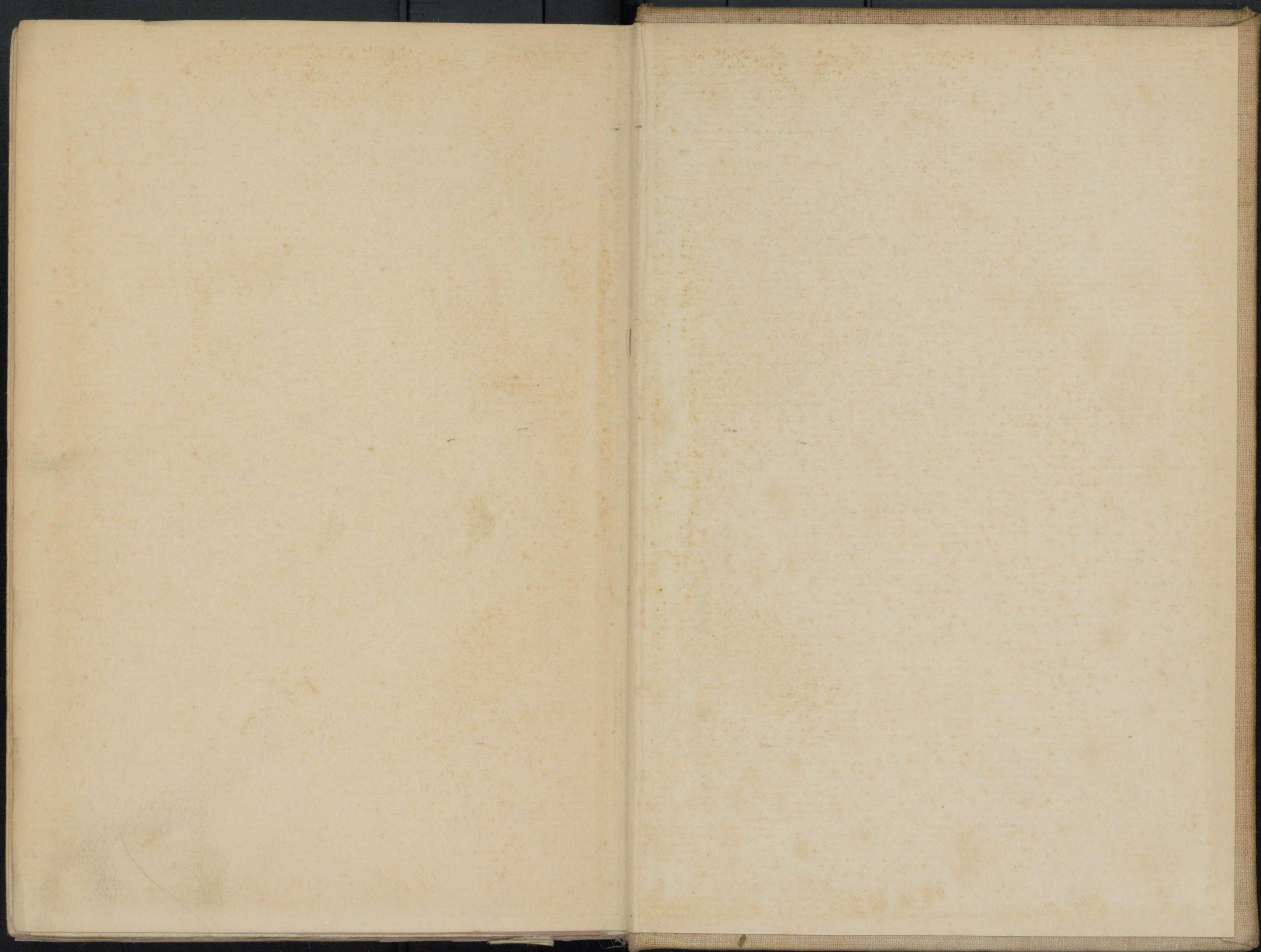
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

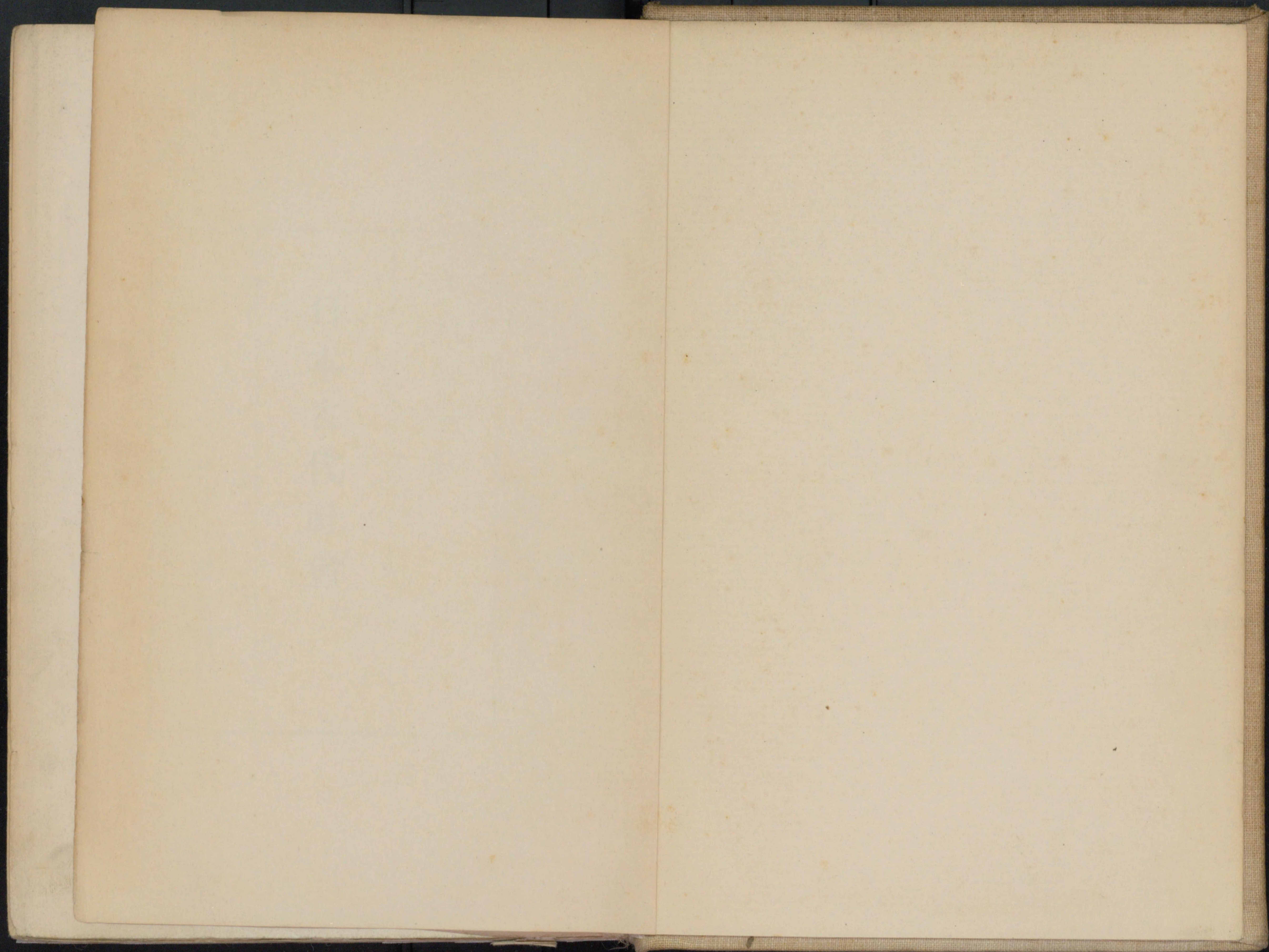
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

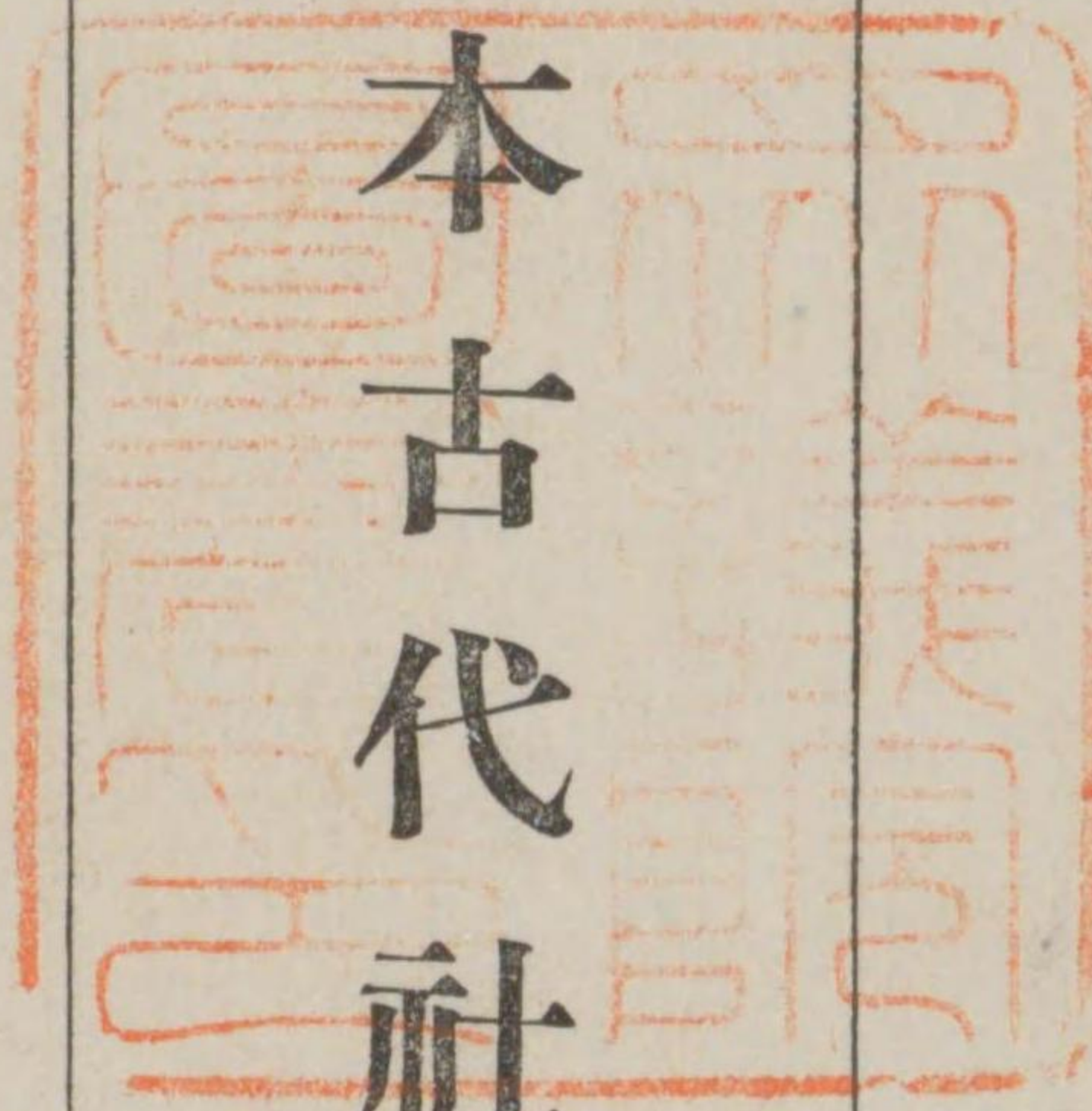






西村眞次著

日本古代社會

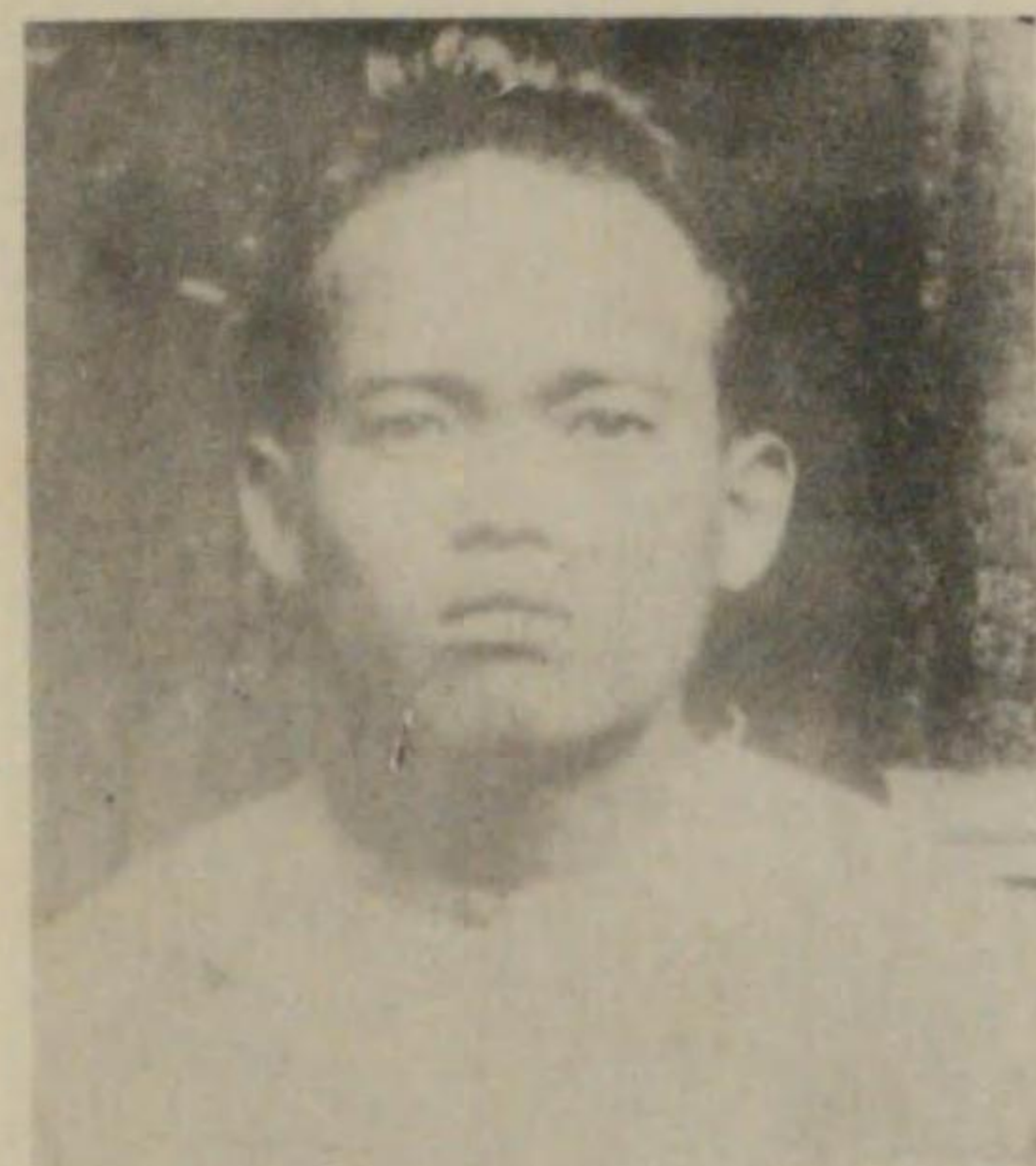


ロゴス書院刊行

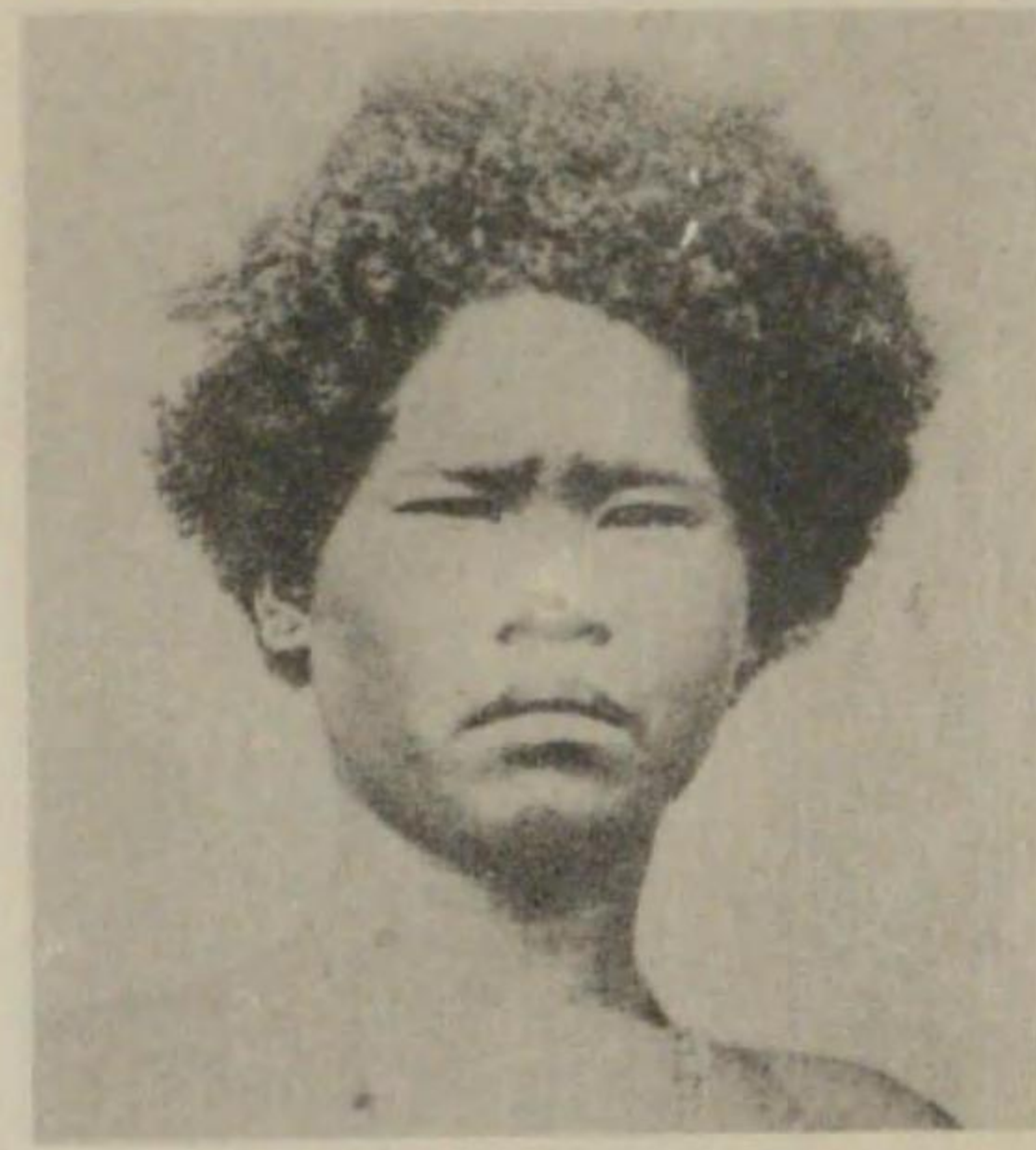
日本人の種的要素

日本人の種的要素を求める方法はいくらかもあるが、最も分り易く、最も見易い一つは、それを寫眞にあらはすことである。(1)はネグリト族で、毛髮縮れ、身長小さく、黒人種に屬してゐる。(2)は千島アイヌで、アイヌの原型を保つてゐるこいはれる。これは白人種に屬する。(3)はツングース族で、此血液が最も強く日本人の中に活いてゐる。(4)はカルマツク族であるが、此種族に蒙古族の原型が保たれてゐるこを見る。(5)は印度支那族中の血族である。(6)は白人系の台湾生蕃で、それにインドネシヤ族を代表せしめる。(7)は漢族である。(8)は以上七種族の複合寫眞である。以上諸種族が混血して、長い世紀の間に徐々に出現したのが日本民衆であるから、以上の寫眞を或一點で焦點を合はして複合寫眞を作るこ、本圖の如くなる。(9)は即ち(8)を擴大したもので、此人造日本人の容貌は日本人の理想型ともいふべきものである。

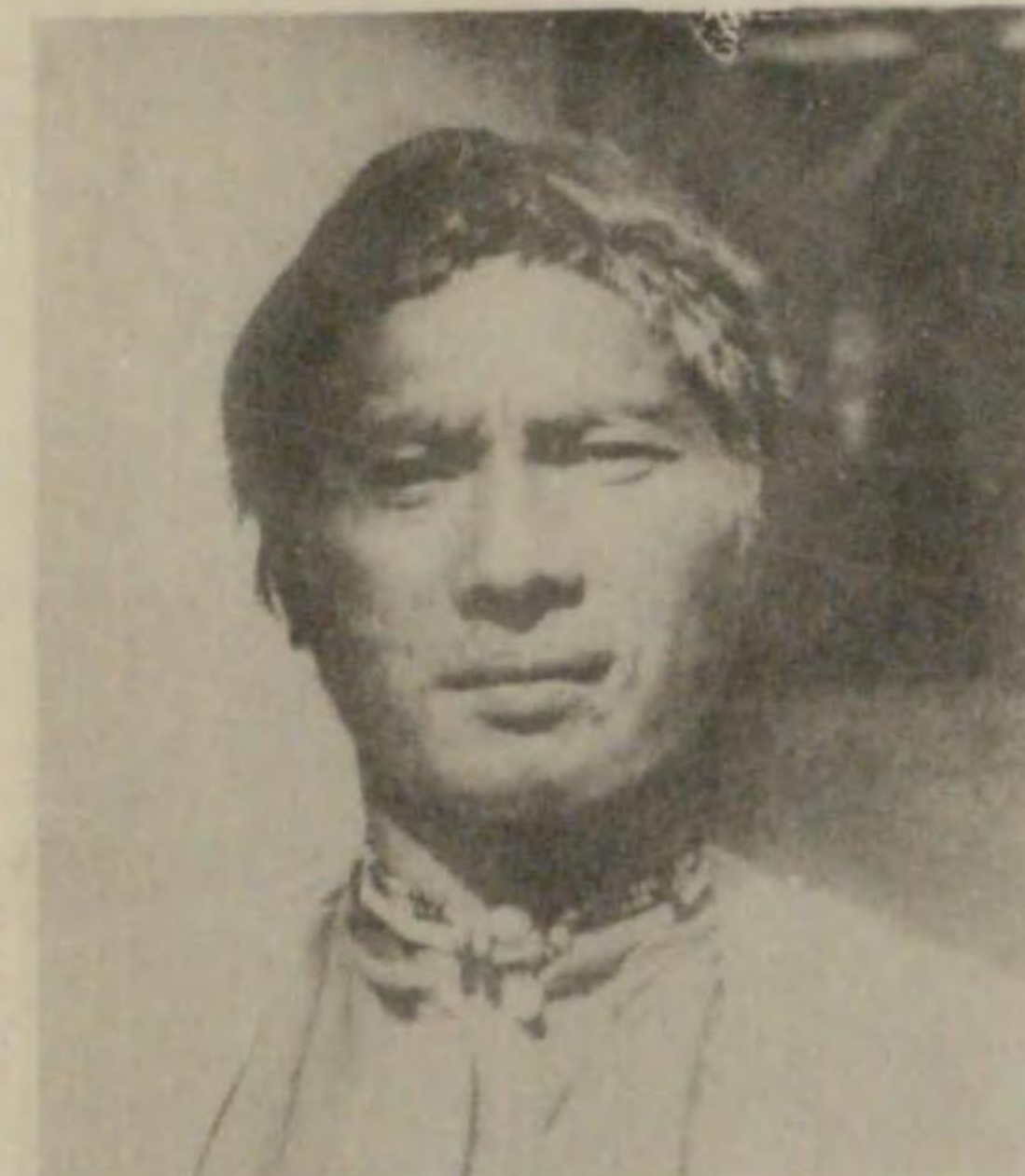
日本人之人種要素
（一）日本人之人種要素は、(a) 利平種と(エ) 支那種との
混血の結果、(b) 蒙古種との混血の結果である。(c) 日本種と支那種との混
血の結果、(d) 日本種と蒙古種との混血の結果である。以上諸要素
が混血して、長い歴史の間に、(e) 日本民族であるから、(f) 以上
の諸要素を一つで混血を命じて、(g) 日本民族を作らば、(h) 本國の如くなる。(i)
は即ち(一)を擴大したもので、(j) 日本人の意識は日本人の理想をい
ふべきものである。



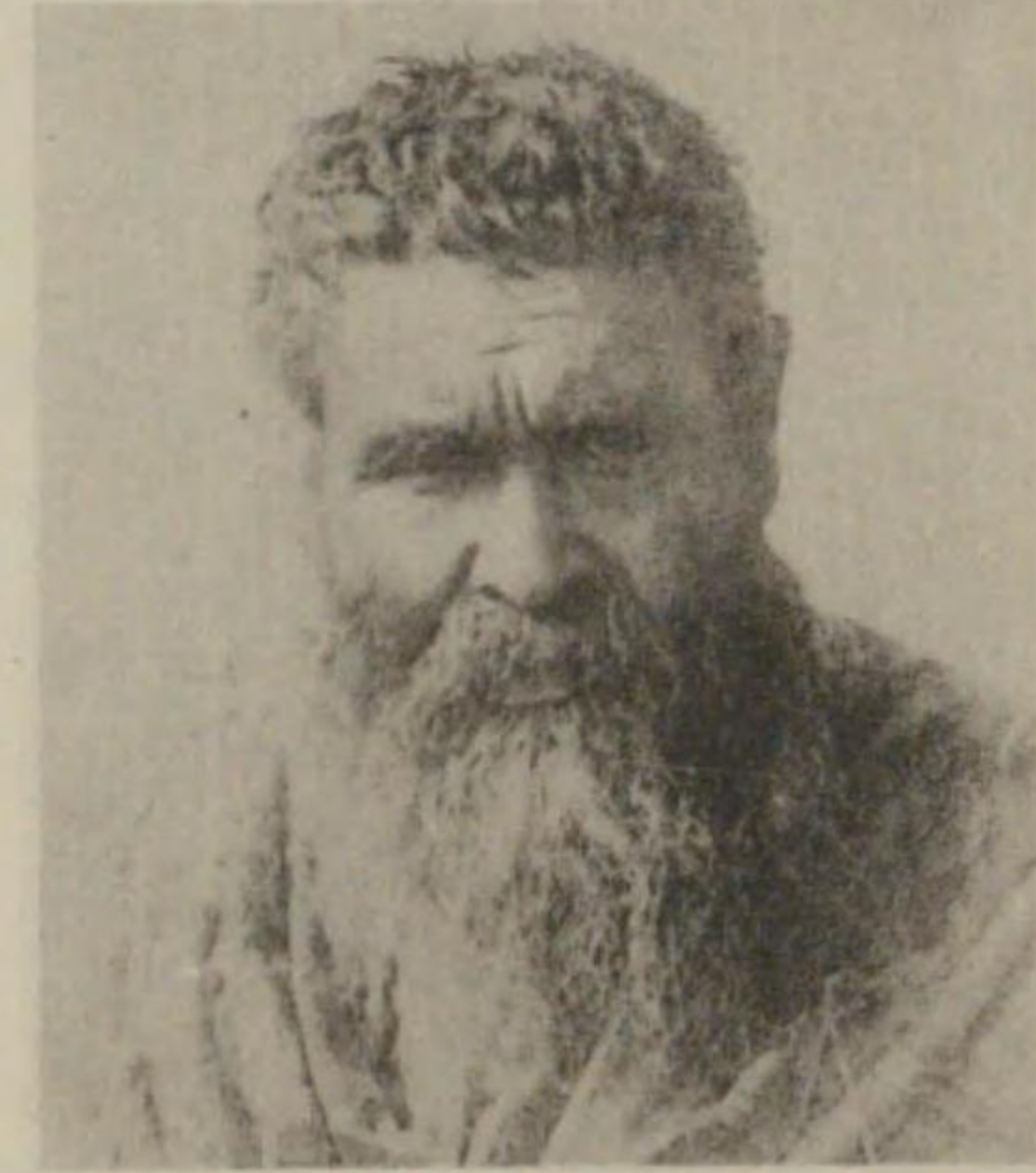
(5)



(1)



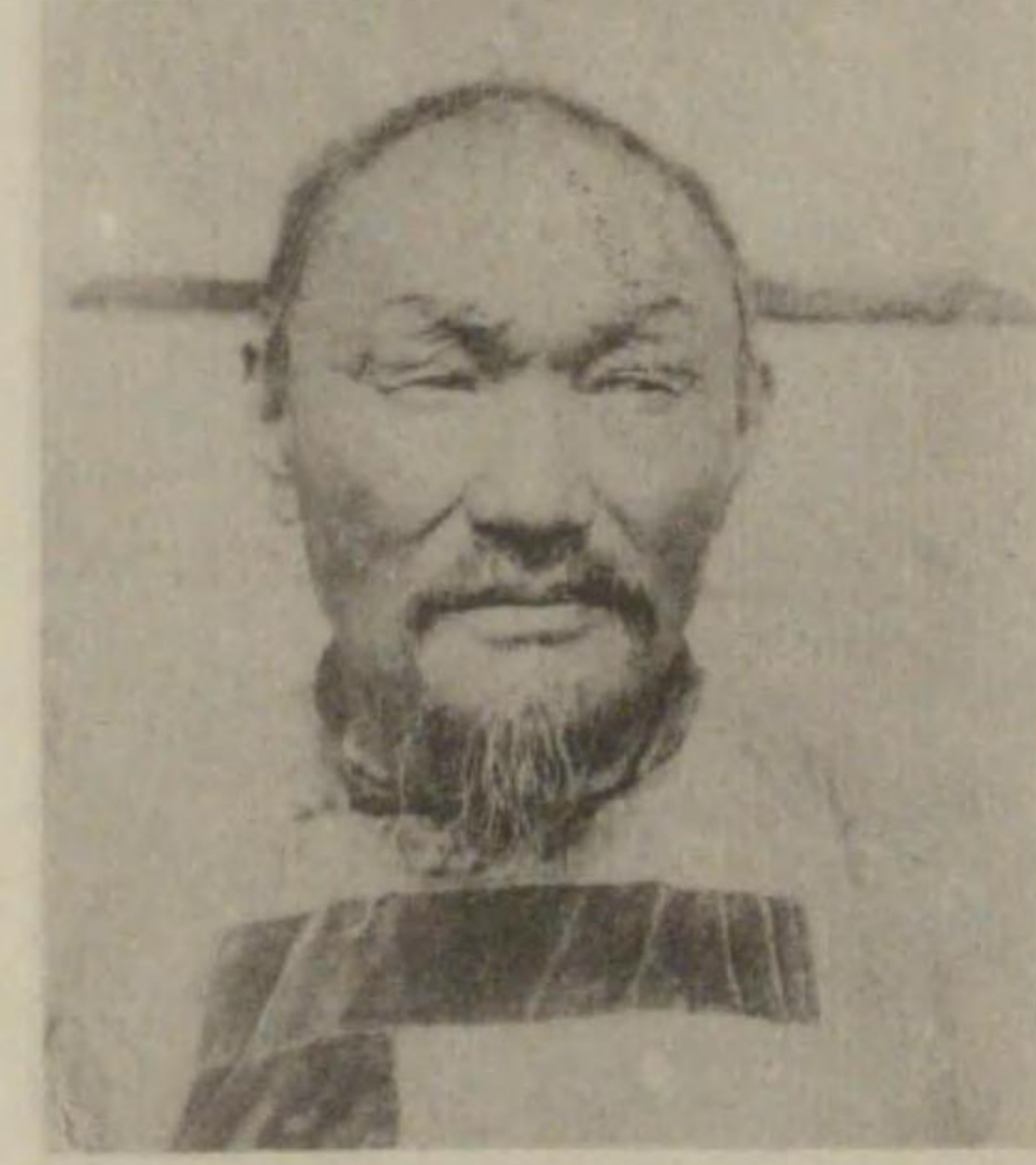
(6)



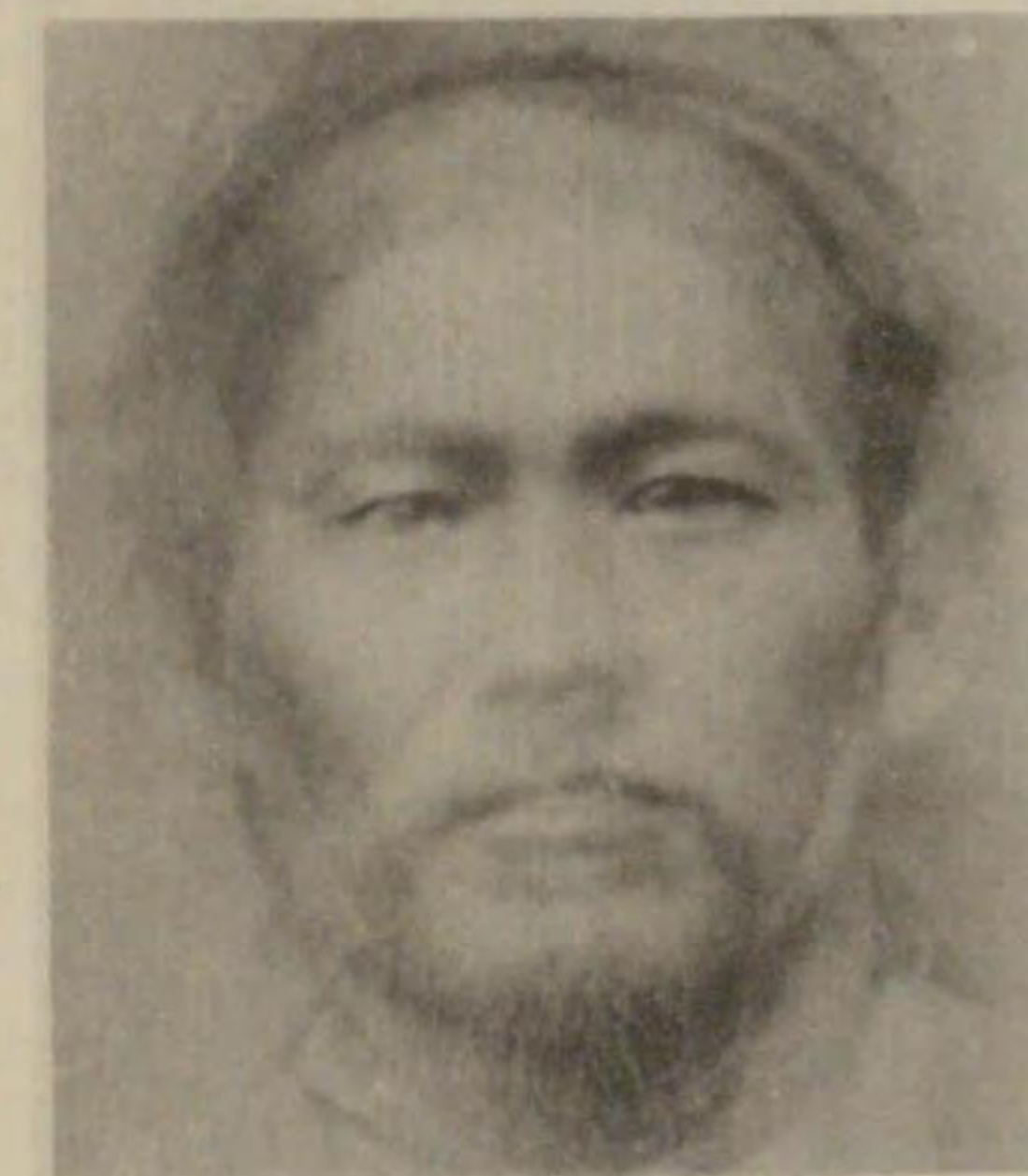
(2)



(7)



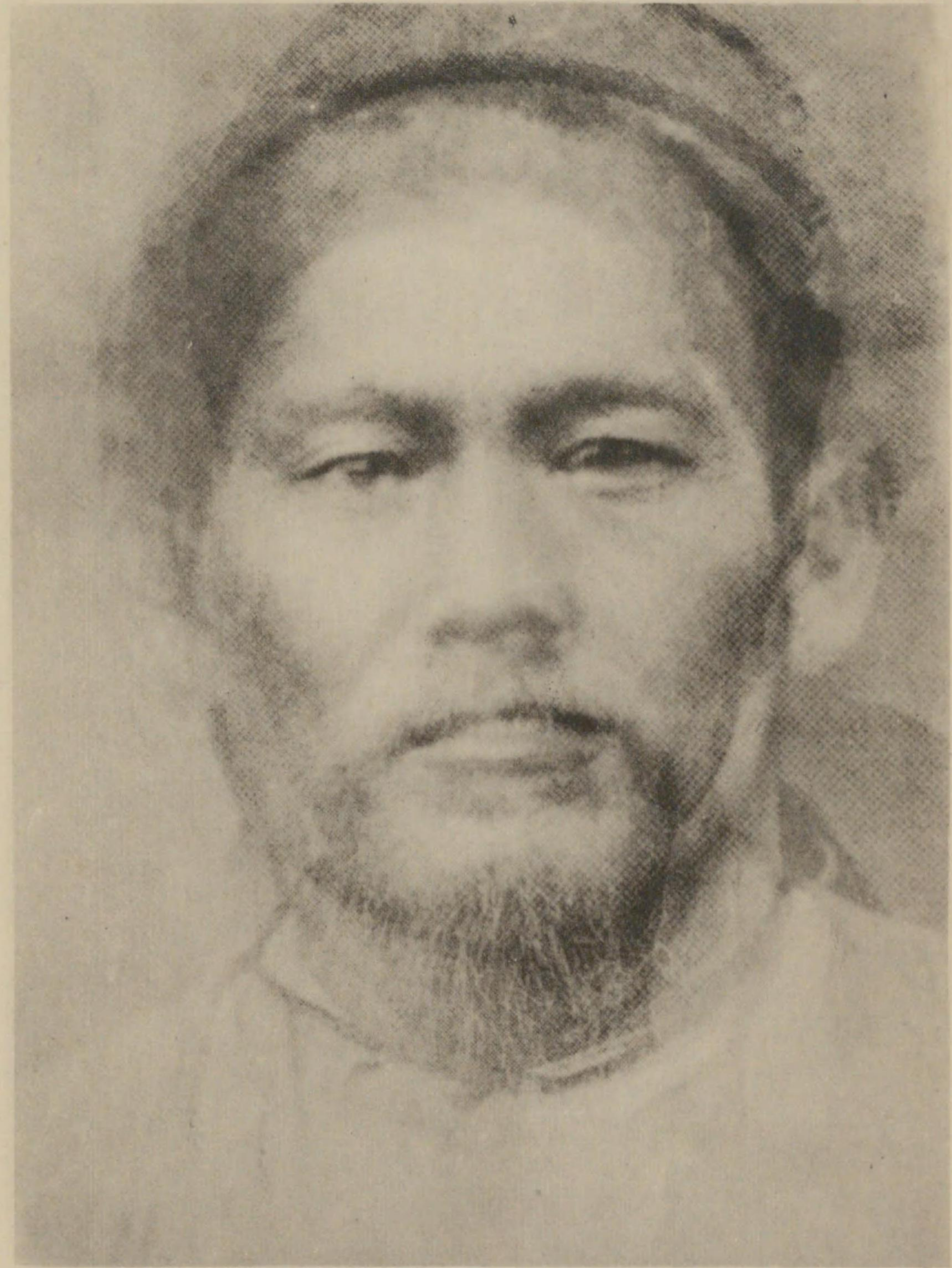
(3)



(8)



(4)



序言

祖國の歴史は自分達の傳記の延長で、それを知ることがは即ち自分達を知ることになる。自分達自身を知らないほど愚なことが世にないとしたりならば、祖國の歴史に關心しないことほど愚な國民はないといつてもよい。祖國の歴史の研究は、國民の最大義務でなくてはならない。

古代史は、祖國の歴史の中でも重要な部分であるにも拘はらず、その研究法が完全でなかつた爲め、これまでは甚だ幼稚な論述しか見られなかつた。晩近科學の勃興に伴ひ、歴史科學も著しく昂揚せられ、其結果、稍々見るべき古代史の研究が現はれて來たけれども、尙ほ未だ十分の結果が得られたといふほどではない。日本古代史の最近の進出は、僅かに考古學的研究に於いて著しく、人種學的研究に於いて稍々見るべきものがあるといふだけで、其他の側面では目覺めるやうな研究結果が發表せられてゐない。推稱すべき成績を

收めたといはれるものがあつても、多くは部分的であつて、全體的でなく、従つて古代日本人の生活をありありと私達の眼前に結像せしめるやうなものはない。偶々纏つたものがあつても、其内容が甚だ非科學的で、單に舊套を襲うたに過ぎない觀があつたりして、あらゆる點に於いて科學的知識の進んでゐる私達に満足を與へるやうなものは少い、否、全くないといつてもよいほどである。

さうした缺陷を補つて、我邦の古代史界に光明を投射しようといふやうな功名心に燃えたわけではないが、幼い時から古代文化の殘存した特殊の地理的環境の中に育つた私は、引き続き古代史を研究しようといふ希望を懷いて來た。其希望は今日も尙ほ持續せられて、一步でも現在から進出したいといふ願ひが、熱心な推進器となつて油の切れかゝつた私を後から推してくれり。乏しい生活費を割いて書物も買ひ、旅行も試み、自分の最善と信ずる人類學的研究法によつて、私はこゝ十數年來脇目も振らずに、ちやうど目の兩側を目隠して蔽はれた馬車馬のやうに、遮二無二突進を續け、殆ど全く回顧するこ

とはなかつた。研究の範圍が『深さ』を有つたといはれる普通の所謂『學者』に比べてあまりに廣く、あまりに多岐に互つてゐる爲めに、どれもこれも未完成で、まだ纏められる程度には達してゐないが、色々の理由から時々未定稿を發表して來たので、それらを集めて刪正し、且つ多少の新稿を加へて一冊の書物とすることを、ロゴス書院から勸説されるまゝに承諾して、こゝに此書が『日本古代社會』の題名の下に、街頭に現はれることになつたのである。

『片輪の子ほどなほ可愛い』といふ諺の通り、私は此書を満たしてゐる内容を、私の現在の實力から見て決して満足には思はないが、また決して愛著を感じないわけではない。私はこれを棄てるに忍びなかつた。若し讀者諸君の中で、此書の内容に於いて不備を發見し、誤謬を指摘し、不満を感じられたならば、親切に高教を賜りたい。これは私の最近の論述ばかりではなく、過去の研究のノートもあり、これ以外にも尙ほ多くの研究を積んでゐるから、やがてそれらを綜合して一層の完全さと正確さとを有つた一世代の『日本古代基礎史論』を書くであらう時に、賜はつたところの高教が正しければそれに從

うて訂正することも出来るのである。また若し此書がいくらかでも若い讀者諸君の参考になり、正しい道に立つて祖國の古代史を見直す契機を與へたとすれば、私はそれを無上の欣榮と感ぜずには居られない。

私は此書の上梓に當つて、常々私の研究に便宜を與へて驚鈍に自ら鞭つ勇氣を起さしめられる先輩友人諸君に對して、感謝の誠意を披瀝したい。

昭和三年九月三日夜、蟲の音しげき醉夢書屋に於いて、

西村眞次

内容目次

第一章 序論

| | | |
|-----|-------------------|----|
| 第一節 | 地と人と文化との三角關係…………… | 一 |
| 第二節 | 人種と民族と…………… | 六 |
| 第三節 | 文化と其輪郭…………… | 一〇 |
| 第四節 | 地理的環境の影響…………… | 二〇 |
| 第五節 | 異化作用と同化作用…………… | 二五 |
| 第六節 | 地理的制限の崩壞…………… | 三四 |
| 第七節 | 結言…………… | 三九 |

第二章 人種學上の日本人

第一節 日本人と人種學……………四四

第二節 近代日本人の體格と容貌……………四六

第三節 日本人を構成する人種的要素……………四八

(一) ネグリトール族……………四九

(二) 舊アイヌ族……………五〇

(三) ツングース族(原日本人)……………五三

(四) インドネジャ族……………五四

(五) 印度支那族……………五四

(六) 原支那族(漢人)……………五五

(七) 蒙古人……………五七

第四節 人造日本人の姿相……………五七

第三章 日本古代文化の輪郭

第一節 固有日本文化……………六一

第二節 物質的特徴……………六二

第三節 家族から國家へ……………六八

第四節 積極的處生觀……………七三

第四章 古代文化の數字的反映

第一節 緒言……………七五

第二節 『古事記』の新研究法……………七五

第三節 天地的現象……………七七

第四節 氣象學的現象……………八〇

第五節 動物に關する知識……………八二

第六節 植物に關する知識……………八五

第七節 結語……………八六

第五章 言語慣習から觀た古代生活

第一節 社會生活の片影……………八九
第二節 建築に關する言語慣習……………九〇
第三節 食物に關するもの二三……………九五
第四節 衣服に關するもの二三……………九八
第五節 危険と發明との境……………一〇〇

第六章 古代日本人の住居

第一節 人種と文化との關係……………一〇一
第二節 洞穴住居の痕跡……………一〇三
第三節 木造家屋の系統……………一〇六

第四節 現在建築との交渉……………一〇九

第七章 船舶と交通

第一節 古代交通の還元……………一一二
第二節 歴史と創造と船舶と……………一一四
第三節 日本海式船舶……………一一七
第四節 日本固有の縫釘……………一二〇
第五節 朝鮮の三角船……………一二一
第六節 出雲のソリコ船……………一二三
第七節 黒龍江の艦……………一二九
第八節 竹や葦で造つた舟……………一三〇
第九節 格子形腕木附の船……………一三三

第十節 剝舟と『天磐櫂樟船』……………一三六

第十一節 筏の證明する文化移動……………一四二

第十二節 日本の人種と文化……………一四三

第八章 日本神話の世界的位地

第一節 文化連續の證據……………一四六

第二節 天孫降臨神話……………一四九

第三節 羽衣說話……………一五七

第四節 結言……………一六八

第九章 記紀の土俗學的諸問題

第一節 序說……………一七〇

第二節 神系は人種の反映……………一七二

第三節 呪的宗教上の問題……………一七四

(一) 總說……………一七四

(二) 卜占……………一八〇

(三) 對馬の龜卜……………一八四

第四節 産靈の崇拜……………一八七

第五節 結言……………一九三

第十章 古代の貿易

第一節 緒言……………一九六

第二節 神話學的材料……………一九九

第三節 考古學的證據……………二〇四

第四節 言語學的考察……………二一一

第五節 工藝學的類推……………二二五

第六節 文獻學的證明……………二二〇

第七節 結 言……………二二四

第十一章 日本歌謠の原始形質

第一節 緒 言……………二二六

第二節 歌謠發生の胚子……………二二二

第三節 原始歌謠と其研究法……………二二九

第四節 日本原始歌謠の内包……………二四六

第五節 日本原始歌謠の形態……………二七〇

第六節 結 言……………二六八

第十二章 婦人の社會的地位

第一節 文化史上の婦人……………二九一

第二節 迷路に立てる婦人……………二九三

第三節 婦人の本當の任務……………二九四

第四節 社會創設者としての婦人……………二九八

第五節 宗教保護者としての婦人……………三〇四

第六節 將來婦人の行くべき道……………三〇七

第十三章 日本古代社會の人種學的研究

第一節 匈奴と東胡とツングース……………三〇〇

第二節 匈奴の社會組織……………三〇一

第三節 東胡——鮮卑の歴史……………三〇五

第四節 ツングース族の社會生活……………三〇七

第五節 ツングース族の議會……………三三二

第六節 原日本人の社會組織……………三三九

第七節 原日本人の固有法制……………三三六

第八節 公平と自由が日本人の理想……………三四一

第十四章 國家發生過程の文獻學的研究

節一節 史料としての『魏志』……………三四五

節二節 倭國の位置……………三四八

節三節 倭國の國家的形態……………三五六

 (一) 倭國の領域……………三五六

 (二) 倭國の統治……………三六六

 (三) 倭國の民衆……………三七五

第四節 結語……………三六九

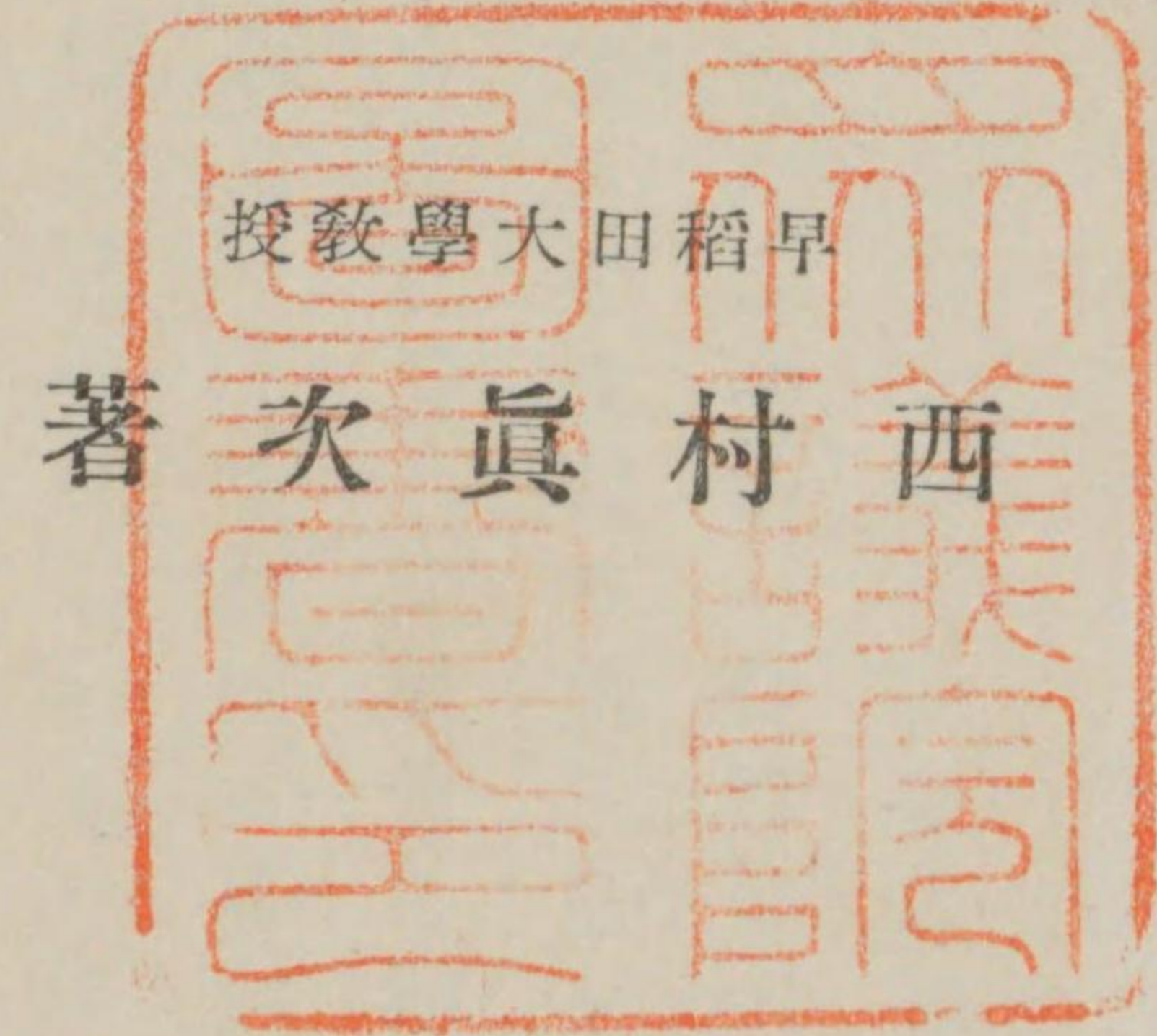
第十五章 結論

第一節 總收……………三九三

第二節 古代史改造の急務……………三九八

索引……………四〇四

日本古代社會



日本古代社會

日本人の種的要素(卷頭コロタイプ)
日本家屋の進化過程(一〇八一—一〇九)

第一章 序論

第一節 地と人と文化との三角關係

私はこゝに日本古代社會に關する諸研究を纏めて刊行することにした。日本人もまた人類の一變種であつて、特に創造された人種でない限りは、其生活史は所詮人類全體の生活史を離れることが出来ない。日本古代社會は、此意味に於いて、世界人類社會の極東に於ける片割に過ぎない。従つて日本古代社會を知らうとすれば、世界古代社會を知らなくてはならない。私は今其豫備的知識を獲得せしめる一手段として、地と人と文化との三角關係を卷首に論述しようと思ふ。

人類は一面自然であり、他面文化であるところの兩屬的生物である。わかり易くいへば、私達は土地に依存する人類といふ生物であると同時に、自ら文

化を造就するところの超自然的性質を帶んだものであつて、これを單純な自然物であるとのみいふことは出來ない。いはゞ第二の自然を造り出すところの特殊の自然物であるとするのが出來る。地によつて人が出來、人によつて文化が出來るものであるとすれば、先づ地と人との關係を調べて見なければならぬ。地と人との關係は如何なる場合にも分離することが出來ない。それらは相關的であつて、不可分離の交渉を有つてゐるといふ風に在來は考へられて來た。しかし、既成の學說に於いては、人は寧ろ地の從屬であつて、地が人の主宰であつた。他の言葉でいひ表はせば、人は常に地の支配を受け、地は常に人を支配するといふやうに考へられてゐた。一例すれば、人種の如きは全く他の動物の種の如く、様々の地的環境の所産であると信ぜられてゐた。

生物が地的環境の影響を受くるといふことは、今日ではもはや問題にならぬ學界の定説であつて、そこに異論を挟む餘地はないやうに見える。日光を受けぬ植物は白くなり、香氣が移り、液汁が變る。北極の熊は白く、熱帯の熊

は黒い。弱いソローニユの牡牛がルワール溪谷に送られると性質が一變して強くなる。此環境(Milieu)の力が生物の上に働いて、初めは一時的の變化を與へたものが、幾世代も續く間に永久的の變化となつて、所謂『第二の性質』を形造ると、其既得の性質は個體の形質遺傳となつて子孫に傳へられてゆく。それが即ち變種(Varieties)である。

人類の變種が謂ふところの『人種』であつて、それはキーン教授に従へば、氣候、土壤、食物、欲求及び遺傳形質の所産である。そこでキーン教授は地と人の關係を三つの方面から觀て、氣溫地帶(Zone of Temperature)が人種地帶(Racial Zone)及び文化地帶(Cultural Zone)に一致することを指摘した。氣溫地帶とは、説明するまでもなく、地球を緯度に従うていくつかの地帶に分けるもので、普通には赤道を中心にして南北とも二十三度二分の一、即ち夏至線と冬至線との間を熱帯とし、夏至線以北、冬至線以南を溫帶とし、北緯及び南緯六十六度二分の一以上を寒帯とするが、高度や海洋の影響や其他の地方的條件によつて、同一地帶であつても氣溫に變化のあることはいふまでもないことだ。

人種地帯を分けることはちよつと困難であるが、假りに皮膚の色彩で世界の入種を白色人種 (Leucodermi)、黄色人種 (Xanthodermi)、黒色人種 (Melanodermi) の三種に分けるとすれば、舊世界に於いては熱帯に近づくほど肌色が暗く、それを距るだけ明るくなるから、熱帯を黒人種帯、温帯を黄人種帯、寒帯を白人種帯と見做すことも出来ないことはないが、さう概括してしまふと事実上の相違があるのみならず、新世界に於いては此通則が適用せられないことになる。

そこでキツスラア教授は、實際的事實に準據した一種の地帯を工夫して、世界を三地帯に分けた。これが文化地帯ともいふべきものであらう。彼れは兩半球の中央に連亘する高地帯を中央地帯と名づけ、其北をツンドラ地帯、其南を叢林地帯と名づけた。

(a) 中央地帯 (Mesa Zone) は高地で、乾燥して居り、南ヨーロッパ、北アフリカ、エジプト、メソポタミヤ、支那、チベット、北アメリカ高原、ユカタン、アンデス山地、ペルウなどを之に屬せしめる。

(b) ツンドラ地帯 (Tundra Zone) はツンドラから草原、平地、森林に達する間の

土地で、北ヨーロッパ、ロシア、シベリヤ、モンゴリヤ、カナダ、北米合衆國東部、アルヘンチナ、バタゴニヤなどを之に屬せしめる。

(c) 叢林地帯 (Jungle Zone) は卑濕の熱地で、熱帯アフリカ、南アジア、熱帯諸島地、カリブ地方、アマゾン地方などを之に屬せしめる。

これら三つの中、中央地帯を調べて見ると、そこには古代文化が創造せられ、繁榮せしめられた場所が多い。ハム人の文明が造就せられたエジプト、セム人の文明の發達せしめられたメソポタミヤ、漢族の文化が旺盛の域に達した支那、アツテク族やインカ族の古代文明を跡づけることの出来るメキシコやペルウが、此中央地帯の上に位してゐることを思つたら、古代文明と中央地帯との關係を否定することが出来まい。また今日の世界の狀況を見るに、大體に於いてツンドラ地帯が高級の文化人に生まれ、反對に叢林地帯が文化の低級な野蠻人に生まれ、中央地帯は舊文明を辛うじて維持し、或は殆んど全くそれを失つてしまつたことを發見するであらう。かう見て來ると、文明は中央地帯に發源し、ツンドラ地帯に成長し、叢林地帯に波及せんとしてゐることが

結論されて来る。いづれにしても、人種と文化と氣温との三角關係は顯著の歴史的事實であつて、それが地理的環境の人類に與へる影響であるといふことは疑はれない。

第二節 人種と民族と

人種學的用語は區々であつて、それらを用ひる人の頭には、はっきりとした概念が宿つてゐない。時と場合によつて色々の意味が異つてゐる。キーン教授は、そこで、便宜の爲めに人種學的用語を二分して、定科語及び不定科語となし、前者は血屬的關係 (Blood relation) を現はし、後者は社會的關係 (Societal relation) をあらはすものとした。^(註) 彼れが定科語に屬せしめたものは、

- 人種 (Race) トーテム (Totem)
- 氏族 (Clan) 分枝 (Branch)
- 部族 (Tribe) 系統、本幹 (Stock; stem)
- 家族 (Family) 型式 (Type)

などで、本來は體質的動因による差異に基づいた種別を示してゐる。また不定科語に屬するものは、

- 類別 (Division) 民族、國民 (Nation)
- 區分 (Section) 民衆 (People)
- 人群 (Group) 居民 (Population)
- 群團 (Horde) 住民 (Inhabitants)

などで、本來文化的差異を示したものである。一々これらについて説明するのは煩はしいから、此中、最も普通に用ひられ、そして屢々混亂せしめられてゐる人種と民族とについて説明しよう。

(イ) 人種 (Race) と云ふ語は、體質を現はす意味にも、また文化を現はす意味にも用ひられてゐるが、デキソン^註教授に従へば、それは全然體質的のものであつて、文化的特性を其中に含んでゐない。即ち人種とは體質的、特性 (Physical characters) の複合そのものであつて、頭形、肌色、毛髮、姿態などをあらはすけれども、言語、文化、歴史、政治などをあらはすものでない。デキソンは此見地から人

種を定義して、人種とは體質に基づいた人群の意であるといつてゐる。かうした風に、人種を體質的のものと見る風が、最近の人類學者間に多いやうに思はれる。假りにそれをデキソン學派 (Dixonian School) とでもいつて置かう。

(ロ) 民族 (Nation) といふのは、従前、一に國民ともいはれたもので、體質的特性よりも文化的特性をあらはす爲めに用ひられる語である。かるが故に此語では言語、歴史、政治などが重要な内包をなしてゐる。無論、民族といふ語の中には、いくらか體質的意義をも含んでゐるが、主として文化的意義を帯びてゐる。デニケルは人種の外に、人種群、或は社會群 (Ethnic Group) といふ語を用ひ、普通に民衆、民族部族など呼ばれてゐる人種群といふ語の意義を注意深く調べて見ると、言語、生活様式、習俗などがその内包をなしてゐると同時に、二個以上の群に於いては、其各々に體質型式の同一特性を見出すことを指摘した。彼れはかうして、人種群を以て數個の人體學的單位 (Somatological Units) の混淆であると定義した。デキソン學派に對して、かうした意見の所有者をデニケル學派 (Denikerian School) としふことが出来る。デニケルの所謂「人種群」

中には民族も含まれてゐる。して見ると民族をも、矢張體質と文化との混淆と見なければならぬ。

しかし人種を體質的特性に基づくものとすれば、民族などの社會群は文化的特性に基づくものと見た方が都合がよい。ハットン教授は人種に伴ふ人種的、文化 (Racial culture) がなしいといつてゐるが、さすれば其反對に、文化に伴ふところの文化的、人種 (Cultural race) がなしいともいへる。人種は血屬關係であり、民族は社會關係であるといへる。勿論、兩方の一致してゐる場合もあらうけれど、それは除外例であるといはねばならぬ。

一例すれば我日本帝國の如きは、其民族にアイヌ、日本人、朝鮮人、漢人、インドネジャ人、オロツコ、ギリヤークなどの諸種族を含んでゐる。日本人と朝鮮人とは曩に分離して各々の國家を立てゝゐたが、人種的には最も密接な關係を有つてゐて、キーン教授の如きはそれを一個の「鮮日人群」(Koreo-Japanese Group) と呼んでゐるほどである。オロツコも鮮日人と同じくツングース族に屬する黄色人種であるが、ギリヤークはそれらよりも古い舊アジヤ族 (Palae-Asiatic

People) であり、漢人も黄色種であるが、全く文化を異にした種族である。またアイヌは白人種に屬して居り、インドネジャ人は白黄兩人種の混淆と見て差支へない。更に日本人——嚴密にいへば近代日本人 (Recent Japanese)——の如きも、其構成要素を調べて見たならば、舊アイヌ、ツングース、漢人、印度支那人、インドネジャ人、ネグリトの六種族の混淆によつてつくり上げられた亞種族であるといふことが出来る。しかし、それにも拘らず、日本民族は現に一國家をなして統制ある社會生活を營んでゐる。けれども、其文化——廣い意味の文化から云へば、大體に於いては統一があるが、部分的には尙ほ統一がついて居らず、場所によつて若干の差異を見出すであらう。こゝで起るのは文化とは何ぞやの問題である。

第三節 文化と其輪郭

文化の語は、文明の語と共に、人々によつて不用意に用ひられて居り、従つて其意義は時と場合と人によつて甚だしく異つてゐる。けれども、人類學者、社會學者、史學者などが用ひる場合には、文化の意義を限定して生活様式 (Life-mode) といふ風に解釋する。キッスラア教授は文化についていふ、『文化は民衆の生活様式の意である。たとへばエスキモーやホッテントットは、フランス人やイギリス人に比べて、自分自身に有つてゐる文化が少くない。實際各自を比較して見ると、エスキモーとホッテントットとは、英人を佛人に比較する場合よりも遙かに多くの、大きな獨創 (Originality) を有つてゐる。其理由は英國に於ける生活圏 (Life-cycle) が佛國に於ける生活圏に比して大差がないのに、エスキモーの生活圏はホッテントットの生活圏に比して、共通の點が少いからである。すべての個人活動を含んでゐるところの全生活圏が基性的現象で、其基性的現象を文化といふのだ』と。つまり、キッスラア教授の考へでは、文化は或人種若しくは或部族の生活様式である。これを他の言葉で云ひあらはせば、或一定の区域内に共同の生活様式があり、それを一個の生活圏といふ。一個の生活圏内に存在する生活様式は多くは共同で、個人によつて異つてゐない。それが即ち文化であるといふことが出来る。

文化、即ち共同の生活様式は、世界で見ればいくつもあり得る。東洋でいへば、日本のものと朝鮮のものとは多少異つてゐるから、これを日本文化、朝鮮文化といふことが出来る。また支那のものを見て、それをシャムのものといふと、其間にいくらかの差異があるから、それらを支那文化、シャム文化といふことが出来る。然るにそれらの日本、朝鮮、支那、シャムの各々の文化には、それぞれ相異點がありながら一致してゐるところがあつて、食物は米を常食とし、宗教は佛教を信じてゐるといふやうな風で、それを一つに考へられないこともない。そこで、それらを一つに纏めて見ると、そこに一個の東洋文化(Oriental Culture)といふものが成り立つ。此東洋文化を、歐米諸國に共通の生活様式に比べて見ると、そこに非常な差異があり、食物は肉を主とし、宗教はキリスト教を信ずるといふ點に於いて一致點を見出す。そこで、それらを一つに纏めると、そこに一個の西洋文化(Western Culture)といふものが成り立つ。此西洋文化は米洲に於いても營まれてゐるから、一には歐米文化(Euro-American Culture)とも呼ばれてゐる。即ち大きく纏めると、世界は東洋文化と西洋文化との二

つに分れるばかりである。

然るにこまかく分けて見ると、大抵の民族は民族特有の生活様式を持つてゐて、それによつて東洋文化をいくつにも分けることが出来るやうに、西洋文化をもいくつにも分けることが出来る。イギリスとフランスとドイツとは、生活様式が大體に於いて一致してゐるけれど、仔細に觀察すると若干の差點を見出すが故に、嚴密にはイギリス文化、フランス文化、ドイツ文化と分けることが出来る。故に生活圏には大小の差があるといつても差支へがない。

生活圏、即ち文化の發生に動因をなしてゐるものは地的環境である。廣くいへば人類は、狭く云へば民族は、生活の資源を要するが故に、其生活資源の獲得を周匝して一種の生活様式を形成する。然るに生活資源は土地の供給するものであるが故に、生活様式は土地を離れて存在しない譯になる。結局、地的環境が生活資源を規定し、生活資源が生活様式を規定する譯になる。

たとへば山岳地帯、森林地帯に於いては、民衆は其生活の資源を狩獵に求めなければならぬ故に、山岳的(Montanic)、森林的(Dendral)生活は、狩獵生活様式(Hunt

ing life-node) を産み出し、河川の (Potamic)、湖沼的 (Lacustrine)、海洋的 (Oceanic) 生活は、漁撈生活様式 (Fishing life-node) を産み出し、草原的 (Steppe) 生活は、遊牧生活様式 (Nomadic life-node) を産み出し、平地的 (Plane) 生活は、農業生活様式 (Agricultural life-node) を産み出し、かうして人類の文化は、數千年、或は數萬年の間に非常の進化を見出した。故に古代に於いては人類は、殆んど全く自然の支配を離れることが出来ず、自然の威力下に屈服して其生活様式を造り上げた。其自然の威力を地理學者は、地理的制限 (Geographic limit) と呼び、それを人類が打破することの出来ないものであるといふ風に考へる。

此地理的制限と人類との關係を中心として人類を観る時、それはウイールカントもいつたやうに二つに分けることが出来る。

一、自然民衆 (Naturvölker)

二、文化民衆 (Kulturvölker)

が即ちそれであつて、前者は全然地的制限を超えることの出来ぬ民衆、後者はそれを超えようとする民衆である。此中間に自然と人類の力が互格の状態

にある段階を設けて、

三、自然文化民衆 (Natur-kulturvölker)

といふことが出来る。第一は即ちデニケルの所謂『野蠻人』 (Savage people) であり、第二は『文明人』 (Civilized people) であり、第三は『半開人』 (Semi-civilized people) である。

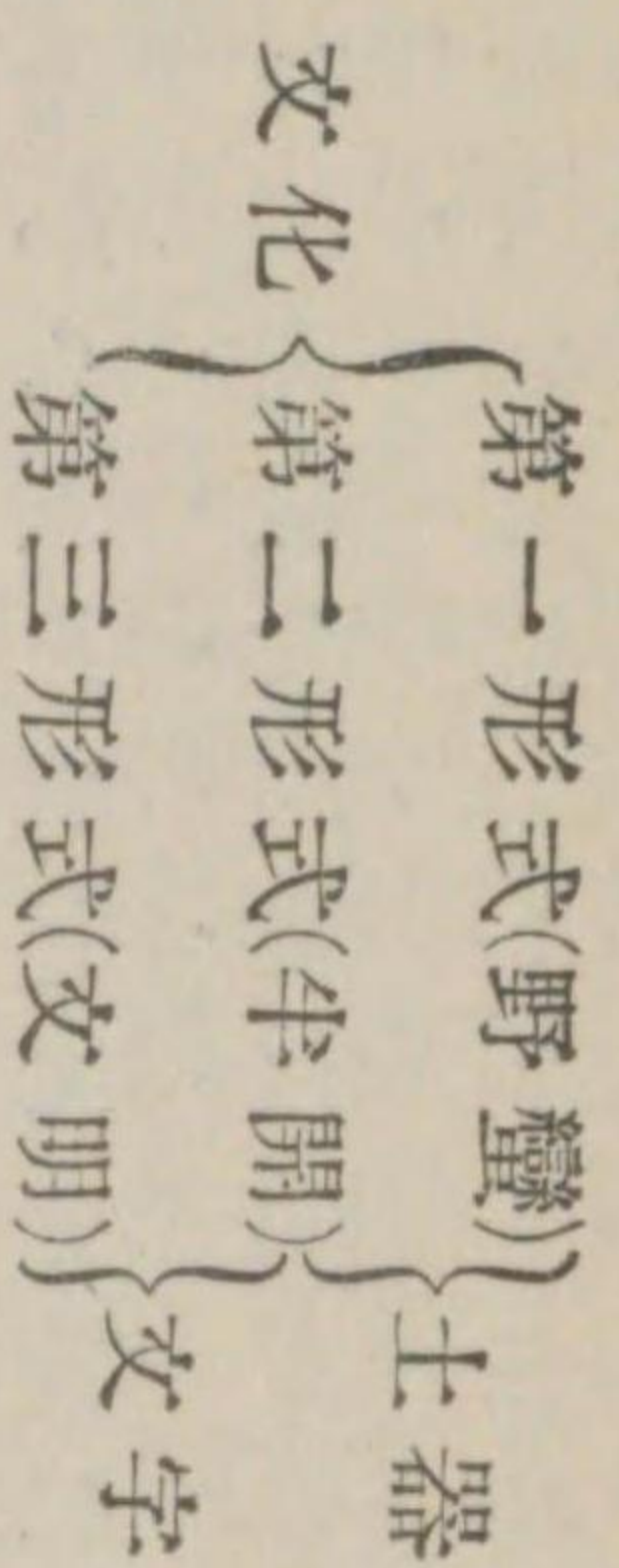
(一) 野蠻人とは進歩の遅々たるもので、文字は有たないけれど、ともすれば繪畫文字を有つて、數百乃至數千人の小群團を作つて生活する。彼等は狩獵民衆と淺耕民衆とに分けられる。ブッシュメン、オーストラリヤ土人、フュージヤンの如きは狩獵民衆に屬し、北米インディヤン、メラネジャ土人、ネグロの大部分の如きは淺耕民衆に屬する。

(二) 文明人とは迅速の進歩をなして、發明力と改造力とが優勢に働き、個人の自由を基礎とした國家を作り、數百萬乃至數千萬の民衆が一團をなして社會を作つてゐる。音標文字と進歩した文學とを彼等は有つ。彼等の經濟状態は、特に工業主義 (Industrialism) 及び世界貿易主義 (Cosmopolitan Commercialism) に

よつて特色づけられる。たとへばヨーロッパ人、北米合衆國人、日本人の如きはこれに屬する。

(三) 半開人は前二者の中間に位する民衆で、遅いながらも多少の進歩をなし、保存の力を有ち、數千人乃至數萬人から成る社會または國家を形成してゐる。彼等は表意文字、或は音標文字を有ち、また進歩しない原始文學を有つてゐる。彼等は淺耕民衆と牧畜民衆との二つに區分せられる。支那人、シャム人、アビシニヤ人、マライ人、古代エジプト人、ペルウ人の如きは前者に屬し、蒙古人、アラビヤ人の如きは後者に屬してゐる。

以上の三つが文化の三段階で、それを考古學者は文化時代 (Culture age) と呼んで、時間時代 (Time age) から區別する。現代に於いても尙ほ野蠻的段階にゐる民衆があるかと思へば、反對に古代に於いても文明的段階にゐた民衆があつたから、文化時代は嚴密に時間時代から區別せられねばならない。デニケルは文化時代を分割する爲めに二つの文化的特徴を選んだ。それは即ち土器と文字との二つで、



の如く、それらが時代區劃の標準となり、土器が野蠻と半開とを分ち、文字が半開と文明とを分つといつてゐる。

そこで問題になるのは、生活様式といふものゝ内包である。或生活圏内に共通の生活様式とは、一體どうしたものの意味してゐるかといふ疑問が起つて来る。これについてキッスラア教授は『文化綱目』(“Culture Scheme”)を作つて、其内包を表示した。即ち、

- 一、 言語。
- 二、 物質的特性。
- 三、 藝術。
- 四、 神話及び科學的知識。
- 五、 宗教的行事。

- 六、 家族及び社會組織。
- 七、 財産。
- 八、 政府。
- 九、 戦争。

かうした風に文化即ち生活様式は、單に食住衣のやうな物質的特性に限らず、多くの精神的特性、たとへば藝術、宗教的行事、社會組織のやうなものをも含んでゐるのである。だから野蠻と文明との差異は、以上の九綱目の屬する段階によつて定まるもので、その發達と否とが段階を規定する標準となるのである。

ラッチェルもいつたやうに、文化の創造には天才の力を借りなければならぬ。人類が出來た時、人類にはどんな文化もなかつた。若し、人類が人猿共同の祖先から人と猿とに分枝したものであるとするならば、人類が出來た時にはそこに人猿共同文化 (Common culture of man and ape) があるばかりであつた。これを人類文化 (Human culture) に進化させたものは、いふまでもなく人類の天才であつた。

野蠻人の間にも突變的に天才が現はれて、周囲の人々の考へつかぬやうなものを作り出すことがあるが、其人が死んでしまへば其技術は其儘で滅んで、其技術を後々に傳へる力がない。若しそれを傳へる力があれば、其天才の技術は後々までも保存せられてゆく筈である。で、文化の成立には少くとも、

- 一、 獨創 (Innovation)
- 二、 傳承 (Transmission)
- 三、 保存 (Preservation)

の三力が働らかなければならぬことが分る。獨創或は改造せられたものが、傳承せられ、保存せられるやうになつて、初めて文化は一般的、共通のものになるのであるから、たとへ一人の天才があつて獨創力を發揮したとしても、それを傳承保存することが出來なければ、それを文化といふことは出來ない。故に、文化即ち生活様式の制約は、一般的、共通のといふことである。一般的性質、共通の性質を有たないものは、それを文化といふことが出來ない。

第四節 地理的環境の影響

常識的に考へても分る通り、地理的環境が何らかの影響を人類に與へず居らぬことは明らかである。早い話が高山へ登れば息がはづんで來る。海岸で日光に曝露してゐると肌色が黒くなる。谷の奥深く入つてゆくと、陰鬱な氣持が起つて來るし、廣々とした湖水の傍にゆくと晴れやかな氣分になつて來る。前者は體質的影響であり、後者は精神的の影響である。

セムブル(Cimbri)は其大著『地理的環境の影響』に於て、地理的影響(Geographic Influence)を四つに分け、

- 一、肉體的效果 (Physical Effect)
 - 二、精神的效果 (Psychical Effect)
 - 三、經濟的社會的效果 (Economic and Social Effects)
 - 四、民衆移動に及ぼす效果 (Effect upon Movements of peoples)
- を擧げてゐる。

(一) 肉體的效果といふのは、人類に及ぼす自然の直接影響であつて、アンデス山脈中の高原に住んでゐる土人が大きな肺や廣い胸を有つてゐるのは、稀薄な空氣の中に生活を營爲してゐる爲めに、幾世代も極度の肺擴張を行つた結果得られたものか、或は偶然變化が其儘保存せられた結果得たものか不明であるけれども、結局、氣候から來たことは疑ひの餘地がない。南フランスのオーベルニュ高原に住んでゐる民衆は身長が低い、それは大陸的な氣候と瘦せた土地の爲めに起る飢饉に基づいてゐる。氣候の影響は漠然としてゐるが、トルコ人の小眼と其覆ひかぶさつた眼瞼とは沙漠の影響を受けたものであり、蒙古のタルタア族の猪首は、寒さに對して首を縮めるから起つたものだと思はれる。かうして所謂『地方化』(“Localization”)が起る。肌色の差異も明らかに地的環境の影響を受けた結果である。

(二) 精神的効果は、たとへば文學、思想、説話の様式のやうなもので、それらは皆地理的影響を受けた結果起つた差異であると見るのだ。エスキモーの考へた地獄は闇と嵐と寒さとの場所であり、ヒマラヤ山麓に生れた釋迦は熱さ

と濕氣とから來るところの倦怠と闘つて、總ての活動及び個人的生活の休止を涅槃 (Nirvana) として彼れの天國を描いた。かうした風に自然が人類の知的、情的生活に影響を與へれば、それはまた其知情意を表現するところの言語にも感化を與へずには居らぬ。

(三) 經濟的社會的效果は、人生々活に取つて極めて重大な地理的影響である。地理的條件が自然的資源の豊かさや否かを決し、それが地方生活に必要な品物の獲得の難易を決し、それによつて一國家、或は集團の經濟的、或は社會的發達に大きな影響を與へると見るのである。自然資源の少く、土地の狭小な場所、たとへば島地やオーシスなどでは、其經濟生活が極限せられ、其社會的集團が擴張を妨げられるが、反對に資源が豊富であり、面積が廣大である場所に於いては、富強な大國家が現はれ得る。

(四) 民衆移動に及ぼす効果といふのは、地理的條件が民衆の移動に便否を與へて、其移動性を極限することを指したもので、山岳、沙漠、湖沼、海洋は民衆の進路を遮り、従つて其發展に特殊の方向を與へるが、河谷や平原は其反對に移

動を容易ならしめる。よし不便と不利とを忍んで、非常に地理的條件の異つたところへ移動したとしても、其風土、氣候の爲めに健康を害して繁榮な社會生活を営むことが出来ないことは明らかだ。

以上はセムブルが指摘した地理的環境の人類に及ぼす四つの影響であるが、一般に地理學者の間には地理的環境を重大視し過ぎる弊害があるやうに思はれる。物資の貧弱な爲めに、土地の羸瘠な爲めに、却つて或民族、或部族の精神を刺戟して、それらを活動的ならしめた例は甚だ多い。レバノン山脈に背後を襲はれ、前面には地中海の蒼波が開け、其中間の狭小な海岸平地に生活した爲めに、フェニキヤ民衆は陸地を見限つて海上に發展し、航海、貿易に於いて古代の世界に覇を唱へたのであつた。しかし、今日では彼等の植民地も國家も滅んでしまつて、彼等はたゞ歴史の上に其名を留めてゐるに過ぎない。それをも地的影響だとすればそれまでの事である。かうしたことは後に述べるとして、とにかく如上の敘述によつて、地的環境の人類に與へた影響が過去に於いて大きく、現在に於いても相當に強いといふとは争ふ餘地がない。

ラツチェルやセムブルやハンチントンや、かうした地的影響を重視する人々を私はラツチェル學派 (Ratzelian School) と呼んでもよいと思ふ。

既に人種が地的環境の所産であり、文化もまた地的環境の所産であるとするならば、人種と文化とに織りなされてゐるところの民族に與ふる地的環境の影響の偉大さを否定することが出来ない筈だ。

最近にハンチントン博士は『人種の特性』といふ書物を著はして、人種と地的環境との關係について詳論し、地的環境は民族に一定の影響を與へるが故に、其歴史的活動もまた一定の型式を帯びることを述べ、漠北の民衆が支那の民衆と數十世紀に互つて戦つた争ひの歴史は、其好適例の一つであるといつてゐる。^(二三)

テトラアの如きも矢張ラツチェル學派の一人で、地と人との關係は不可分離であり、地は人に其恆常的にして顯著なる特性である頭骨を造り與へ、其頭骨はまた人類の文化を作り上げたが故に、頭骨と文化とは不可分離の關係にあり、其關係が同時に地球の上に地理的反映として現はれてゐることを説き、

頭骨示數八〇乃至八四の場所には頭部人工畸形 (Head Deformation) の慣習があり、七四以下の場所にはトーテムズムの社會があり、七六乃至七八の場所にはクヴァード (Covade) が行はれ、七六乃至七八の場所には單石即ち樹て石 (Monoliths) があり、同時に蛇體並びに太陽崇拜 (Snake and Sun Cuts) が行はれ、七六乃至八一の場所には入墨が行はれ、七六乃至七八の場所にはゲール帯 (Gaelic belt) が行はれ、七六乃至八〇には白鳥處女説話が流布し、七六以下にはブーメラングが行はれ、七七乃至八〇には兄弟又は近親の寡婦と結婚する慣習、即ちレヴィレート (Levirate) が存在してゐることを擧げてゐる。^(二四) 注目すべき一新學説である。

第五節 異化作用と同化作用

かうした地理的環境の影響が、人類には人種を作り、文化には差異を生じ、人種と文化とを絡めて民族を作つたのである。故に人種と文化とは、所詮、地理的環境の所産であつて、それらを地方化 (Localization) の一種であるといふこと

が出来る。

既に地方化といふことがあれば、地方化せられたものゝ中心(Centre)があり、従つて中心化(Centralization)といふ現象もなければならぬ。人種にしても、文化にしても、初めに一つの中心があり、それが分布擴大して邊鄙(Margin)に及び、そこに土着固定して地方化するに至つたものである。此關係は生物の屬(Genera)と種(Species)との關係、種と變種(Variation)との關係によく似てゐて、全然進化の範疇内にある現象である。

キリス博士(J. C. Willis)は、種の起原と其地理的分布とに關する研究の結果を纏めて、近頃『時代と地域』(“Age and Area”)と云ふ名著を上梓したが、其中に種と屬との地理的關係を自然淘汰の原則から考察して、次ぎの五箇條の結論を作つた。^(一五)

(1) 種の世界に於ける分布は一般に迅速なものであつた。
(2) 種や屬の世界に於ける現在の分布は、それらの種や屬に取つて可能な最大限を現はすものである。それ故に分布は一段落を告げたものである。

(3) 現存する種と屬とは、原則として彼等の生存するのに適した場所を占領してゐる。

(4) 小地域を占領してゐる種と屬とは、通則としては、死滅しつゝある種と屬(殘物)である。自然淘汰は非常に狭小な地域に彼等を作つて、そこを大多數によつて占領させるやうなことは出来なかつた。さうした場所には、また可也多數の瀕死の形のものがあるべき筈だ。それ故に、これらの地方化した形式は、死滅すべきものだとして假定せられる。

(5) 同一の理由で、種を多く持たぬ小さい屬は、全體的に觀れば、殘物として、また死滅の過程にあるものとして考へられなければならぬ。

以上がキリス博士の種屬と地理的分布との交渉についての結論である。適者生存の原則から割り出して、小地域にしか存在しない種屬を死滅の過程にあるもの、大地域に存在してゐる種屬を、生存に適した土地を占領して繁榮してゐるものと見たのである。かうした自然淘汰説(Natural selection theory)の立場から種屬を觀る方法が、同時に人種と文化と其複合であるところの社會

群、即ち民族とに適用せられるとは勿論で、さうした方法が在來常に地理學者乃至生物學者によつて採用せられ、民族間に嫉妬、競争、戰鬥の種を播きつけたやうなことは必らずしも少くなかつたと思はれる。

人類及び文化の地方化、即ち人種及び特殊文化の興廢を、一に自然淘汰に係ると観るのは、いはゞ自然主義的偏見に陥つたもので、人間を植物や動物と同一の位置に据えて、其間に何らの軒輊をも置かぬことから起つたのである。換言すれば人類が全然自然の支配下にあつて、地理的環境の影響から脱出することが出来ぬと解した結果、當然起つて來るべき誤謬に陥つたのである。

地理學者、生物學者、經濟學者など、唯物論的立場にあるものは、人類の歴史的過程に於ける異化作用を重視し、其同化作用を輕視或は無視する弊竇に陥るのが常であつた。殊に地理的環境の影響を論ずる點に於いて、最も甚しく其弊竇を現はしてゐた。此點は匡正されなければならぬ。

既に人種が現存し、またいくつかの文化圏が存在する以上は、たとへ人種を同一の祖先から分岐したと觀る人類一元説 (Monogenism) を信ずる私達に於いて

ても、人類に異化作用が働いて久しい間に變種が出来たことを認めない譯にはいかぬ。またいくつかの生活圏は初め一つの生活圏から分れたものであると云ふ文化一元説 (Theory of single origin of culture) を奉じてゐる私達に於いても、生活様式に異化作用が働いて永い間に變異が生じたことを否定することも出来ぬ。

一つの原がいくつかの型に分岐するのを、生物學者は異化 (Differentiation) と云ふ。異化作用、即ち地方化を實現する動因を地理學者は地的環境と云ふ。越え難い大山脈、渡り難い大河流、渺茫として果てしを知らぬ海洋、漫々として水を湛へた湖沼、對岸を深く隔てゝゐる大溪谷、其他沮洳地や、鬱林や、氷海や、ツンドラや、沙漠や、雪溪や、地球の表面が有つてゐる色々の形貌、姿勢は、それにくつもの自然的境界を作つて、其境界内に生物を固定、土着せしめ、それの異つた氣候、風土を以て、それ々に固着した生物を地方化し、體質に於いて變種を、文化に於いて特性を帶ばしめるに至つたことは疑ひの餘地のないことである。此事は既に前節に於いても述べた通り、學界の定説になつて居り、生

物學的にも史學的にも確乎たる事實であるから、そこには最早や議論の餘地がないのだ。

けれども、かうした異化作用の蔭に、大きな同化作用の働いてゐたことが殆んど全く忘れてゐたことも事實である。ラッテヘル派の人類地理學者は、あまりに地的環境の及ぼす異化的影響に重きを置き過ぎ、同時にそれが及ぼすところの同化的影響を軽く視過ぎたことを注意しなければならぬ。

人類はどんなに進歩しても、固より動物界の一種屬たるに過ぎないけれども、たとへそれが動物界の一種屬であつても、それを他の動物と全然同視してはならぬのは争ふべからざる事實である。絶對的差異ではなく、相對的差異に過ぎないとしても、人類は其腦髓の特殊化に於いて、他の動物から甚しく異つてゐることは認められねばならぬ。此特性が人類をして他の動物から異らしめ、従つて他の動物のやうに全然自然の從屬である地位から脱出することを得しめたのである。一例すれば大河川、大海洋の如きは、他の動物に在つては殆んど全く通過することの出来ない障礙であり、それらによつて動物は

異化を促進したけれども、人類に在つてはそれらを利用して同化を促進したことが歴史的事實である。障礙を轉じて後援とするやうな進歩は、ひとり人類が生物界に有つてゐるところの特權であつた。

かうした地理學説の缺陷を看破し、人類の歴史に於いて特に優秀の成果を挙げ得た交通について、最近に『歴史地理學緒論』(『A Geographical Introduction to History』)を書いたストラスブルグ大學教授フェツヅル(Lucien Febvre)は(16)『國家は常に路線、其他交通の種々の手段を含んだところの方法によつて形造られてゐる。何故なれば此路線や交通なしに、人類は如何にして、粉碎した自然單位の岩滓から、其生活に適した同種結合(Homogeneous ensembles)を再造することが出来ようか。ちよつと考へても、路線網の存在は、能動的にして熱心な自然と人類との協同を必然含んでゐるやうに見える。國家の眞の構成には先づ通路を規定し、それらを規則的なものにしなければならぬやうに見える。他の言葉で云ひ現はせば、路線の問題は、地理學上の問題であらねばならぬやうに見える。然るに多くの地理學者は此主題に光明を放射してゐ

ない。ラッチェル派の人々は、此問題に注意を拂つて、民衆移動の研究に没頭し、或溪谷、或低地、或峠は路線であつた、或山岳、或海洋、或沙漠は反對に民衆の移動に對する障礙であつたと指摘する機會を有つたに相違ない。けれども一人の旅行家や少數の駱駝隊や古代の軍隊やが辛うじて通過し得たやうなもの、民衆の移動に取つてさほどの利益はなかつた』と。

かうして彼れは貿易路線 (Trade Routes) の存在を論じ、宗教及び知識路線 (Religious and Intellectual Routes) の存在を論じ、政治路線 (Political Routes) の存在を論じ、最後にヴィダル・デ・ラブラーシュ (Vidal de la Blache) の言を引き、所謂『交通路』は非物質的のもので、大國家の起原、大きな國家的實體の起原の中には、其路線が横たはつてゐる。初め、電氣の火花のやうなものが村々を通じて走り、それが村々を交通せしめて、遂に村々の間に臚ろげな一つの聯盟を作り上げて、他の可能性を拒否する爲めに、彼等を單化せしめるに至つた。しかし、かうした非物質的道路の上には、物質的の道路——石やセメントの堅固な公道が敷かれ、てあらねばならぬ。イタリヤはアッピヤ道 (Appian Way) 及びフラミニヤ道

(Flaminian Way) が出來て、南北兩端を結合した時に一國となつたに過ぎない。

フランスもまたケルト道 (Celtic Road) 即ちローマ街道 (Roman Roads) の前身が國內に擴があつた時、交通の大潮流が發生、展開し、フランスの統一を支持することが出來たといつてゐる。フェッブル教授は恐ろしく心理的な觀察を交通路の上に加へて、それを非物質的なものとし、物質的な道路は心理的通路の上塗りに過ぎないものと見たのである。

それにしても、物質的な上塗りがあつた以上は、私達は決してそれを見逃してはならない。其物質的の路線として、私達は河川、湖沼、海洋の如き水線、平地、溪谷の如き陸線を指摘することが出来る。これらは非常に古い時代以來、フェッブル教授の所謂『電氣の火花のやうなもの』を或地點と他の地點との間に流走せしめて、兩地間を結合聯盟せしめ、相異つた人種と相異つた文化とを混淆せしめる同化作用を働いた。此同化作用 (Assimilation) は、決して自然、即ち地理的環境の作り得るものではなく、地理的環境を利用して人類の作つたところの心的所産であつた。即ちブラーシュの所謂『非物質的の存在』 (Immaterial Thing)

第六節 地理的制限の崩壊

上述の如く、非常に古い時代——人類の力がまだ十分自然の力に對抗の出
來なかつた頃から、換言すれば先史時代の昔から、人類は地理的環境を超越し
ようとするデシデラタに満たされて其生活を營爲して來た。此デシデラタ
があつた爲めに、人類は人類以外のものが有ち得ないところの特化した脳髓
の所有者となることが出來たのであつた。

人類が地理的環境を超越するといふのは、地理的制限 (Geographic Limit) を打
破することである、地理的支配 (Geographical Control) から自由になるとである。

マントース (Mentone) に近いクロー・マニョン 洞穴から、メクラガヒ (Periwinkles)
で作つた頸飾りが発見せられたが、其中には今日北海で産せられるプルブラ
(Purpura) ツリテラ (Turitella) フスス (Fusus) の如き貝殻が混つてゐるので、かうし
た古い時代に歐羅巴の南北に路線が開け、それを通して交通の行はれてゐた

ことが知られる。またラウゼリー・バッセ (Languerie Basse) で發掘せられた人骨、
即ち『碎けた人』 ("l'homme écrasé") の傍には、子安貝に屬するピルム (Cypraea pyrum)
ヤルリダ (C. Iurida) が発見されたが、それらは無論マジック的裝飾として用ひ
られたもので、それらを此骨骼の所有者が交易によつて地中海方面から輸入
したことに疑ひがないとしたならば、中ヨーロッパと海岸地方との間に、交通
の路線がマダレーン文化時代に既に開かれてゐたことを想像しなければな
らぬ。

これらの古い石器時代に於いても、既に人類は異化して變種を生じ、そこに
白色人種の祖先の一部と思はれるクロー・マニョン人種 (Crémagnon Race) と黒
色人種の祖先の一部と思はれるグリマルチ人種 (Grimaldi Race) とがあつたの
に、地理的環境の力を打破して、そこにないところのものをそれが有るところ
から輸入して、有無を均化したといふところに、生活様式の同化作用が行はれ
てゐたといふ典據が見出される。

エジプトの歴史の曙を知るものは、ニル河が上、中、下の小國家を打して一丸

としたエジプト帝國を作り上げる動因になつたことを知るであらう。ニル河の上流と下流との交通が、物質的にも非物質的にも、其間に住んでゐるところの民衆を聯盟せしめて、遂に古代史上の第一帝國を出現せしめたのだ。同様の歴史的事實は、チグリス、エウフラト兩河に挟まれてゐるメソポタミヤの進化史を見てもまた發見せられるであらう。

マケドニヤ王アレキサンドルの印度遠征や、ハンニバルのイタリア攻伐や、アシヨカ王の佛教宣傳使僧派遣や、漢代に於ける張騫の西域巡察や、さうした歴史的事實は、或點までは、異つた民衆の生活圏の均化運動で、そこに若干の文化混淆と人種混淆とが行はれる動機、動因を造つた。かうした生活圏の均化運動は、たとへ歴史上にどんな記載を有つてゐないとしても、それが時と處とに拘はらず、常に不斷に行はれて、今日のやうに輪郭の不明瞭な世界人種と世界文化とが造り上げられたのであつた。

かうした見地からすれば、一つの原から人種が出來たやうに、一つの原からいくつもの生活圏が出來たが、それらは地理的環境で出現を見たもので、明ら

かに自然の異化作用の結果であるけれども、同時に人類の同化作用が其間に働いて、異化したものを同化しようと努力したことも事實である。

ヘーゲルも考へた如く、人類の知力が進めば進むほど、自然の力に屈服する度合が少くなつて、反對に自然の力を人類の力に屈服せしめようとする。現代は少くとも人類が自然に打ち克たうとする時代であつて、これを地理的關係に引直して考察すると、人力の爲めに地理的制限が打破せられようとしてゐる時代である。少くとも地理的制限は今日崩壊し始めた。越えることの出來なかつた高山には隧道が穿たれ、通ることの出來なかつた深谷には橋梁が架せられ、渡りも潜りも出來なかつた海洋には船艦が浮べられてゐる。十九世紀の人力がどうすることも不可能であつた地理的障礙には少しも觸れることなしに、人類が其飛行機を以て空中に彼等の通路を求めた。電氣は人類の爲めに支配せられ、太陽は人類の爲めに其光線を利用せられてゐる。寒地にはヒーターがあり、熱地にはクーラーがあつて、氣温をすら人間は支配してゐる。今日は人力の支配し能はざるものがなからうと見えるまでに、自然

力、特に地理的環境の力の崩壊し始めた時代である。それを今日誰れが——どんな保守的識見に囚へられてゐる人でも——否定するだけの證據を提出し得よう。

地的環境の力を重視し、現状に甘んじて人類の向上を希はないところの一部の人々の間には、人類が太陽を支配し得ぬといふ理由から、日本人は米を作つて、蠶を飼つて、旨い米の飯を食つて、柔かい絹の着物を着ることを改めてはならぬ、何故なればそれは日本人が逢着してゐるところの地理的環境であるからだといふ。しかしながら、米も絹も共に日本人が遠い古代に於いては有たなかつたところのものである。それらを有たなかつた私達の祖先は、それらを南方から輸入して此群島に移植飼育し、幾世代をかさねてそれらを日本の地理に適するやうに變質せしめたのである。日本人の基調をなしてゐるツングース族は、移動性 (Mobility) と適應性 (Adaptability) とに富んで、さうした動物の栽培と飼育とに適し、殊に栽培に於いては世界の諸人種を超えて優秀な手腕を有つてゐる。サンフランシスコの日本移民が百合王を出し、馬鈴薯

王を出し、葡萄王を出したことは全く其特性を發揚したものである。

元來、米は印度のデカン半島を原産地とする禾本科水生植物で、日本のやうな火山島には不適當な性質のものである。それを私達の祖先は此群島に輸入して、岩石礫角の土地に籾段耕作をしてそれを培養し、今日に到つては先進諸國にないほどの多數の品種を造り出すまでになつた。米は元來が熱地の産である故に、日本の北部の如き寒地には適しないのに、色々と工夫して東北地方は勿論、北海道でもこれを生産し、最近にはカラフトの留多加村ではそれを栽培して若干の收穫を見るまでになつた。我邦に於ける米の栽培の歴史を見るだけでも、私達は地理的制限が崩壊しつつあり、人類の知力や情力や意力が自然に打ち克つてゆく過程を確實に知ることが出来る。

第七節 結 言

私は人類が最早や地理的制限を打破し得る地位に達したことを説いた。それは人類の近世の努力が、地理的環境に異化作用を營ましめる力を與へた

距離と時間とを短縮して、相異つた生活圏を、同一生活圏内と相異ることなき距離と時間とに齎らした結果得られたものである。

物質的勢力を重視して、地理的環境の偉大さを力説したラッチェル學派のセムブル女史すらも、近世のかうした變化を論じて、今や歴史的移動の第一効果である異化は消滅し、其第二効果である同化が出現したとを説き、「世界の人口は稠密となり、交通の機關は改善せられ、地理的隔離は段々と柔らげられて、地球は全く其隅を失つてしまつて、どんな部分も皆交通の圏内である」といつた。¹¹⁰これは距離の短縮を指摘したものであるが、此外にまだ時間の短縮がある。従前に於いて一箇月を要した旅程は、汽車に於いて一日の旅程に短縮し、飛行機に於いて二時間の旅程に短縮した。

距離及び時間が人類に變種を作り、變種に部族を生じ、従つて方言やら土俗やらに發生を與へたのであるが、それらが短縮されてしまへば、方言や土俗やは發生する暇がなく、既に發生したものは次第に特性を失つて、最も勢力の強い中央の形式に統一、均化されてしまふに相違ない。此意味に於いて、近代文

化は古代文化と反對の現象を呈してゐる。古代文化は或中心から末梢に分布せられるところの地方化型式 (Localizing type) であつた。然るに近代文化はいくつもの末梢から中心に統一せられてゆくところの中央化型式 (Centralizing type) である。

此現象の説明は新しい進化論によつて提供せられた。即ち自然淘汰による通常の進化は、自然の力によつて生物が進化せしめられたものであるが、人為淘汰によるべき特殊の進化は、人間の力によつて人類が其欲求するところに向つて進化するものである。人類はたしかにさうした進化の途上にある。人類は今や昔の地文と人種、民族と其文化との關係を打破して、新しい聯盟の三角關係を此地球上に作らうとしてゐる。フェッブルが交通について暗示したところの『偉大なる地理學者』のみが知り得る新關係が、人類と地文との上に造られる日が來てゐるのである。今日は即ち新舊地理學の限界線上にある大切な時代だ。

しかしながら、古代史の場合に在つては、人は大方土地の支配を受け、環境に

よつて大きな影響を與へられた結果、其生活は殆ど全く土地に依存し、世代毎に若干づゝ其支配の壓力を減じつゝあつたといふことぐらゐを認めるに止めなければならぬ。さうした社會生活の研究は、私達に殆ど無意義なやうに思はれるけれど、克明に検討して來ると、それらの中には私達が路を踏み誤らなかつた以前の姿も認められ、また今日まで進んで來る間に、色々廻り路や横路へそれた失敗の過程もまぎ／＼と跡づけられるので、結局、それらは私達にこれから先き進まうとする前途のインデックスとなるのである。此意味に於いて、古代社會研究は興味もあり、有益でもあり、或は義務でもあるかも知れないと私達には思はれるのである。

- (一) A. H. Keane, *Man, Past and Present*, p. 17.
- (二) Keane, op. cit. pp. 18, 19.
- (三) C. Wissler, *Man and Culture*, pp. 228—232.
- (四) Keane, *Ethnology* p. 4.
- (五) R. B. Dixon, *The Racial History of Man*, p. 3.

- (六) J. Deniker, *The Races of Man*, p. 281.
- (七) A. C. Haddon, *The Races of Man*, p. 2.
- (八) 西村眞次、大和時代、五八一—二七一頁。
- (九) Wissler, op. cit. pp. 1, 2.
- (一〇) Deniker, op. cit. pp. 126, 127.
- (一一) Wissler, op. cit. p. 74.
- (一二) E. C. Semple, *The Influences of Geographic Environment*, pp. 33—49.
- (一三) E. Huntington, *The Character of Races*, pp. 148—157.
- (一四) G. Taylor, *The Evolution and Distribution of Race, Culture and Language*.
- (一五) J. C. Willis, *Age and Area*, pp. 228, 229.
- (一六) I. Febvre, *A Geographical Introduction to History*, pp. 316—337.
- (一七) H. F. Osborn, *Man of the Old Stone Age*, p. 437.
- (一八) W. J. Sollas, *A eiant Hunters and their Modern Representations*, p. 538.
- (一九) A. de Candolle, *Origin of Cultivated Plants*, pp. 385—387.
- (二〇) Semple, op. cit. p. 118.

第二章 人種學上の日本人

第一節 日本人と人種學

先づ第一に私達の知らなくてならぬとは、日本人とは何ぞやといふところである。明確にこれに答へようとなれば、人種學的考察を加へなければならぬ。人種學 (Ethnology) はこれまで、體質と文化との兩側から人類の變種を研究する科學であるといふ風に考へられて來たが、最近には單に體質の上のみから研究するものであるといふ風に定義してゐるものもある。デニケル (J. Deniker) キーン (A. H. Keane) の如きは前者であり、ヂキンソン (R. B. Dixon)、ハットン (A. C. Haddon) の如きは後者である。勿論、或程度までは體質だけで人種を究めることが出來ようけれど、基本人種のやうな大綱はそれでわかるとしても、亞人種の如き、更に進んでは其亞人種が混血して出來た民衆の如きは、到底體質だけ

てわかりようがない。殊に、民族 (Nation) といふものは體質的要素と文化的要素との二要素から成立してゐるから、これを體質の一侧からのみ観るのは不十分で、どうしても文化の一侧からも觀られなくてはならない。日本人の場合がそれで、其人種的要素は體質だけでもわかるが、文化的要素は別にこれを考察しなければならぬ。

最近、松村博士によつて日本人の頭形及び身長の研究が發表せられ、また清野博士らによつて古代人骨の研究が發表せられ、私達日本民族の體質的方面は以前に比ぶれば稍々明瞭になつて來たが、それらは日本人の人種的地位にほんの見當をしか與へてくれない。日本人の文化についてはどんな決定をも與へる力を有つて居らぬ。以上、更に文化人類學的研究を加へることがなければ、日本人の進化史は依然として明確にされないであらう。日本人の人種的位置を知る方法は、單に一つだけではない。貝塚や古墳から出て來る骨を研究することも勿論基礎的方法たるを免れないが、現代の日本人について體質的研究を續けることもまた一方法である。現代日本人の體質的研究にし

ても、頭骨、身長からこれを觀察することが出來、また其他の各方面からこれを觀察することも出来る。容貌の如きは其一つで、在來比較的等閑視されてゐたやうであるが、私はそれを却つて重要な人種的一條件であると思つてゐる。私は種々の方面から日本人の人種的地位を確める試みをしてゐるが、其容貌による研究方法の一つを次ぎに記さう。

第二節 近代日本人の體格と容貌

私達日本人を私は特に『近代の日本人』と呼んでゐる。それは昔の日本人と今の日本人とが異つてゐるので、今の日本人を昔の日本人から區別する爲めである。従つて昔の日本人はこれを『原日本人』といつて、今の日本人から區別する。今の日本人は混血民衆であるが、其基調をなしてゐるものはツングース族であるから、混血以前に於ける原日本人はツングース的であつたと思はれる。

試みに東京驛頭に立つて、往く人來る人を視察して見ると、どこか知ら共通

した點がある。其共通した點が『近代日本的』といふ特徴である。これは朝鮮人と異り、支那人と異り、印度支那人と異り、其他の各人種と異るところの日本人の特徴である。然るにどの人を見ても全然同じではなく、眼が異つてゐるとか、鼻の形が異つてゐるとか、丈が高いとか低いとか、髪の毛が眞直ぐてあるとか縮れてゐるとかしてゐる。同じ近代日本人でありながら、何故にかうした相異が現はれてゐるのであらう。此間に對する解決は甚だ容易であつて、近代日本人は混血民衆であるが故に、祖先の血が働いて種々様々の體格と容貌とを現はすのであるといへばそれで足りる。

しかしながら近代日本人を形造つてゐるところの要素が何々であるかを指摘し、その證據を擧げるとは必ずしも容易でない。最近に日本人の體質的研究が大分盛んになつて來て、以前のやうに天から降つて來たやうな話をするものは少くなつたが、それでも其主張はまち／＼で、或者は南方の要素が非常に多いやうにいひ、他の者は北方の要素が勝つてゐるやうにいひ、更に他の學者は日本人は、まるでアイヌの末孫のやうに考へてゐる。かうした風に

學説が今日ではまち／＼であるから、どれを正しい意見であるとは科學的には主張しきれない。けれども私の考察では、近代日本人を構成するところの基本的人種は七種で、其混血割合はちよつと指示するのが困難であるが、大體の姿相からいふとツングース的であるから、それを六〇パーセントぐらゐと見て差支へあるまい。

第三節 日本人を構成する人種的要素

私は日本人を構成してゐる人種的要素を七種であるといつたが、それは、黒、黄、白の三大人種に互つてゐる。今其種族名を擧げて見ると、

- (a) ネグリト族 (Negrito)
- (b) 舊アイヌ族 (Palae-Ainu)
- (c) ツングース族 (Tunguse)
- (d) インドネジャ族 (Indonesians)
- (e) 印度支那族 (Indo-Chinese)

(f) 原支那族 (Proto-Chinese)

(g) 蒙古族 (Mongols)

の七つで、一番初めにネグリト族が漂着し、次に舊アイヌが移住し、それを逐つてツングース族が大移動をなし、南方からはインドネジャ族と印度支那族とが入り、西からは原支那人と蒙古族とが入つて來たと私は考へるのである。

(一) ネグリト族

ネグリト族は所謂『小人』で、印度のベンガル灣中に浮んでゐるアンダマン群島、マラッカ半島、フィリッピン群島、ジャバ、ニウギニヤなどに住んでゐるが、一々名稱は異つてゐても同じ種族で、多少の體質的、文化的差異があるだけ大體に於いては身長一五メートルぐらゐの矮小人種である。若し、これが日本へ漂着したとすれば、それは一番日本に近いところに住んでゐるものではないからぬ。即ちフィリッピン群島に住んでゐるアエタ族(Aeta)でなければならぬ。彼等は恐らく紀元前三、〇〇〇年の頃に、北赤道海流によつて日本

群島の南端、或は東南端に運ばれたらう。勿論、漂着地點をどこと指摘することは出来ないが、薩隅半島とか、土佐とか、志摩とか、三河、尾張、遠江などをそれに擬定することが出来る。舊アイヌが日本へ逃げ入つた時、處々に此短身の種族があるのを見て、小人の傳説が發達して、今日のコロボク・グル (Coropok-guru) 説話が出来たのであらう。

ネグリトの人の種的特色は丈が低く、毛髪が縮れてゐることであるが、日本人の中に時々小人が出来、また髪の毛の縮れてゐるものゝ生れるのは、ネグリトの影響と見て差支へない。或學者はそれをインドネジャ族がネグリトと混血した後、日本へ移住した結果であるといつてゐるが、私はネグリトも直接に群島に入つてゐると思ふ。私は日本の内地、殊に山間に於いて、ネグリトの體格を有つたものが、さほど多數ではないが、群をなして住んでゐるのを見たことがある。

(二) 舊アイヌ族

舊アイヌ族といふのは、今のアイヌの祖先で、現アイヌとは體質も文化も異

つてゐるが故に、私はそれを區別してかう呼ぶことにしたのである。アイヌは一般に學者の信ずるところでは白人種に屬し、ロシヤの農民の或者とよく似てゐるといはれる。中でも千島アイヌは其原型を有つたものだと鳥居博士は主張してゐられる。アイヌの特色は目が深く、肌色が褐色で、毛の多いところである。これらは白人種に見られる特色で、蒙古人種には有たれないところの特徴だ。日本人の中に往々眼の深い、毛のむしやくと生えてゐるものゝあるのは、たしかに舊アイヌの血液の混つてゐるのを證明するものである。

舊アイヌが何時、何處から日本群島に入つたかは不明であるが、私は北方から日本に入つたと考へる。また其年代は日本の各地に残つてゐる貝塚の或物を舊アイヌが遺したものと假定し、貝塚はそれらの日の海岸に作られたものであるから、そこと今日の海岸との距離、海岸の埋まつてゆく比率が分れば、舊アイヌの日本へ來た年代は略々明瞭になる譯である。ジョン・ミルンの計算によると、貝塚の生成は大體今よりも三千年前であるといふが、ミルンの見た貝塚よりも、つと内奥に貝塚があるからして、再計算をして見ると約一千

年を延長せしめて四千年前と考へるとが出来る。そこで、私は大體舊アイヌの群島移住を紀元前二、〇〇〇年頃と推定してゐる。

(三) ツングース族(原日本人)

次に此舊アイヌを逐うて、後からツングース族、即ち原日本人が入つて來た。『原日本人』の名稱は、ツングースを近代日本人の基調と見做すから、混血以前に於いて純粹型を保つてゐたツングースを日本人の原型であると考へた結果命じたのである。ツングースは今日、北は北氷洋から南は亞熱帶まで、西はイエニッセイから東は太平洋まで、非常に廣い地域に互つて住み、或者はツンドラ地帯に於いて、或者は海岸に於いて、或者は山林に於いて、或者は平地に於いて、それぞれ異つた生活を營爲してゐるが、どこへ行つても其土地に適應した生活を生活することが出来たので、此種族が非常に適應性(Adaptability)に富んだ人種であることが知られる。

ツングース族は黒龍江を界にして、其北に住むものを北ツングース族、南に住むものを南ツングース族と呼ぶ。南ツングース族の中にはオロチョンだ

の、ゴルヂだの、ソロンダウルだの、滿洲人だの、こまかい亞種族が澤山あるが、朝鮮人の中にも、日本人の中にも、此種族の血液が濃厚に混つてゐるので、日本人と朝鮮人とはちよつと區別が出来ないほど似通つて居り、キーンの如きは、これを一つの『鮮日人』(“Koreo-Japanese”)と呼び、兩民族を區別してゐない。朝鮮人は支那人よりも日本人によく似た體格を有つてゐるのみならず、言語に於いても殆ど日本人のそれと同一の構造を有つてゐるから、これを同一種族と見做すことは妥當である。たゞ兩者の間に少しの差異があるのは、朝鮮人と日本人との混血の割合が異つてゐる結果で、朝鮮人には支那人及び蒙古人の血液が多く通じ、日本人には他の血液が多く混つた爲めに、兩者の間にいさゝかの差異が生じたのである。

ツングース族は毛が割合に少く、頭は廣頭で、眼は蒙古眼、鼻は中鼻、身長は日本人と大差ないが、滿洲人は一體に身長が大きい。シベリヤに住んでゐるツングース族の中には、日本の農民と同じ姿相を呈してゐるものがある。此種族が日本人の基調となつてゐるといふと、それを嘲笑ふ人もあるけれども、ま

づ日本人の顔を見て見るがよい、あらゆる點に於いてツングース的であることが何よりの證據だ。

(四) インドネジャ族

南方から來た種族の中では、インドネジャ族が比較的優勢である。インドネジャ族は大方南洋諸島に住み、マライ種よりも古い人種で、ネグリの後を逐うて進んだものと思はれる。其住地の北は臺灣だといはれるが、私は臺灣を越えて日本にまで入つてゐると思ふ。日本の古代史に『隼人』といはれてゐるのは、文化的には明らかにインドネジャ族であることが證明せられる。體質的には證據を擧げにくい、臺灣生蕃の中のタイヤル族などに似たものが、日本人の中に可也數多く發見せられる。インドネジャ族は漂着ではなくて、楠などの刳舟で群島に有意的の移住を試みたもので、紀元後にも尙ほ多少は引續き往來してゐたと思はれる。

(五) 印度支那族

印度支那族といふのは、トンキン、アンナム、カムボヂヤ、ビルマなどに住んで

ゐる種族の總稱で、支那の南境である雲南、貴州のあたりに住む苗族も矢張り同一種である。此種族は昔南支那から楊子江にかけて占據し、米作によつて常食品を作つたところの農業民族であつたが、原支那人、即ち漢族の東南向運動に壓迫されて次第に南方に退却したものである。日本群島に米を齎らし、狩獵民衆であつた原日本人をして、農耕民衆に進化せしめたのは、此種族であつたと思はれる。支那南境の青苗の寫眞を見ると、日本人中に時々かうした容貌を有つたものゝあることに想到する。

(六) 原支那人(漢族)

私が『原支那人』といふのは、今日の支那人が混血しなかつた以前の意味で、結局漢族のことを指すのである。漢族は西方から支那大陸に入つたものであるが、其東向運動は既に紀元前一世紀に成功して、其後半には朝鮮半島にも植民してゐるから、半島の住民と共に日本群島に入つたとは確かだ、其移住は歴史時代までも引續き行はれてゐた。日本人中には如何にも支那人らしい、挿入の寫眞に似たものが數多く發見せられる。日本人は支那人から文化的

に多くの影響を受けてゐるやうに、體質的にも多少の感化を受けてゐることは争はれない。

(七) 蒙古人

最後に年代ははつきり分らないが、蒙古人——といふよりは蒙古・土耳其的種族が直接に日本群島に入つたことがあると思はれる。若し此點が承認出來ないとしても、少くとも間接に本人に血液的影響を與へてゐることは疑ひの餘地がない。蒙古人は其頭骨が廣頭で有名であるが、日本人の頭骨には此廣頭的勢力が非常に強く働いてゐる。私の測定の結果によると頭形指數九二といふやうな圓い頭が日本人中にあるが、これらは蒙古人の影響を受けたと見なければ説明が出來ないと思はれる。また容貌からいつても、朝鮮人や日本人の中にはカルマックに似たものが甚だ多いが、カルマックの間に蒙古人のプロト・タイプが現はれてゐるとすれば、日本人には蒙古族の原的姿相が表はれてゐるといつても差支へない。こまかいことは今後の研究に俟たなければならぬ。

第四節 人造日本人の姿相

以上の七種族が混血して日本人を構成したことを證明する方法はいく通りもあるが、それを眼に見えるやうに實證學的に立證することはちよつとむづかしい。私はそこで、々と工夫した結果、七種族の男子正面寫眞を、眼で焦點を合はして同じ種板に撮つて見た。勿論、これは正確に混血の過程を示しはしないけれども、尙ほ各種族の有つてゐる特徴が失はれることなしに、其中の強い勢力が著しく働いて、何種族でもない第二次的の新人種が造られることだけは疑はれない。つまりかうした試みによつて、私は想定上の日本人を『人造』して見たのである。

此複合寫眞の表現するところの面貌は、大體に於いて日本人或は朝鮮人に近いものであるが、日本人よりは寧ろ朝鮮人に近いといはれさうである。しかし、九州の一地方にはかうした表現を有つたものも可也數多くあり、他の地方でも往々にして見受けられる。此寫眞は七種族の混血率を等價的に見た

から多少日本人から異つた姿相が出たが、これは更に優勢なツングースを五回もかけ、ネグリの勢力を減ずるやうな手段を取つたら、もつと日本人に近い面貌が得られるかも知れない。

いづれにしても、此寫眞で著るしい特徴は、(1)眼は類蒙古で、上眼縁がかぶさり、眼元が歐羅巴眼のやうになつてゐないのみならず、日本人に多い片方一皮眼、片方二皮眼が現はれたのは面白い。(2)鼻は中鼻であるが、いくらか廣鼻性が働いて居り、鼻孔が大きく見えてゐるが、鼻梁は割合によく通つて、日本人に多い鼻の形をあらはしてゐる。(3)耳は可也大きい、それは青苗及び漢族のものが多く働いてゐるのである。(4)口は焦點が合はなかつた爲めに、變な形を示してゐるが、ネグリの式の反唇てはないから、黒人的要素の甚だ少いことが知られる。(5)最も著しく感ぜられたのは、左右の頬骨の高く張つてゐること、頬の下部のこけて見えるのは、ネグリの影響らしく思はれる。(6)頭形ははつきり分らないが、ぼんやり現はれて来る輪郭からいふと、狭頭的でなくて廣頭的である。前額の様子などはさほど後退もして居らず、さり

とて突き出た方でもなく、まづ日本人らしい面貌である。額に二筋の皺がよつてゐるのも、日本人によく見られる特徴の一つである。(7)毛髪の點に於いては、髻と鬚とが可也多く見える、これはアイヌとツングースだけにしかないのだから、其感化と見て差支へない。

かうして『人造日本人』の寫眞は、必ずしも成功ではないが、いくら日本人らしい特徴を表はしてゐるといふ意味に於いて、一顧の價値があると思ふ。數字的表示よりも、かうした風の實物的表示は、多少非科學的要素があるとしても、尙ほ一般には分り易くて興味が深い。私は他日、もつと完全な『人造日本人』を製作して見たいと思つてゐる。

(1) J. Denike. *The Races of Man.*

(II) A. H. Keane. *Ethnology.*

(III) Roland B. Dixon. *The Racial History of Man.*

(IV) A. C. Haddon. *The Races of Man.*

(V) Akira Matsumura. *On the Cephalic Index and Stature of the Japanese and their Local*

Differences.

- (六) 清野謙次、日本石器時代人研究。
- (七) 西村眞次、大和時代、五八―二七一頁。
- (八) Riizo Torii, *Les Ainou des Iles Kouriles.*
- (九) John Milne, *Notes on Stone Implements from Ojuru and Haborate, with a few general Remarks on the Prehistoric Remains of Japan.* 1879

第三章 日本古代文化の輪郭

第一節 固有日本文化

西紀前五千年の頃から日本群島に人類の漂着及び移動が起り、紀元前後までにネグリト、舊アイヌ、ツングース(原日本人)、印度支那人、インドネシヤ人、原支那人(漢族)の六種族が我邦に來て占居した。初め彼等は自分達特有の文化に従つて別々に生活してゐたが、二三千年の間に次第に接近して相互に理解し、相互に融和し、遂に全く混血して『日本人』といふ單數で云ひ現はせる混血民衆となつた。此混血民衆の出現した時が、即ち日本帝國の芽の萌ホトかれた時である。其年代は遅くとも紀元三百年頃と計算せられる。其頃には最早や六種族の有つてゐたそれらの文化も、血液と同様混淆し盡して、一種の混淆文化が出來上つてゐたに相違ない。其混淆文化を私は『固有日本文化』と

名づける。學者によつては、日本に固有文化などはない。悉く外來のものだといふが、それは大變な考へ違ひである。

近頃『文化』といふ言葉は大流行で、文化おしろい、文化シャボン、文化臺所などと無闇に濫用されるが、使ふ人によつて其語の意義は區々で、或人はそれを文明と同意義に使用するが、人類學者、史學者、社會學者などの間では、それを生活の様式、即ち暮らし方と解する。然らば生活の様式とは何であるかといふと、キツスラア教授などは之に答へて、言語、物質的特性、藝術、神話及び科學的知識、宗教、社會組織、財産、統治、戰爭の九綱目を擧げ、これらが相集つて、一つの生活様式を構成するのだといつてゐる。

今、原日本人の生活様式——即ち文化を説かうとするに當つて、これらを一—具體的に記述するのは容易でないから、ごく大切な部分——食住衣と社會組織とを簡略に述べることにしよう。

第二節 物質的特徴

先づ食住衣から始める。第一、食物は、原日本人の日本へ移住した時は石器時代であるから、狩獵の獲物が主食物で、粟の實とかマコモの實とかを副食物にしてゐた。鹿、猪、犬、兎といふやうな獸類の骨、魚の骨、貝殻などが古代住居の跡から發見せられるから、さうしたものを食べてゐたことは確實である。日本の神話を見ると、米は高天ヶ原でも作られて居り、天照大神が其耕作を獎勵せられたやうになつてゐるが、植物學者の泰斗フツカア博士の多年研究の結果、米の原産地は印度のデカン半島であることが知れたから、そこから支那地方に輸入し、印度支那人が南支那から日本に輸入したと見ることが出来る。米の別名をウルチといふが、ウルチは佛教以前の『阿闍婆、韋陀』に現はれてゐる古代印度語ウリヒの轉訛である。米が手に入れられるまで、原日本人はコモの實を食つてゐたが、米が來たので、コモを米に乗りかへて、米のことを在來語コモで言ひ現はし、コモに敬稱マをつけてそれをマコモと呼んでゐたのに、コモはいつしかコメと變つてしまつた。マコモは米國人がヲトタ！ライス即ち『水稻』といふ禾本科植物で、シベリヤ、日本、北米に分布してゐるが、それを

アメリカン・インディアンは常食にしてゐる。今日では此草が大分減つたが、あの『潮來出島の眞菰の中で菖蒲咲くとはしほらしや』の歌で知られる通り、利根川流域などには中々多く、琵琶湖岸に於いても多く野生してゐるのを見たことがある。

獸肉、魚肉、鳥肉などは腐り易いが、植物性の食物は腐らないから、貯藏に便利であり、不獵が続いても飢饉のうき目に逢ふやうな心配がない。米を作るやうになつてから、日本人は飢饉の心配がなく、従つて暇を持つことが出来るやうになり、其文化が大に發達したと見ることが出来る。

朝鮮民衆と日本民衆とは兄弟の關係にあるから、米の耕作法まで同じことで、「アラランラン」と歌つて田植をしてゐるところや、また野面で聲を揃へて男や女が、

『チヨ、クンネ、カミボン、エ

ビ、ガム、ト、ヅロ、オンタ

ウージャン、ヅル、ガ

キシシ、マロ、ガー、セ』

などと歌つて田の草を取つてゐるのを見ると、他人の國に来てゐるとは思はれない。此歌は『黒い雲の峰の彼方に、どうやら雨が降り出した。簑笠つけて田圃へ、ゆかうぢやないか草取りに』といふ意味である。五六年前、朝鮮を旅した時のこと、更けてゆく秋の夜長に暗い農村の家々に火影がさいて、甲高い、しかしながら花やかな、男心をそゝるやうな娘の聲が窓から洩れて來た。耳をすまして聞くと、

『タル、キー、トン

クン、ター、クン

チン、ナン、ベンガ、

オン、ジエ、ナ、タ、チッコー

チャン、アル、チャイ、ナー』

といふ歌。其意味は「そんなにとつさりある靱を、こんなのにのろい白で挽く、いつ挽き終つて眠るやら」といふほどの意で、怠け者の歌のやうであるが、勉

強家の日本人でさへ『ヤアレ、ヤレ、ヤレ、此白は重たい白だ。どこの山師が切り出した。ヤレソウダイノウ、何處の山師が切り出した』といふのがある。人情は世界一途、況んや日鮮人は縁の近い親類關係だから、歌まで同じもので、ハヤシの中には同様のものがある。(先刻例に引いた田草取りの歌、『キシ、マロ、ガー、セ』といふのが、如何にも『古事記』の應神紀にある『キヨシモチオセ、マロガチ』といふ大饗の時國栖の歌とよく似て居る。『キシ、マロ、ガ、セ』は『草刈りに行かう』といふ意である。米のことを朝鮮ではサルといふ、日本でサツキ、サナヘ、サミダレ、サフトメといふサは、鮮語サルのルを抜いたもので、同じく米のことである。

第二に住居のことをいふと、大抵の家は今日の掘立小屋同様、柱を地中に立て、屋根の上に搏風木、堅緒木を置いた唯一神明造りであつた。だから『祝詞』に、『下つ岩根に宮柱ふとしき立て、高天原に千木高知りて』とあるのである。日本へ来る前、大陸にゐた時代には、地下の岩窟に住んでゐたから、家のことをイハロ、或はイハレと呼んだ。イへは岩石のイハと同源で、古代にはイバと發

音してゐた。だから、朝鮮では、今日でも家のことをイプといふ。

第三に着物は、初め、鳥の皮や獸の皮を着るといふよりは、それに身をくるくるまきにしてゐたから、朝鮮では着物のことをチュルメキといふが、日本ならクルマキといふところ、クルムといふ語も、コロモといふ語もこれから出たのである。麻の栽培が始まつてから、麻の衣を着るやうになつた。絹は恐らく、米と一所に印度支那人が持つて來たものであらう。キヌといふ言葉は支那字の『絹』の音讀ケンがなまつたものらしいから、漢人から得たかも知れない。

服装は大體新羅人と同じことで、腹の下まである筒袖の上衣を着け、其下に男はカルサンのやうなズボンを穿き、足首の上で結んで、そこに鈴などを縫ひつけて、歩くとチリン／＼音のするのを喜んでゐた。お嬢さんのポックリの裏の鈴と同じ程度のものである。女は下にスカートをつける。そつくり此頃の女學生と同じ風俗で、あの大震災の後、日本は、少くとも東京は、二千年前の風俗に復古した觀がある。どうしてそんなことがいへるかといふと、新羅で

出た壺の繪と、日本の古墳の壁に彫つてある圖とがちやんと一致して、日鮮同俗であつたことが知られるからである。昔は食住衣は勿論、言語までも一つであつたと思はれる。こんな深い兄弟關係だから、喧嘩などはして居られないといふのだ。

第三節 家族から國家へ

藝術、神話、宗教のことも大切であるが、それよりも更に一層大切な社會組織、家族制度、國家成立のことを、これから略述して見よう。一體ツングース族は『家』を重んずる人種で、今日彼等の移住する有様を見ると、『氏』を離れてゆくことがあつても、『家』を離れて一人でゆくやうなことは絶対にない。だから日本に移住する場合にも、必ず家族一同が揃つてやつて來たに相違ない。古代日本語で母親のことを『オモ』といふが、オモに色々の語尾をつけて、重いとか、主にとか、とか、面とか、オホヤケとかいふ。これらの言葉は皆重要な事、重要な場所を意味してゐるから、昔は母親が社會上に重要な位地を占めてゐ

たに相違ない。つまり子女は母親を中心として家庭を營み、母親が家庭全體を支配してゐたから、さうした時代を母權時代といひ、系圖も母親の方の家を嗣いでゆくから、母系繼承の時代ともいふ。かうした時代には父親は附録のやうなもので、權力が甚だ薄かつたから、言葉の上でも父親といふ語の現はれたのは母親よりもずつと後であつたらしい。母親のことをタラチネといつたが、それは『乳を垂れてゐる親しい人』といふ意で、それからタラチメ、タラチヲといふ兩性を分つ言葉が出來たのである。乳房を垂れてゐる男といふのは變な言葉であるが、母親から父親が分岐して來たのだから仕方がない。

朝鮮でも母親のことをオモニといつて、全く古代日本と一致してゐる。段々父親が認められるやうになり、初めて母と父とが對立した時、それを引括めて、『兩親』といふ意味を現はす語がないから、『老人』といふ意味を有つたオヤといふ言葉がつくられた。金澤博士もいはれた如く、オヤは老年のオイと同原で、朝鮮語でもオルン(Olin)は『老』と『親』と二つの意味を有つて居る。

母親、即ちオモがそんなに尊かつたから、母親、即ち家長のゐる建物をオモヤ

といつたのである。子供が澤山生れ、其子供がまた澤山孫を生むと、一軒の家には住み切れないから、オモヤの側に家を建て、それに第二、第三の母親を住ませる、それがワキヤある。オモヤとワキヤとは一つ垣の内に造られ、其中には何軒もの家が出来た。それらの家は皆同一血族であるから、それを總稱してウヂといつた。ウヂとは垣の中うちといふ意味である。

ウヂの支配者母親が氏の上で、それに支配せられる人々を氏人、或は氏子といふ。一家の主婦は今でも「お上さん」といひ、鎮守の社の神さんを氏神といひ、氏神に所屬する人々を氏子といふのは、鎮守の神が氏の祖神であつたからである。かほど婦人がえらかつたのに、經濟の發展と共に、段々男性が勢力を得て、遂に男子家長制の時代になつたのである。

氏が大きくなると、一つ垣根の中には住み切れないから、又別の垣根を造つて、其中に澤山の人々が住むといふ風に、氏は段々繁殖して、いくつもの大家族が現はれ、それらは多く河川の溪谷に沿うて群り住んだ。其群りをムレといつたのが變つて、今日ではムラとなつた。古代語ムレは、ムリ、ムロ、或はブリ、ブ

ルなどともいひ、朝鮮にはさうした名前の所が澤山ある。日本にもムレ、ムロといふ場所が多くあり、武藏、信濃、周防、紀伊などのは有名である。

此ムレ、一名ブリが大きくなるとそれをコブリといつた。コは大の義、ブリは村の義で、今日の「郡」といふ語は其コブリが轉訛したものだ。かうした聚落の發達を見ると、無論一村は一氏であり、一郡も一氏であるべき譯だが、原日本人は自分達同人種のみを愛して、他の異人種を排斥するやうなけちな人種ではない。原日本人の間に、種族の違つたものも入り込み、又同種でも氏の違つたものも入り込んで来て、さうした人々の住み家がないから、それらを家の子、即ち氏子と見做して家の内に收容した。今の言葉で云へば、親分子分の關係で、家族以外、氏族以外の人々を取扱つたから、それを家つ子かこといつたのである。これがヤッコの起源だ。

村から郡へ、郡から國へ、段々原日本人を基調とする集團が大きくなり、出雲國古志國、日向國、大和國などが現はれると同時に、氏族も追々發展して小さい氏と大きい氏とが現はれ、小氏の上を大氏の上が統率し、大きな大氏の上が國

全體を統べてゐたが、其國々が遂に一つに合併して出來上つたのが日本帝國の基礎をなした大和國で、小國家大和と、小國家の聯盟である大國家とを區別する爲めにオホヤマトといふ言葉が現はれた。かるが故に、私は日本國家を家族の延長と見做し、これを Family-State 即ち家族國家だといふのである。

國家の元首をキミといふが、これは神々のカミ、氏の上のカミと同原で、家長の意味である。さて其キミは、最初、小國家にも一人づゝあつたから、それらを統一したキミをオホキミと云つて、普通の君から區別したのである。日本國家が成立、發達してからも、キミ、即ち天皇は、從來通り家族といふ感じを臣民の上に持たれ、役人を大臣、大連、和邇、宿禰などと呼ばれた。大臣とはオホオモ、即ち大母の義であり、大連とはオホムオルンヂ、簡単に云へばオホオヤヂ、即ち大父の義である。政府の大官を母と父とに擬せられたもので、其下位の役人をワニ、スクネといつたのも同様の取扱ひ方である。ワニとはオホアニ、即ち大兄の義、スクネとはスクアニ、即ち小兄の義で、朝鮮では今日でも弟のことをチヨクニといつてゐる位だから、ワニ、スクネは兄弟分といふとに相違ない。

即ち天皇は役人達を父母兄弟に見立て、國家統治の大任に當られたのである。かう觀て來ると、日本は飽くまでも家族國家の特徴を發揮し、自由、公正、平和、親愛の情念を以て同族結合の楔子としたことが知れる。日本の國家起源を征服だとする學者もあるが、私は協同を主要な起源だと認める。

第四節 積極的處生觀

かうした平和の民衆であつたが故に、日本人は餘り戰爭を好まず、出來るだけ平和の生活を續けたいと思つたことは、今も昔も變りがない。古代日本人は積極的の處世觀を有ち、人類の繁榮と幸福との爲めに、よい子を澤山産んで、それを自由に働かせることを生活の理想とした。彼等はあやふやな過去や未來よりも、此確實な現在を重んじ、現世の生活を享樂することを其最善の道徳とした。それ故に、能く忍び、能く働き、苟くも一善あればそれに向つて突進し、物質並びに精神の兩方面に於いて、次第に進歩と向上とを見たのであつた。今や日本は日本の日本、東洋の日本ではなく、世界の日本となつてゐるのだから

ら、私達の祖先が に試みて成功したやうに、私達も亦雄大濶達の精神を以て、單に此國家のみならず、全世界を家族と見做して愛するところの大度量を有する大國民として世界の表に活動しなければならぬ。明治天皇の「四方の海皆はらからと思ふ世になど浪風の立ち騒ぐらむ」といふ大御歌は、實は數千年來私達日本人の經歷して來た思想生活の總結集であるのである。

- (一) Aphorosa de Candolle, *Origin of Cultivated Plants*, p. 385.
- (二) Francis Densmore, *Study of Chippewa Material Culture*, Smithsonian Miscellaneous Collections, vol. 68, No. 12, p. 95 ff.
- (三) 大和田建樹、日本歌謡類聚、下卷、二八九頁。
- (四) 延喜式(六月晦大祓祝詞)。
- (五) 朝鮮古蹟圖譜、卷三。
- (六) 高橋健自、日本原始繪畫、九六頁以下、及び第十七圖。
- (七) M. A. Czapliska, *Aboriginal Siberia*, p. 51.
- (八) 金澤庄三郎、言語の研究と古代の文化、二五、二六頁。

第四章 古代文化の數字的反映

第一節 緒言

私達日本人の有つてゐた古代文化は、色々の方面から、綱目を分けてそれを記述することが出来るが、手取早く一目表式にそれを窺はうとするには、それを數字に直して見るのが一番よい。いはゞ古代文化の數字的關係 (Numerical relation) を見るもので、まことに簡単な方法であるが、その材料を作ることが煩雜であり、困難であるので、まだ其事が行はれないのであらう。其見本として、私は曾て古代人の知識を數字的に表現して見たことがある。以下は即ちそれである。

第二節 『古事記』の新研究法

私達は記紀時代の民衆生活についての知識を、數字的に表現することが出

來るといふ考へを以て、四、五の同志と共に『古事記』の一部について計算を試みた。計算の基礎は、時代民衆の文化を象徴するところの文字で、それらがどれほど『古事記』に現はれてゐるかを檢べたのである。文字は言語の代表で、聽覺的のものを視覺的に變へたゞけのものであるけれど、『古事記』に於けるそれらの使用法は、單に表意的ばかりでなく、音標的でもあるが、それら使用の目的を區別することなしに、それらの各箇を單にそれが有つてゐる本來義に解し、それがすべてゞ幾箇あるかを調査し、類によつてそれらを分類することにした。分類の方法はいくらもあらうけれど、私は便宜の爲めに、

- 一 天地文的現象 (Astro-geographic phenomena)
- 二 氣象學的現象 (Meteorological phenomena)
- 三 動物 (Animals)
- 四 植物 (Plants)

の四つに分けて、上巻から抽出した文字中、これらに屬するものゝ統計を取つた。かうして得られた數字は、出現回数を示すもので、多く出現すればするほ

どそれは時代民衆に親しみを有たれてゐたと見られるから、それらの千分比例を求めて、相互間の關係を求めることにした。これは統計學上の所謂『頻數』(Frequency)であつて、色に直せば頻數の多寡は色差となる。

第三節 天 文的現象

私はそこで得たところの數字を前記の四大別に從うて、次ぎに掲出することにする。

| | | |
|---|-----|----------|
| 天 | 二〇九 | % 298.87 |
| 日 | 一一八 | % 168.34 |
| 山 | 五二 | % 74.36 |
| 海 | 四四 | % 62.92 |
| 島 | 四三 | % 61.49 |
| 原 | 三七 | % 58.61 |
| 河 | 二七 | % 38.61 |
| 水 | 二一 | % 30.03 |
| 土 | 一九 | % 27.17 |
| 地 | 一六 | % 22.88 |
| 野 | 一五 | % 21.45 |

ものでなくて何であらうか。一々についての穿鑿は讀者諸君の意に任せることにする。

第四節 氣象學的現象

次ぎには氣象學的現象についての頻數を求めることにする。

| 氣象學的現象 | |
|--------|------------|
| 雷 | 一二 |
| 雲 | 一二 |
| 霧 | 九 |
| 風 | 七 |
| 夜 | 六 |
| 秋 | 四 |
| 夏 | 二 |
| 雨 | 二 |
| 曇 | 二 |
| 冬 | 一 |
| 晝 | 一 |
| 雪 | 一 |
| 計 | 五八 |
| | % 203.88 |
| | % 189.64 |
| | % 155.16 |
| | % 120.68 |
| | % 103.44 |
| | % 68.96 |
| | % 34.48 |
| | % 34.48 |
| | % 31.43 |
| | % 17.24 |
| | % 17.24 |
| | % 17.24 |
| | % 1,000.00 |

これらの數字を見ると、日本古代民衆は雷について深い印象を受けてゐたことが知られる。雲霧風の現象についても可也に深い注意を拂つてゐたが、雨と曇とは一致し、雪はたゞ一回しか出現してゐない。四季の中では秋が一番多くて千分中の六八九六を示し、夏は其半で三四四八を示し、冬は一七二四を示し、春は全く現れてゐない。生々繁殖主義の信者であつた日本人が春に關心しなかつたのは不思議に見えるけれど、實は農業を主とした故に收穫時季である秋の頻數が大きいのである。夜が一〇三・四四、晝が一七・二四であるとは、いづれの未開民衆にあつても、夜が晝よりも重要性を帯んでゐる如く、日本民衆にあつても同様の傾向があり、儀式などを夜行つたと見るとが出来る。雷の頻數が一番大きいのは、雷鳴電光の現象が恐れられてゐた證據である。但し此表を見て、日本古代民衆は明よりも暗を、晴よりも曇を、晝よりも夜を好んだといつてはならない。晴雨は別として、暗よりも明を好んだことは、第一表に於いて日が第二位を占めてゐるといふ一事によつても證明せられるであらう。

| 水棲動物 | | タビ | 蛤 | ミチ | ススキ | クラゲ | ヒル | 小計 |
|-------------|--|------------|---------|---------|---------|---------|---------|------------|
| | | 二 | 二 | 一 | 一 | 一 | 一 | 二五 |
| | | % 80.00 | % 80.00 | % 40.00 | % 40.00 | % 40.00 | % 40.00 | % 1,000.00 |
| 陸棲動物(鳥類を除く) | | 五七 | | | | | | 五七 |
| | | % 553.47 | | | | | | |
| 鳥類 | | 一一 | | | | | | 一一 |
| | | % 203.91 | | | | | | |
| 水棲動物 | | 二五 | | | | | | 二五 |
| | | % 242.75 | | | | | | |
| 小計 | | 一〇三 | | | | | | 一〇三 |
| | | % 1,000.00 | | | | | | |

以上數字の示した通り、鳥類を除いた陸棲動物の頻數千分比例は五五三四七で、鳥類は二〇三九一を示し、其小計(陸棲動物)七五七三八に對して、水棲動物は二四二七五を示してゐるので、日本民衆は狩獵を主とした民衆であり、漁撈を主とする民衆でなかつたことがわかつて來る。此數字は第一表とも一致を示してゐるやうに思はれる。兎が獸類中で一番大きな頻數を有つてゐるこ

とは、如何にそれが古代人に親しかつたかを示してゐる。恐らく鹿などのやうに大きい動物よりも、小さい兎の方が狩りし易かつたからであらうと思はれる。馬が牛よりも多かつたことも一考を要する。ちよつと斷つて置きたいことは、水棲動物を計算したものが、文字を主とする約束を誤つて語彙を主とした爲めにこゝだけは當初の約束に違つてゐるが、折角の數字だから假りに掲げて置くことにした。これは他日訂正されるであらう。

第六節 植物に關する知識

最後に植物についての頻數を示さう。これも固より完全ではなく、色々訂正したいところがあるが、便宜こゝに掲出することにした。

| 木 | 葦 | 豆 | 稻 |
|----------|----------|----------|---------|
| 二八 | 一一 | 一一 | 五 |
| % 271.83 | % 213.62 | % 106.81 | % 48.55 |

植物

蘿樺賢眞酸檜楡楠橘椋楮薄藍海蘿麻桃萱竹楓草
摩櫻木柝漿布

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---|
| 蘿 | 樺 | 賢 | 眞 | 酸 | 檜 | 楡 | 楠 | 橘 | 椋 | 楮 | 薄 | 藍 | 海 | 蘿 | 麻 | 桃 | 萱 | 竹 | 楓 | 草 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | 二 | 二 | 二 | 三 | 四 | 五 |
| % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % | % |
| 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | 19.42 | 19.42 | 19.42 | 29.13 | 38.84 | 48.55 | |

| | | | | |
|------|------|------|------|-----------|
| 筍 | 葡萄 | 蒲 | 麥 | 計 |
| --- | --- | --- | --- | 一〇三 |
| % | % | % | % | %1,000.00 |
| 9.71 | 9.71 | 9.71 | 9.71 | |

これらの數字を見ると、木が一番多く、葦がそれに次ぎ、豆の一〇六・八一に對して、稻が四八・五五であつて、米食民衆に似合はしくないやうに思はれるが、外に穂として現はれてゐるから一概にさうはいへない、實は穂も計算の中に入らなければならなかつたが、誤つてそれを除外した爲めにかうした不完全なものとなつたのである。植物についての知識が、動物についての知識と同數であつたことは、偶然ではあらうけれども面白い現象で、それらの日に日本民衆が半獵半農の生活を送つてゐたことなども想像せられて來る。海産の植物は極めて少く、陸地のものが多いことも、第一表を説明した時にいつた通り、海よりも陸の民衆で古代日本人があつたことを示すものでなくて何であらう。

第七節 結 語

以上、きはめて大まかにいつたところで、古代——少くとも記紀時代の日本民衆が、どうした生活を営み、どうした自然現象に深い關係を有つてゐたかといふとを、私達は、おぼろげに數量的に知ることが出来る。確實に知るといふことは、それを數字的に表示し得るといふことである。若し私達の祖先の生活についての確實な知識を得ようとしたら、單に記紀を讀んで感じたところの感じ、受けたところの印象などに據らずに、精確な數字に據ることにしなければならぬ。さうした方法の一端として、私は、同志の士の試みた計數を基礎として、如上の表を作つて見たのである。

しかし、これらの數字は試みに作つた第一次的のほんに見本にしかならぬものであるから、これを絶對的のものと思はれないこと、及びかうした不完全なものを活字にすることのなめげさを寛容せられんことを讀者諸君に希望する。

第五章 言語慣習から觀た古代生活

第一節 社會生活の片影

私達日本史——殊に古代史を研究し、古代史の中でも先史時代に重きを置いてゐるものにとつて、いつも最も困るのは立證といふことである。文獻歴史以前は、遺物(Relics)と殘物(Survivals)とより外の材料では證明が出来ないのであるが、民衆生活の或部分に到つては、全く遺物の形となつて残らないから、其證明は考古學的材料に據ることが出来ない。さうした場合に採らるゝ方法は、殘物によつて立證する外道がないが、此殘物ほど當てにならないものは少い。どうにでも解釋のしようによつて解釋が出来るのであるから、それを先史生活の證典とするとは頗る危険でもあり、又困難でもある。しかし、危険だとしても、困難だとしても、それらを採用することなしには先史事實は闡明せ

られないから、已むなく此方法を用ひるのが常である。

殘物の中で、私は手近な言語慣習 (Linguistic Custom) を少々ばかり取扱つて見た。私のやうな素人には、よい辭書もなく、また在來蒐集した語彙も甚だ少いので、比較研究は殆ど不可能であるが、其僅少な材料の中からも、尙ほ必らずしも少からぬ新事實を發見することが出来るやうに思はれる。そしてさうした斷片的の小發見が、いくつもくく集合すると、それらはやがて統一されて、或社會相を表現するところのものとなつて来る。遺物としては残らぬやうな生活状態が、かうした言語慣習で分つて來るといふことは、甚だ覺束ないやうに思はれる方々もあらうが、それは存外頼母しく、且つ確實なものである。試みに二三の例證を擧げて、先史社會生活の片影を髣髴して見よう。

第二節 建築に關する言語慣習

私は今思ひ出すまゝに、建築に關する語彙を拉し來つて、其語原を比較研究し、又其言語慣習が表示するところの古代の本來意義を忖度して見たい。

私達はよく『戸をかてゐる』といふ。私達の戸は遣戸であつて、今日は決してそれを立てないけれど、言葉の上では立てることになつてゐる。これは多分古代に於いて、戸を立てたことがあつたからであらう。葎格子の如きも、いゝらか立てるのに近いが、もつとく以前にはたゞ戸を立てかけるだけの時代があつたのであらう。たとへば八百屋の店で、今日も見られるやうに葎簀を立てかけたりしたのであらう。キルギスや、ブリヤートの天幕生活に於いては、入口は常に此種の戸が立てかけられてゐる。田舎の野雪隠で見られる筵の戸なども、たゞ垂れ下つてゐるのみのものがある。あれらも矢張り戸を立てかけたといふ言語の本義を説明するのに、屈強の一方證になる。中絶或は中斷を意味する國語タツは、矢張り此語と關係が無からうか。中を絶つといふことは、中間に何物かの遮蔽物、或は障礙物を置いたことから起つたのであるまいか。

平生私達は『訪なふ』といふ語を使つてゐる。ちよつと考へると、Oto (唎) + hapu のやうに見えるけれども、『音』といふ名詞が動詞化したものとしては、訪

問するといふ意が生れて來さうには思はれない。戸ぼそを叩くからだといふ人もあらうが、それならノックと同じ意味のタタキといふ言葉でも起りさうなものである。私の考へては、此語はオロッコ語のオエトエ(Ötö)即ち『入口』といふ意味の語に語尾がついたものであらうと思ふ。千葉縣でも、長野縣でも、富山縣でもオートといふ語が残つてゐて、それが表口、或は重要な入口の意に用ひられてゐる。土地の人は色々とその意義を考へて、『大戸』であらうと思つてゐるものもあるが、其中の一人は私の此分解を聞いて、まさしくオートがオロッコ語のオエトエに合致するものであることを承認した。

オロッコは人種學的には日本民衆と關係の深いもので、私達と等しくツングース族に屬して居り、オルチャ及びオロチと同系だらうといはれてゐる。それ故私達の古代語の中には、彼等の現用語と殆ど全く同じものが少らず發見せられる。彼等の家は夏と冬とて構造が異つてゐる。夏の家はカオラ(Käpöla)といふ、冬の家はハーグヅ(Hägdü)といふ。冬の家は穴小屋で、日本の室に匹敵してゐる。私にはオロッコのカオラは日本語のクラと同原から出たも

のであるやうに思はれる。

巢には必ず雛がある。雛があるところには必ず母鳥がゐて餌をくれてゐる。人間の巢には子供がゐて、それに母親が乳をくれてゐる。日本語の Dwell-ing を意味する『住み』は、此『巢』に語尾がついたのである。然るにオロッコ語では、巢を意味する語はオモ(Omo)であつて、日本古代語の『母』を意味するオモ(Omo)、その朝鮮語オモヒ(Omo)と一致してゐる。日本語オモヤは『母家』と解してもよいが、或はオロッコ語オモと同様住居の意があるのであるかも知れない。ともかくも、オロッコ語の『巢』を意味する語が、日本語の『母』を意味する語であることが面白い。

日本の地名に佐那といふのが可也に數多くある。色々に解釋されてゐるが、私はそれをオロッコ語サナ(Sana)と同一視する、サナは『穴』の意である。

今日私達の間では、特別の場合を除くの外、穴居が見られないけれども、古い時代には私達の祖先は穴居してゐた。日本群島へ來てからは餘り穴居しなかつたらうが、大陸にゐた時代には冬期は穴居の生活を送つてゐたに相違な

5. 『家』を意味する *ipe* は、古代に於いては *ipe* (*pe*) であり、それは正しく『岩』を意味する *ihpa* (*ihpa*)、其古代形 *ihpa* (*ihpa*) と同原であるところを想へば、私達の古代の住居が岩石であつたことが分る。此語は朝鮮語の家を意味する *chip* (*chip*)、更に簡單には *ipe* (*ipe*) と同原である。 *ipe* によつて現はされる私達の遠祖の住居は、今日私達の間には『室』となつて残り、また祖先の間には古墳石室となつて残されてゐる。

かうした穴居は或時代には石を疊み、或時代には單に土を掘つて、其上に屋根を葺くだけに止まつたであらう。さうした穴居生活から今日私達の住んでゐるやうな地上の家に住家の形式が一定固着してしまふまでには、恐らく半穴居式の時代があつたであらう。朝鮮半島の南部には、今日でも往々にして半穴居式の家屋がある。それらは古代のサアヴァイヴァルと見て差支へない。私達ツングース族の故郷であるシベリヤ或は滿洲から群嶋に来る中間地は朝鮮半島であるから、そこにさうした中間時代の遺物或は残物が遺つてゐるのに不思議はない。かうした住居の變化は、文獻によつてそれらを證

明することが出来る。即ち『魏志』では馬韓人が形の塚に似た草屋土室を造つて、其上部に戸を設け、一家族が其中に住んだことを記してゐる。また『魏略』では、辰韓人が木を横に累ねて屋を作ることと述べてゐる。此横木の家は奈良の正倉院の校倉に見られる形式で、古代日本では盛んに此形式の家を造つたのである。此形式は今日でもシベリヤから南ロシアへかけて多く見られる形式で、蒙古族の間ではそれをユールタ (*Yurta*) と呼んでゐる。それは塚のやうな圓屋根の土室から一步を進めたもので、初めは六角形であつたものが、次第に四角形になつたのであらう。

第三節 食物に關するもの一二三

古代日本語では、春の暮から夏の初め頃のことをサと呼んだらしい。故に五月のことはサツキ、稲苗はサナへ苗を植ゑる女をサヲトメ、其頃の蠅をサバへといふ。此サの意義は在來不明であつたが、朝鮮語の『米』を意味するサル (*sal*) と同じで、其語尾が略されただけのものであらう。

私達の平生鹽藏して食用とするところの「鮭」を意味する日本語サケ或はシヤケは、アイヌ語の『夏の食物』を意味するサク・イベ(Sak-ibe)の上半サクから來たものであらう。イベがイヒ(飯)の古形イビ(ibe)に似てゐることも興味がある。いづれかが影響されたことに疑ひはない。また出羽の國名は、本來はイデハだなどいつて、無闇といろんな解釋を試みたりしてゐたが、私の考へては『鮭』を意味するオロツコ語ダワ(Dawa)と同原であると思はれる。現に同地方には鮭川といふやうな地名も残つて居り、オロツコ種族さへも或時代まで同地方に住んでゐたことは、私の現在の證據では十分に假定せられることである。

私達の祖先が魚類や穀類やを食べてゐたことに疑ひはないが、さて植物性物質は石器時代にどんなものを食べたらうか、ちよつと不明であるが、私は眞菰(Zizania)を食用したと思ふ。稻實に對するコメの語原は、松村博士に従へば漢語『菰米』(Kumih)であるさうだが、私の考へてはコモと同原で、米が舶來するに及んで在來のコモにマといふ接頭語をつけ、米の方はコモから次第にコメ

に轉訛していつたものであらう。ウルチの語原がサンスクリットのウリヒ(vrihi)から來たことは周知のこと⁽²⁾で、此ウリヒの語は『阿闍婆韋陀』(Atharva-Veda)に現はれてゐる。かうした點から觀ても、米が南方から舶載されたもので、日本固有のものでないことは分る。して見ると、『古事記』などに現はれて來る農耕神話がさほど古いものでないことが知られる。

魚類のことは今日ではウヲといふが、それは正しく朝鮮語のウォーと同じく、共に支那語の『魚』(魚)と同原であらうと思はれる。しかし古代に於いて私達の祖先が魚類のことをウヲと呼ばず、メ、ミ或はヒ、ビと呼んでゐたであらうとが、ヒラメ、サメ、コヒ、エヒ、タヒ、エビ、シビなどの語尾で推測される。ヒラメは平魚であり、サメは狭魚である。タヒは古代語では恐らくトビ或はトミであらう。其事は朝鮮語の『鯛』を意味する現代語がトミであるのを見ても分る。私達の祖先たる原日本人、及び先住民たる舊アイヌが盛んに魚類を食用したことは、貝塚などから發見せられる魚骨の豊富なことによつてそれが證明せられる。

第四節 衣服に關するもの一二三

婦人の腰に纏ふものをコシマキといひ、兩性に通じて寢る時に用ひる着物をネマキといふ。普通にはそれを巻く故にさう呼ぶのだと解してゐるが、私は朝鮮語の『周衣』を意味するツールマーキと同原であると思ふ。古墳壁彫や土器彫刻に現はれる日本民衆朝鮮民衆の着物は上衣と下衣とに分れて居り、其上衣は今日のツールマーキによく似てゐるが、ツールマーキこそは、邦語のクルムといふ語と同原で、『巻く』と『包む』とは共に衣服から發した言語であるやうに思はれる。ツールマーキは恐らく古代に於いては左衽であつたであらう。ロシア人が今日用ひてゐるルバーシカは實は韃靼服で、私達の祖先もあゝした形式の衣服を極めて古い時代には用ひてゐたであらう。日本語コロモも此ツールマーキから出たクルムと同じ性質の語であらう。日本の『衣』を意味する古代語は朝鮮語のオス(○)と同原であつて、たゞソとのみ呼んでゐた。御衣ミツカムソ、神衣カムソなどと呼んだ。またオスヒといふ語も

あつた。オスは『衣』であり、ヒは語尾とも見られ、また『襲ねる』の意を有する朝鮮語の Ssa-hi)とも説けぬことはない。

日本語オビはオロツコ語のオモリ(Omori)と無關係であらうか。兎も角も『負』を意味するオヒの語と一致するところから見ると、長い物を巻きつけてゐて、時にはそれで背中に負うたり、また腰に佩んだりしたことが知られて來る。

被り物の一つである笠は、朝鮮語でも矢張り『カス』である。オコンヅキン(オ高祖頭巾)のコンも似てゐるから、『高祖』は當て字に相違ない。

私達は古代に於ては、大方麻類を着たであらうが、そのことを昔モシとは云はなかつたであらうか。ユモジは『湯麻布』の意で、『緜』とも書かれる。モシは朝鮮語でアサを意味し、日本語ではカラムシ(唐苧)のムシに残つてゐる。多摩川で布を晒した武藏の國名も、實は麻種を意味する鮮語モシシと一致すると云はれてゐる。

動物性物質もまた盛んに用ひられたらうと思ふ。たとへば『古事記』に現

はれてゐる『美智』の皮のミチの如きは、在來海驢など、説かれてゐるが、あれはオロッコ語の *Mōi* と同原で、海豹のことを指したものに相違なく、陸奥の國名も私は矢張り出羽と同じくオロッコ語で解き、其語原に此モエトエを擬しようとしてゐる。魚鳥の皮が着られたともあつたと想像せられる。

第五節 危険と發明との境

かうした風に、食住衣の三方面だけでも、可也多數の生活状態が言語慣習から解けて来る。家族、氏族、國家の組織などを此方法で研究してゆくと、眞に珍しい發見がいくつも出て来る。但し、私には材料が稀少であつて、思ふ存分の比較研究が出来ない。私はぼつとかうした風の研究を續けて、出来るだけ言語慣習から古代の生活状態を窺ひ知りたと思つてゐる。

言語慣習による研究には多くの危険を伴つてゐて、動もすれば非常な誤謬に陥ることもある代り、多くの發見もきつとあるのであつて、ちよつと地獄と極樂との別れ目のやうな觀がある。私の今述べた中にも若干の間違ひはあらうけれど、さうしたことを一々神經に病んでゐるよりは、一步でも先きへ進まうといふのが私の目下の考へである。私は既に各方面のことを言語慣習で研究して見たが、まだ十分といふまでには進んでゐない。他の材料を併せ考へて、眞正の、有りの儘の古代生活を知り得るのはいつの日であらう。

(一) Berthold Laufer, *Sino-Iranica*, p. 373.

(二) 日本外來語辭典、二九六頁。

(三) 金澤庄三郎 言語の研究と古代の文化、九三頁。

(四) 鳥居龍藏 武藏野及其周圍、七三、七四頁。

第六章 古代日本人の住居

第一節 人種と文化との關係

古代日本人といふのは、近代日本人の基調をなしてゐる原日本人のこと、その人種學的的位置は南ツングース族である。私達の考へては、原日本人は今日のシベリヤ、或は滿洲地方から、一は直接に海を横切つて、他は朝鮮半島を経由して、我日本群島へ移つて來たものであるから、朝鮮半島乃至は滿洲地方に残留したツングース族と、我日本へ移動したツングース族とは、分離以前には全然同一の生活様式を有つてゐたと見なければならぬ。従つて群島へ來たツングース族の中、最南端まで往つた沖繩部族と朝鮮部族とは、日本部族を橋渡しとして相互に連絡があるものと見なければならぬ。

人種が同じければ、文化もまた本來的には同じ筈である。そこで、若し朝鮮

日本・沖繩線の上に分布してゐる生活様式が類同若しくは一致するとすると、私達の假定がはつきり證據立てられることになるので、私達は種々の方面から此連絡線上に於ける文化の比較研究を怠つてゐないが、其爲めに若干の證據は既に擧がりつゝあるのを觀る。其生活様式即ち文化の中で、一二の位置を占めるのが住居様式であるが、今こゝにざつとそれについての研究の一端を述べることにする。

第二節 洞穴住居の痕跡

最近の私の研究によると、古代日本人は洞穴に住んだことがあるといひ得る。此假定は久しい前から有つてゐて、その證據を先づ第一に言語學的面から擧げたが、近頃考古學的證據も大分擧つて來た。

第一に言語學的證據といふのは何か。それをごく簡単に述べると、日本語イへ(家)が即ちそれである。イへはイハと同一語根から出たもので、其分岐は次ぎのやうな順序を経て進んだ。

Ip { Ipa, Ifa, Iha, Iwa. (岩)
Ipe, Ife, Ihe, Iwe. (家)

そこで、イへを意味する言葉の中に、イハ或はそれに類似のものが可也に數多く見出されるのである。

Ipa { Ipale; Ipalō. (盤余)
Ipoli; Ipo. (庵)

イハレ、イハロ、イホリの語尾をなしてゐる接尾語は、語尾の母音が異つてゐるけれど、結局一つのもので、其本來義は分らぬが、多分複數を現はすところの接尾語であらうと思はれる。若し複數を現はすものでないとするならば、それは場所を示すものゝやうに思はれる。

第二に考古學的證據といふべきは、日本、朝鮮、滿洲、シベリヤに残つてゐる横穴古墳である。我邦の古墳には、竪穴式のものゝと横穴式のものゝと二色あるが、其本來形は横穴式であるに相違ない。封土が圓い圓塚であらうと、長い瓢塚であらうと、内部をなしてゐる石槨は原則として、

樂道十餘語 || 古墳

といふ構造を有つてゐる。此石槨が即ち古代住居である横穴——岩窟の名残であることは疑ひの餘地がない。越中氷見の洞窟や、福岡縣出雲の古墳は日本群島内に於ける岩窟墳墓の稀な適例である。之を沖繩本島についていへば、其現代の墳墓は大體に於いて龜甲型と破風型との二つに分れてゐるが、今一つそれらの出来る前にあつた原始型式が計へられなければならぬ。それは即ち自然の洞窟或は人工の洞穴に、死體を葬つたもので、それを岩穴型ともいふか。一例すれば北谷チヤン附近に分布してゐる古墳群或は運天港の近くにある百按司墓といはれてゐるものなどは、それにて、此型式は最古のものに見られる。

一體、古墳は死者の死後の生活に要した住居であるから、それを造るに當つては生前に要したところの住居と同一のものを造つたに相違ない。果して然りとすれば古墳は即ち古代住居の型式を其儘現はしたものといつて差支へない。

第三節 木造家屋の系統

ては木造家屋はなかつたかといふとさうではない。ギリヤークでも、アイヌでも、夏と冬とは住居を異にし、冬は地下に穴居し、夏は地上に生活する。前述の岩穴は冬の住居の跡で、今日に傳はつて來た木造家屋が夏の住居の末裔である。

古代日本の原始夏家は天幕であつたと思はれる。地上に立つてゐる生立木の梢を集めて、それらを縛り、其外部に熊の革とか其他の動物或は植物の皮——たとへば白樺の皮などを張つたのが原始的テントで、それを古代日本語ではタムといつた。故に、それに類同した言語がツングース諸支族の間に残つて、互に相關係してゐることを示してゐる。

日本語 Tamu+lo 屯
朝鮮語 Tam 垣
ツングース語 Chum 天幕

蒙古語 Tumu 天幕
支那語 Chin 篷

此中、支那語のチンの如きは、北方民族から輸入したもので、純粹の漢語でなすとは其字がそれを證明してゐる。日本神話に現れて來るクマノヒモロギ(熊籬)などは、明らかに熊皮を張つた天幕であつたと思はれる。日本語タムロは、勿論タムに接尾語ロが加はつたもので、假泊のことを意味したから、それから更にタマリ(控所)、トマリ(泊)などの言葉が出來たのである。

原則として天幕は圓形のプランを有つてゐなければならぬ。従つて天幕から出發したところの家屋は、それが構架式であつても、重疊式であつても、其プランは圓形であるべき筈である。然るに日本家屋、朝鮮家屋、滿洲家屋は、すべて長方形である。圓形から長方形への進化には、

圓形→六角形(或は八角形)→方形

といふ順序を経過した。今これを事實について證據立てれば、シベリヤや滿洲にあるツングース族や蒙古族の天幕は皆圓く、それから系統を引いたユル

タ(Yurt)は圓形であるが、ブリヤート族のものには八角形(Eightsided)のものがあり、またキルギス族のものには六角形(Hexagonal)なものがあり、そして日鮮では殆ど全く方形を呈してゐる。然るに滿洲の穀倉には圓形のものあり、朝鮮の漆谷郡で私の見たものは◎の如き螺旋圓形を呈してゐた。これらは明らかに原始形式の殘存であると見られる。

かうした順序を経て進んだが故に、柱は生立木と同じ工合に地下に掘立てられ、屋根と壁とを樹枝或は蓆の類で張つたのが最初の型式であつたらう。かうした古い時代を跡づけることの出来るのは、關東のノゲヤ、即ち天地根元造りといはれるもの、伊勢二見浦の御鹽殿の鹽釜などであるが、沖繩に於いてはアサギが正しく此掘立小屋である。

アサギは草葺き、無壁の四本、六本乃至十二本の柱を有つた掘立小屋で、普通にはアシアゲ(足騰)の約といはれてゐるが、私は事によつたら、接頭語アを伴つたところの、シキ(石城)或はスキ(主基)ではあるまいかと思つてゐる。これは天地根元造りに一步を進めて、高い柱を有つてゐる點がノゲヤと異つてゐる。

二つの進化形である。(4)以上圓形の天幕の材料が木に變る。平面圖が八角形になる。これはシベリヤのミスシンスク、韃靼のユルタである。(5)アイ族の六角形。

地根元造りに一步を進めて、高い柱を有つてゐる點がノゲヤと異つてゐる。これは天

日本家屋の進化過程

日本の木造家屋は南方系統であるが普通には説かれてゐるが、私は北方系統のものであることを主張する。今其進化過程をキネマトグラフィ的に示して見よう。(1)北ツングース族の白樺の皮を張つた夏家。(2)ユーカギル族の天幕で、(1)の精巧になつたものである。(3)カルマツク族の天幕で、以上二つの進化形である。(4)以上圓形の天幕の材料が木に變ると平面圖が八角形になる。これはシベリヤのミスシンスク嚮鞭のエルタである。(5)アルタイ族の六角形エルタで、(4)よりは二角減つてゐる。(6)それがもう二角減ると、四角形になる。これはゴルチ族の地上屋及び半地上屋である。(7)伊勢二見浦の御鹽殿と鹽釜とで、前者はゴルチの地上家屋に相當し、其紐立は(5)及び(8)に類して居り、後者は半地上屋、即ち半穴居の形式である。(8)ゴルチ族の横に木を累ねた建物で、日本の校倉と同一構造である。

日本家屋の進化過程

日本の木造家屋は南方系統であると普通には説かれてゐるが、私は北方系統のものであることを主張する。今其進化過程をキネマトグラフ的に示して見よう。(1)北ツングース族の白樺の皮を張つた夏家。(2)ユーカギル族の天幕で、(1)の精巧になつたものである。(3)カルマツク族の天幕で、以上二つの進化形である。(4)以上圓形为天幕の材料が木に變るゝ平面圖が八角形になる。これはシベリヤのミヌシク種族のユルタである。(5)アルタイ族の六角形ユルタで、(4)よりは二角減つてゐる。(6)それがもう二角減ると、四角形になる。これはゴルチ族の地上屋及び半地上屋である。(7)伊勢二見浦の御鹽殿と鹽釜とで、前者はゴルチの地上家屋に相當し、其組立は(5)及び(8)に類して居り、後者は半地上屋、即ち半穴居の形式である。(8)ゴルチ族の横に木を累ねた建物で、日本の校倉と同一構造である。

400 以内



(5)



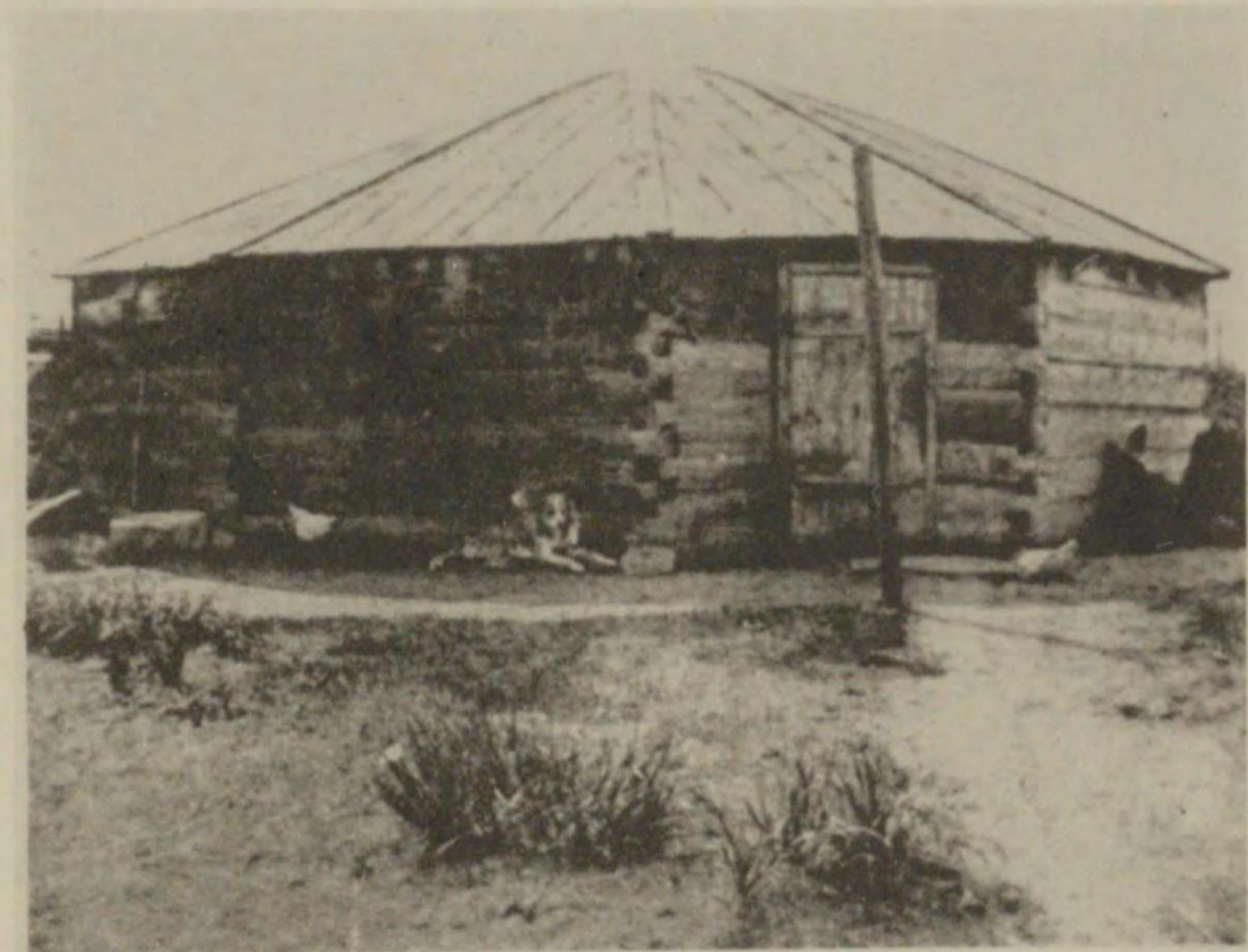
(3)



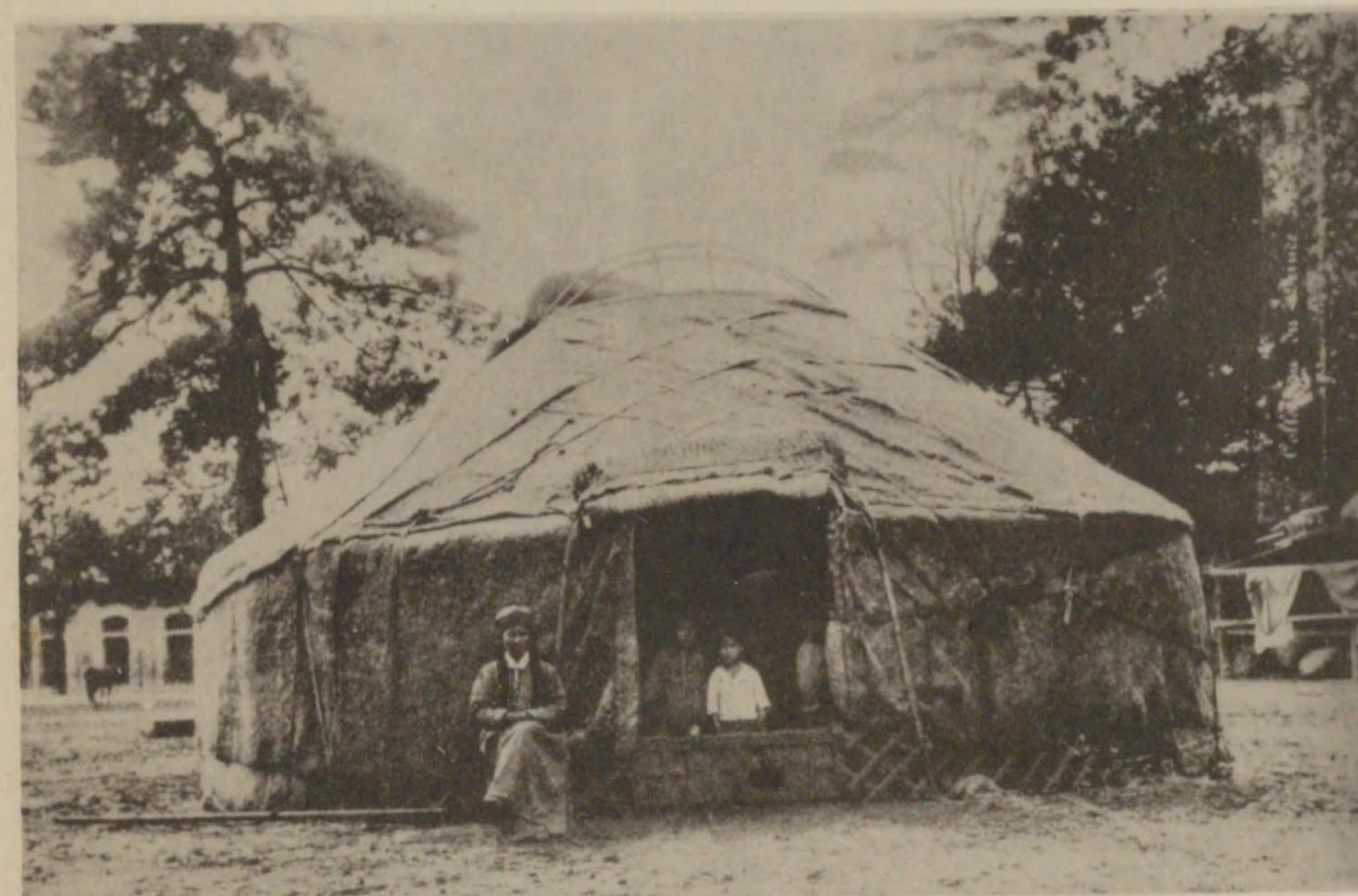
(1)



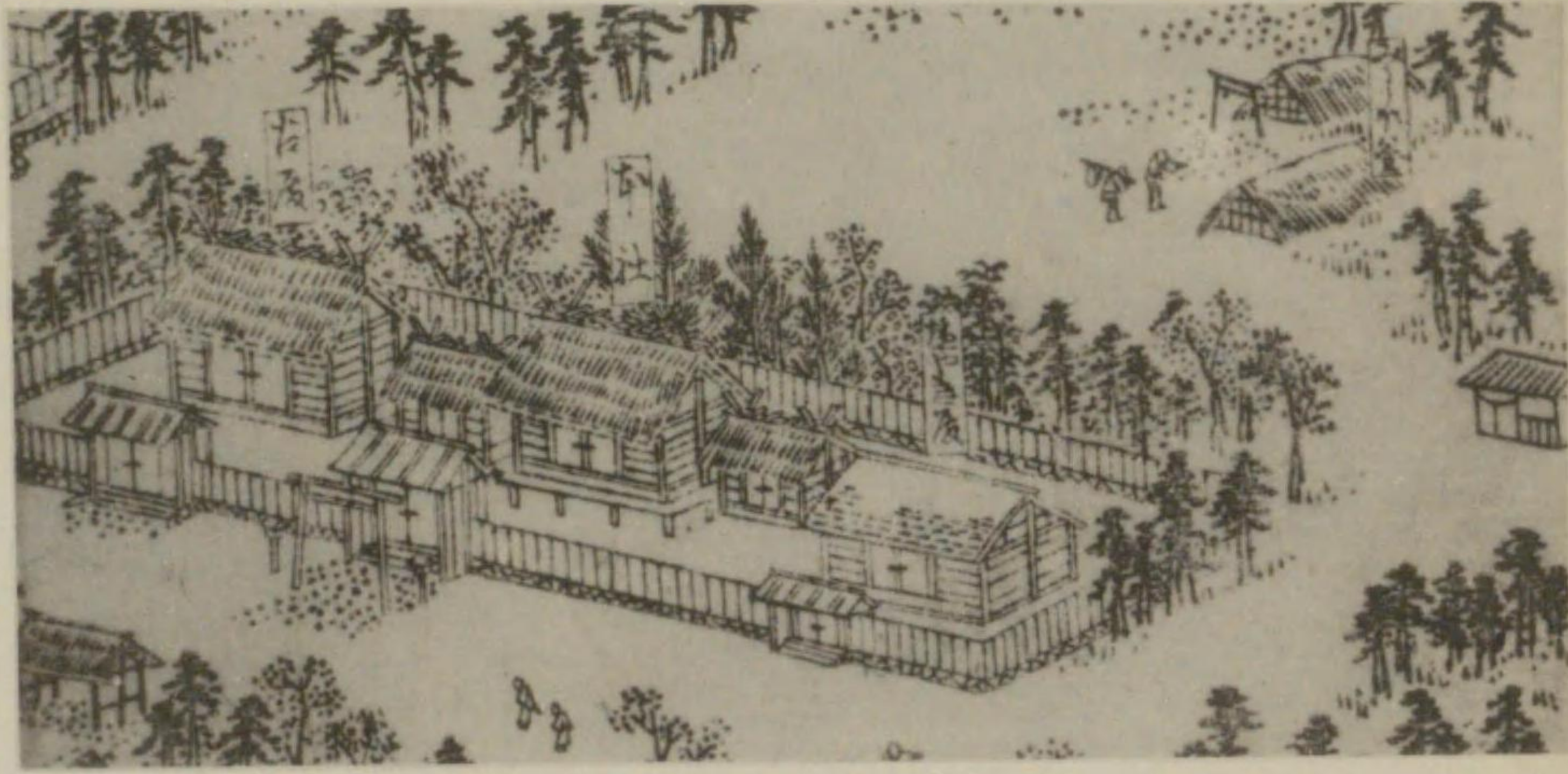
(6)



(4)



(2)



(7)



(5)



(8)



(6)



ともかくも、以上は木を縦横に組み合わせるところの構架式 (Constructive mode) であるが、それ以外に木材——原始時代には丸太を横に積みかさねた重疊式 (Accumulative mode) のものがあつた。日本では正倉院の校倉、馬韓では「魏略」に現はれた横に木を累ねた家屋の如きはそれで、シベリヤに多く見られるユルタと同一系統のものである。信州の山奥へ行くと、今日でも木を横に累ねて校倉式に骨を造り、其上に壁を塗つた倉庫が多く見られる。

日本の家屋様式を南方系のものであるとする學者が多いやうであるが、さうした人々はどんな系圖を造り得るか、それを知りたいと私は思つてゐる。私はゴルヂ族の構架式家屋について考へる毎に、いつも日本家屋の北方につながる系圖を心中に描いてゐる。

第四節 現在建築との交渉

以上は極めて簡単に太古代の日本人の住居のことを述べたのであるが、此外に日本各地には多くの竪穴遺跡が発見せられ、先年來朝のスウエーデン皇

太子殿下が台臨して調査せられた千葉縣柏井貝塚のその如きは代表的のものである。

北海道には多くの竪穴遺跡があり、札幌植物園の博物館前には其立派な標本が一つ残つてゐて、誰れも知らぬものはないが、更に樺太の榮濱へゆけば、竪穴が數百も連つてゐて、それらは共通の一型式を有つてゐる。これも勿論古代の住居——中には極めて新しいものもあらう——であるが、しかし、これらは日本人のものではなくて、舊アイヌ或はギリヤーク人の残したものであらうから、私はこゝではそれらに觸れないことにする。

問題は如上の掘立小屋が、どうして今日の家屋にまで發達したかといふことであるが、それは説明するまでもなく朝鮮を通じて日本へ入つて來た支那の佛寺建築が、在來の掘立小屋式に改良の動機を與へ、そして出雲の古い神社建築に残されてゐる出雲大社式建築を生み、それから伊勢太廟式建築に移り、平安時代の寢殿造り、鎌倉時代の武家建築が調和されて、室町乃至安土桃山時代の住宅建築に移り、茶道勃興と共に簡素な趣味が住宅建築に取り入れられ

て、今日見るが如き住宅に進化したことは疑ひがない。日本建築は、かるが故に、古代以來、他の要素を取り入れはしてゐるが、大體に於いて正統を傳へた固有形式であると私は信じてゐる。それについては他日の機會を待つて述べよう。

(1) F. G. Carpenter, *How the World is Housed?* p. 19.

(II) M. A. Czaplicka, *My Siberian Year*, plate facing to p. 37.

(III) J. Deniker, *The Races of Man*, p. 166.

第七章 船舶と交通

第一節 古代交通の還元

古代の交通は陸線と水線との二つであつたが、陸線の方は土中に埋没した先史時代の石器や土器が出て來るので、いくらかそれを知ることが出来る。けれども水線の方は筏や舟を用ひたので、それらは朽腐してしまひ、何らの跡を印してゐない。尤も若干の遺物は昔の海岸だの湖水だのから發掘せられて、それらの日の水上運搬を髣髴せしめてゐるが、大部分は失はれて私達に古代の交通状態を考察することを絶望せしめる。

然るに工藝學者が『殘物』(Survivals)といふものがあつて、私達がそれらを克明に研究してゆくと、靄の彼方にうすぼんやりと古代の水線交通が泛んで來る。殘物とは文明民衆の間に殘存してゐる古代文化の意であつて、人類はい

くら進歩しても、全然新たなものを創造することが出來ず、前代の文化を繼承してそれに改善を加へてゆくから、現代の文化は、畢竟、過去の文化の末裔であるといふ風に説くものがある。これは所謂『文化連續説』(Theory of Continuity of Culture)で、たとへ文化は古代の儘現代に傳はつてゐないまでも、其文化の核心をなしてゐるものは古代文化であるから、古代から現代への文化の連續は否定することが出來ない。

のみならず、殆ど古代の儘に、或はほんの少しだけ改良せられたものが、現代の文明國人の間に殘つて原始形を保存してゐる。これが即ち殘物であつて、私達にどんな記録も記録してゐない古代の技術を窺知せしめる。三萬噸も計へるほどの巨船が大洋に泛んでゐる現代にも、古代エジプト其儘の船が朝鮮やアメリカに殘存したり、エウフラトや楊子江にはバビロン時代そつくりの圓形皮船が殘存したりしてゐることは眞に驚くべき事實である。私は今さうした船舶の殘存によつて古代の文化、特に交通を考察して見たいと思ふのである。

第二節 歴史と創造と船舶と

あれは何かと問へば、船であると答へる。それならこれは何かと問へば、矢張り船であると答へる。そこで更に、あの船と此船とはどう違つてゐるかと問へば、それは分らないと答へるのが、一般日本民衆の船についての知識を代表する問答である。これもあれも同じ船には違ひないけれど、これとあれとの間に違ひのある以上は、其差點を擧げて兩者を比較しなければならぬ。船の興味といふものはこれらの差點の間に横たはつてゐる。

私は久しい間日本船舶の發達の歴史を調べてゐるが、初めの中はどれもこれも一つに見えて、それらの間に差別のあるなどは容易に分らなかつた。ところが長くやつてゐると、いつの間にか、細い、ちよつと目には見えないやうな差異まで見えて来る。其細い、氣づかぬほどの差異が、私達には大きな問題を解く鍵になる。私は決して道樂で船舶發達史を研究してゐはしない。また古物好きといふ一種の性癖の爲めにそれをやつてゐるのでもない。私は

かうした調査研究によつて、『日本とは何ぞや』といふ問題を解決する材料を得ようとしてゐる。

故片上伸氏は、嘗て信濃の一地點で講演を試みて、『歴史を棄てよ、創造に活きよ』といふ意味のとを云はれたさうだが、現在は孤立した現在であるのではなくて、過去から永續したところのものであり、また未來に向つて永續してゆくべきものである。他の言葉で云ひ現はせば、人類は歴史的動物であつて、今日突然に、また偶然に此世界に生れて來たものではない。私達人類の祖先の過去に於ける努力の堆積したものが、即ち今日の私達であるといふことを否定する譯には行かない。私達は歴史を棄てようとしても、歴史は私達を棄てまいし、私達も歴史を棄てざる譯には行かない。私達の仲間が今日『創造』の企てをすることの出来るのは、現在が過去の堆積であり、私達が經驗の結果を理解巧用する動物であるが故である。

創造は自我の所産であり、自我は創造の酵母である。自我は全く獨立してゐるけれど、自我の形式は歴史的である。創造の天地に逍遙しようとするも

のは、最も明確に自我を認識することを要し、最も明確に自我を認識しようとするものは、自我の發達の歴史を知らなければならぬ。所詮、自我は人類によつて稍々完全に近い形式を具有することが出来たとすれば、其存在の眞意義は人類の發達の歴史を知らなければ分るものでない。自己の屬する人種をさへ知らぬやうなものが、自己と其所産である自我の眞を捉へることが出来ようか。さうした人々からは、眞の創造は生れて來まいと思ふ。

これまでの歴史家は、信據し難い文書やら傳説やらによつて、私達日本人の何者であるかを解かうと試みた。しかし、彼等は殆ど全く成功しなかつた。彼等は今や、考古學者、人類學者の前に胃を脱がうとしてゐる。これは獨り我邦ばかりでなく、世界史もまたさうした状態にある。けれど我邦の考古學者の試みてゐるやうな研究の様式や態度は、既に過去の鎔爐に投げ入れられた粗礦であつて、それからどんな新しい事實も、系統も引き出されなかつた。單純な對物研究——骨董者が骨董品を取扱ふやうな工合で、石器だの、土器だのをいぢくつてゐては、とても人類發達の歴史や、民族展開の徑路などが分る

筈がない。私達は新らしい意味の研究を過去の遺物と殘物とに加へて、考古學工藝學の立場からそれを觀察しなければならぬ。私の船舶研究はさうした目的でなされてゐる。

第三節 日本海式船舶

私は先年夏季に信濃に研究旅行を試みて、其湖沼に浮んでゐる船舶を調査したが、第一に私を驚かしたのは、諏訪湖の西岸に繋がれてゐる『マルキ』或は『マルキ』と稱する小船であつた。詳しいことは抜きにして、此船は三枚の敷(底板)の兩側に側板がつけてあるが、それらの側板は實は丸太を二つ割りとなし、其各個の内側を三日月形に刳つたものである。此側板の上には更に縁が取られるが、これはあつてもなくつてもよいものである。敷も側板も縫釘で釘着せられ、コーキングはサハラ皮でなされる。

此船の構造は極めて簡單なものであるが、側板が丸太の二つ割りであることは、技術がいくら進んでも、丸太を刳つた時代の痕跡を全く脱却することが

出來ないといふことを示すもので、或意味に於いては、どんなに外界の文化が浸潤して來ても、持つて生れた民衆それ自身の手法テクニクスといふものは容易に棄て去られないといふことを示してゐる。

私達の區分に從へば、諏訪湖のマルコは、縫船或は刳舟式構造船ともいふべきもので、丹後の久美濱に残存するマルコ船出雲の中海に用ひられるソリコ、及び美保ヶ關神社の祭祀に用ひられる諸手船モロタと同一形式のものである。そこで私はこれを日本海式船舶とも呼んでゐる。かうした日本海式船舶の分布を見ると、それらの地方は或時代——古い、歴史のなかつた時代に、各地點間に交通があり、多分同一の人種が、同一の技巧を以て、同一の形式を有つた船を造つたといふことが知られて來る。

出雲と信濃との關係は、記紀の神話の示してゐる如く、建御名方命が出雲から諏訪に逃れて來たといふことと結びつけられてゐるやうに一般に信ぜられてゐる。此神話が事實であるかないかは、ちよつと考へれば直ぐ分ることであるが、かうした神話が生れるほどに、出雲と信濃との間に連結があつたと

いふことはたゞ一つの此マルコの形式によつても證明せられる。

諏訪湖から松本平に入つて、大町地方の石器時代の遺跡、古墳時代の遺跡を調査した後、木崎、中綱、青木の三湖に泛んでゐる船舶を調査し、更に進んで姫川溪谷を下り、中土川溪谷を遡り、再び姫川溪谷に戻つて、それを糸魚川まで下つて來ると、その海岸には、現在では殆ど他方に見られない一種の操舵法の行はれてゐるのを見る。そして其操舵法は信濃の諸湖沼に於いてもそれを見ることが出來るとしたならば、信濃の開發は必らず日本海側から行はれたものと見なければならぬ。信濃と越後とを綴つてゐる姫川は、古昔以來兩岸に若干の平地を造つて、そこを私達日本人の祖先が永い年月の間に溯つたものと思はれる。信越連結線はまだ他にもあり得る。たとへば所謂『西頸城七溪谷』の如きはそれであるが、其外關川溪谷を遡つて野尻湖に達する線の如きも、重要な一つの交通陸線であつたに相違ない。かうした複雑な關係が、船舶の研究の結果、色々の點から證明せられて來ることは、極めて興味多いことである。土器や石器ばかりいぢつてゐても、かうした關係は容易に知ら

れない。それら以上に、船舶の形式の研究は大事であるかも知れない。

第四節 日本固有の縫釘

少しく船舶の構造に注意してゐる人々は、船板の接合に二つの様式のあることに氣附くであらう。西洋式の造船法に在つては螺釘を用ひ、日本式の造船法に在つては縫釘を用ひる。日本の船は縫釘以外に他の釘をも用ひるが、其最も重要な釘着法は何かといへば縫釘のそれである。

縫釘は曲線を持つた鐵釘で、板と板とを小口で接合するものである。板を累ねることなしに接合するのは極めて困難のことであるが、日本式船舶は常にさうした接合の方式を採つてゐる。これを簡単に圖示すると、



の如く、甲の板に凹みをつけ、其點から縫釘を打ち込んで乙の板に達せしめ、甲の板の空虚斜線を以て示すには木又は石灰などを詰め込むものである。

此釘着法は極めて有効で、かうして接合すれば決して漏水の恐れがない。

此方法は餘程古い以前から行はれてゐたものと見え、先年大阪の今福から發掘された古船には、若干の縫釘が用ひられてゐた。『日本風土記』といふ支那書の中にも、日本の船は支那のものと違ひ、鐵板を連ねて板を接合するといつてあるが、それは恐らく鏟または縫釘を指したものであらう。

朝鮮全羅道の南部、多島海の上に泛んでゐる南海島の船所といふ所に用ひられてゐる漁船は、日本式釘着法を用ひて板を接合してゐるが、但し此處では鐵釘を用ひずに木釘バイモクを用ひてゐる。バイモクは栗材などを用ひ、日本の縫釘のやうに三日月形の弧線を持つてゐるので、それが日本の縫釘と同一形式、同一系統のものであることが知られる。

故寺野工學博士の談によると、此縫釘は日本固有のものであつて、支那とは全く連結がない。ひとり稍々之に似たものは埃及の古船に於いて發見せられるとのことである。其日本固有の釘着法が、今日も尙ほ朝鮮に用ひられてゐるといふことは、兩民族が同一文化、同一人種であることの一傍證となる。

釘からだけでも、かうした一つの暗示を得る。歴史が工藝學的研究、考古學的研究の結果を度外視することの出来ないことは、此一事でも明らかである。

第五節 朝鮮三角船

朝鮮と日本とは、船舶工學の上から見れば、切つても切られぬ近縁の關係にある。筏に於いてもさうであり、構造船に於いてもさうである。前述の諸手船、マルキ船は、たしかに威鏡道城津の三角船と比較し得べきものである。三角船は日本人の稱呼で、土人はそれをクメイと呼んでゐる。クメイの語意は詳しく分らないけれど、私の指導してゐる一鮮人の研究によれば、『刳る』或は『孔』といふ意を有つてゐるクンモイの轉訛であらうといふことである。

此三角船は諏訪湖のマルキ船と同じく、二つ割の丸太をV字形に接合し、それに艦板と底板とを加へたもので、ちよつとスルメイカのやうな形狀を呈してゐる。これは主に漁業用に使はれてゐたが、近年は日本官憲の忠告で建造を廢し、城津附近に於いてもそれを認めることが出来なくなつた。けれども

先年豆満江へ行つた時には、その渡し船が全然クメイと同一の手法で出来てゐたのを發見して嬉しかつた。

第六節 出雲のソリコ船

島根縣は日本の舊國である。そこには多くの古代を憶ばしめる遺物、殘物が發見せられる。しかし、私は、それらの中で、私の専門に研究してゐる古代船舶の殘物を最もなつかしく、また最も價值あるやうに思ふ。島根縣に於ける古代船舶の殘物は、少くとも二つを計へ上げることが出来る。其一つはソリコ舟であり、他はモロタ舟である。これらの二つは、名も異つて居り、また型式も稍々異つてゐるけれども、根本的には同一のものであつて、『古事記』や『日本書紀』に現はれて來る古い時代の原日本人(Proto-Japanese)——即ち私達近代日本人の主な祖先で、それがまだ他種族の血液を混へなかつた頃の名稱——の航行を暗示するところの重要性を帯んだものである。

出雲の中の海の大根島を中心にして、其周圍、特に安來地方には一種異形の

舟が用ひられてゐる。それはソリコ舟といつて、主として曳引用に供せられ、若干は航行、運搬用にも供せられてゐる。ソリコの名稱は、はつきりと分らないけれど、内藤博士はそれをシラギの轉訛であるといふ。武藏國の白子も、矢張シラギの轉訛であるといふ説があり、關東に多いシラヒゲの神名も、矢張シラギの轉訛であるとするれば、ソリコもシラギの轉訛だと見られぬともない。果して然りとすれば、此舟が系統に於いてシラギに繋がつてゆくであらうことが第一に推論せられる。

ソリコ舟の構造は、今、手元に測定表を持つてゐないので、こまかく敘述することは出来ないけれども、其特徴を列擧して見ると、次ぎの如くである。

(一) 船體は中央、右側、左側の木材から成り、それらを接合して、刳舟型の形狀を造り出す。本來は刳舟であつたものが、經濟上、釘着が發達してから三個の材を接合するやうになつたのである。かるが故に、形狀だけは刳舟と同じ形狀を保存してゐる。それは民衆の有つてゐる守舊性(Conservatism)といふもので、思ひ切り新しいものは造ることが出來ず、技術が進歩し、材料が變化して

も、依然として舊來の型式(Type)を保存しようとするものである。其證據には、兩側に直立する側板は、扁平であり得るにも拘はらず、態々彎曲せしめ、殊に内側は材を凹圓形に刳るやうにしてゐる、それは明らかに刳舟時代に單材を刳つた名殘と見て差支へない。

(二) ソリコ舟の形狀は、上部から見ると長方形で、其兩端がいくらかくびれてゐる。側面から見ると半月形で、底には可也に大きい反シヤがあり、反は舳部に於いて殊に著しい。刳舟型のもものは、平面圖が長橢圓形であるべきやうに思はれるが、日本海の刳舟は太平洋のそれと異つて、平面圖が大方長方形を呈してゐる。此手法がこびりついてゐたから、三材を接合するやうになつた後でも、上縁材或は舳部甲板を加へて、態々長方形の輪郭を持たしめたのである。此平面圖の差異は、人種の差に基づいてゐるもので、長方形は原日本人に屬し、長橢圓形は舊アイヌ(Palae-Ainu)即ち今日のアイヌの祖先に屬してゐると思はれる。

(三) 後部に方形を與へてゐる艦板は、外側の中央に孔を穿つて、そこに舵を

装置するに便してゐる。中の海のソリコ舟では、殆ど全く舵を用ひないけれども、それが本來舵をはめる目的で造られたものであることは、同一型式の船の他處に於ける裝備に比較して十分に證明せられることである。鱸板に於ける艚臍の構造も他の船と異り、水で濕ほすことがないのが特色である。鱸綱の長いことも一特徴である。これは操船術から視て極めて面白いことである。故遠藤理學博士はソリコ舟の操縦術は、どこにも其類がなく、ひとり南支那に於いてのみこれを見ることが出来るといはれた。南支那と出雲とのみにあつて、他に失はれた操船術は、其何れかの一方から他方へ行つたと見るよりは、嘗て広い地域に行はれて居つたものが、段々文化の進歩につれて改廢せられ、偶々二つの地點に残存したと見る方が正しからう。

如上の性質から私はソリコ舟を古代船舶の殘存と見るのであるが、其系統は名稱の示してゐる通り、朝鮮につながり、従つて滿洲につながつてゐると斷定することが出来る。出雲文化の系統について、南方起原説を主張するものが可也に數多くなり、私自身もさうした假説を立てれば立てられないこともないけれども、大體に於いては北方起原説に團扇をあげたいと考へてゐるものである。従つて此ソリコ舟をも、私は北方系統のものであると斷じようと思ふ。今其理由を次々に説明して見よう。

ソリコ舟と同型の船は、我邦では美保關の美保神社に保存せられてゐる神事用の諸手船、丹後久美濱の丸木船、信濃諏訪湖の南岸である花岡のマルコ船に見出される。いづれも底部、右舷部、左舷部の三つから成つてゐるけれども、本來は刳舟であつたから、兩舷側板の刳り方が刳舟と同一手法で、平面圖が長方形を呈してゐる。また朝鮮では城津地方にあるクメイといはれる三角船、豆滿江に行はれてゐる渡船、滿洲では黑龍江に泛んでゐる艚舟が、ソリコ舟と型式を同じくし、構造、手法、共に一つの原から來たものと思はれるのみならず、古代に於いてはシベリヤを通して、スエーデンあたりまで同一型式の船が行はれてゐたのであるまいかと思はれる證據が少なからずある。で、私はソリコ舟を北方系統のものと斷じたのである。

安來に於ける歲徳神の祭禮に昔はソリコ舟を十隻ぐらゐ並べ、其上に板を

敷き渡して大きなスペースを造り、そこで神事が行はれたといふが、これは古代に於いて三寸法の小さい船——即ち容積の大きくない船に、大きな容積を與へる爲めに工夫せられた駢列航行法の名残で、日本海岸には今日でも尙ほ行はれ、沖繩縣に於いても牛馬などの大荷物を運搬する時に行はるゝ航海法で、オホツク海などでも行はれ、餘程古い航海術であつたと思はれる。

かうした次第で、ソリコ舟は、モロタ舟と共に、島根縣地方に於ける重要な古代文化の残存であり、其史學的、考古學的、工藝學的價値は、大社などの大社建築諸所の古墳、石造物など、等價的であると思はれる。然るに近年次第に此型式の船が減少して、遂には其姿が失はれはしまいかといふ虞れがあるのは遺憾である。私はかうした大切な古代工藝の存在を、どうかした方法で保存して置くことが必要であると思ふ。縣當局では實物を其儘保存されるのみならず、時が移つて造船術が改まつて行つても、一つの標品としてソリコ舟を残存せしめ、それを中の海、宍道湖などに浮かしめて、烟霞の癖から、尙古の癖から、研學の必要から、島根縣に旅するものにそれを一覽せしめる便宜を圖つても

らひたい。現に私の如きは、容易にこれを見ることが出来なくて困つた經驗を有つてゐる。ソリコ舟は今に世界でいくつもない古代文化の残存の一つとして、人類學者の注意を惹くことになるのは疑ひのないことである。偏に縣の當局や有志諸君の注意を希はねばならぬ。

第七節 黒龍江の艦

出雲のソリコ船や諸手船に似た形式の船は、昔、黒龍江に於いて用ひられてゐた。其事は江戸時代の中頃、上アムール地方を旅行したマークの旅行記に記され、圖も示されてゐるが、底板が艀部の底に於いて突き出されてゐる。此底板の突出してゐるといふ點が私には極めて面白いことで、同書に圖示されてゐる渡船フエリイにも矢張りさうした部分があるが、それは日本古代の石棺に於いて特に見られる形式で、さうした接合法が古代にあつたといふことを示してゐる。

日本海岸はそれらの日に、私達の祖先と同じ人種によつて生まれ、日本、朝鮮、

滿洲、シベリヤには、同一の文化が分布してゐたといふ事實が、これら船舶の研究によつて證明せられる。そこで私は、之に日本海式船舶の名を與へたのである。

私達日本人は今日では殆ど原型を失つてゐるほどの混血人種であるが、それらの日にはなほ原型プロトタイプを保つてゐた。それ故、私達はさうした他の血液を混へない日本人を『原日本人』と呼んで、近代日本人と區別してゐる。原日本人はツングースの一派で、人種學者の所謂『南ツングース族』であり、滿洲人、朝鮮人、オロッコ、オロチョン、ゴルヂなどと同種族である。或一派の人種學者は、日鮮人を區別せず、*"Koreo-Japanese"* 『鮮日人』といふ名稱をすら用ひて居り、私も近頃其稱呼を採用してゐるが、さうした人種的關係が、船舶の上にも現はれてゐるといふことは極めて面白いではないか。

第八節 竹や葦で造つた舟

『古事記』神話によると、蛭子命は葦船に入れて海中に放流されたとある。

そこで古來の古典學者は頭腦を悩まし、竹や葦で船は造れないが、神々のことは幻怪測るべからずなどといつて不安心な安心をしてゐた。日本のみが世界であつた時には、さうした解釋で満足が出来るけれども、今日のやうに諸國の水上運搬具がよく知れて來ると、なか／＼そんな解釋では満足が出来なくなる。

讀者中には既に知つてゐるられ方もあらうが、臺灣の打狗では、『竹排』といふものが用ひられてゐる。それは竹材を縦に幾本も並べて其兩端を上向せしめ、側面から觀ると半月形にせしめたもので、海の上をそれて走つてゐる。海水が容赦もなく筏の上に漏つて來るので、荷物や乗客は、筏の中央に設へた桶の中へ入れる。これは打狗の海岸には暗礁が多くて、吃水の深い普通の船は通ることが出来ないで、昔の儘の形式を踏襲して昔の儘に用ひられてゐるのである。^(四)

ところが或知人の談話によると、此種の竹筏は四川省邊に於いても用ひられ、今日もなほ盛んに貨客を搭載してゐるといふから、此竹筏形式は、臺灣特有

のものでなく、南方支那に昔行はれた形式のものであることが知られる。『後漢書』の西南夷傳を繙くと、哀牢夷の條に賢栗王が箆船フツに乗じたといふことが書いてある。此箆船は明らかに竹排のことであつて、今日四川省の一部に残つてゐるものと同一形式のものであつた。そこで私はこれを苗族に固有の形式であると考へる。苗族は今日の印度支那人の祖先であつて、今てこそ支那の南部の山岳地方に跼蹐してゐるけれども、古代に於いては楊子江南に占據し、大に勢力を揮つてゐた民衆である。

其印度支那人が今日安南アムナン東京トシキあたりで使つてゐる水上運搬具に一種特別の形式のものがある。これは籠舟カゴフネといつて、英國人が“Ba ket boat”と呼ぶもので、早い話が、日本の竹製の箆フツの大きなものである。箆では目があつて水が漏る、水が漏つては水上には浮ばない、そこで椰子油に牛糞を混ぜて其目を填塞して漏水を防ぐ。大きなものになると、二十噸位の荷物を運ぶことも出来るといはれてゐる。此籠舟こそは、日本の神話に現はれて來る「無目籠マナシカケ」であつて、昔から古典の研究家が解釋に苦しんでゐたものである。(五)

これらの諸點から推すと、日本の古代運搬具には、印度支那式のものが入つてゐたことに疑ひがない。私は日本に米を齎らしたのも此人種であらうと思ふが、人種學的研究の結果、鳥居博士は朝鮮多島海及び日本の一部には、此種族に類似の體格を持った民衆があるから、多分印度支那種の血液も日本人の血管の中に通つてゐるであらうとの事である。私は船舶考古學の上から見て、日本と印度支那との人種的並びに文化的連絡を信じようとする一人である。

第九節 格子形腕木附の船

從來『大和型』と呼ばれてゐた日本式構造船に對して、西洋人は屢々“The Japanese junk”といふ稱呼を用ひる、それは明かに支那戎克ジンクを日本船に應用したものである。けれど支那ジャンクと日本ジャンクとの間には非常な差異がある。船舶工學上から觀ると、彼れと此れとはまるで似もつかぬ他人同士で、其間に何らの關係も存在してゐない。若し強ひて存在してゐるとしたら、日本

と支那との間に朝鮮船を置き、朝鮮船を仲介として僅かに両者が連絡せられるばかりである。朝鮮の船は元來日本式であつたものが、中世に支那様式を取り入れたので、今日のやうな「ペイ」の形式を得たのである。それ故、朝鮮の船の大部分は、支那式ではなくて、寧ろ日本式のものが多いと云つてもよい。

極めて大まかに支那、日本の兩ジャンクを比較しようならば、支那ジャンクは箱形であつて、船艫共に方形を呈し、しかも底部の板は横に接合せられてゐるに反し、日本ジャンクは船部は三角形を呈し、船部は外艦板によつて可動舵を保護し、底板は縦に張られるのが常である。前者は肋骨を持たぬ代りに區劃によつて横張力を造つてゐるのに、後者は全く肋骨を缺き、横梁によつて僅かに横の張力を支へてゐるばかりである。

支那ジャンクの外貌を形成してゐる外側板と船艫兩部の板とは、割丸太の俵が残つてゐて、其發達の悠久を偲ばせるけれども、それらの板は皆駢列式に並べられるだけで、十字式に置かれたものは全くない。之に反して日本ジャンクに於いては、若干の十字式部分を認めることが出来る。積荷の多い場

合などに船の吃水が深くなると、波を避ける爲めに上舷の縁に一種の組板が立てられる。それは格子式のもので、十字形に組まれた骨格の内側に板を張つたものである。私は此形式は古代の印度船に類似してゐると思ふ。

印度のマイソール大學で印度の航海についての講座を持つてゐるムーカ―シ教授は、私と同じく船舶の發達に深い興味を感じてゐる人で、『印度の船舶』といふ書物を著してゐるが、彼れの言ふ所に従ふと、紀元前一〇〇——二〇〇年の頃の印度の航海船は格子式の腕木を持つたもので、それはジャヴのブルブールの石壁彫刻によつて證明せられるといふとである。ブルブールの石壁に刻まれた船には腕木がついて居り、外側は全部格子式になつてゐる。日本船舶には少許の格子式構造を跡づけるやうな分子が残つてゐることは私の既に説いたところである。

一般に腕木(Outrigger)を持つた船は、南洋式のものと考えられてゐる。オセアニヤの土人は、殆ど總て腕木附のカヌーを操つてゐるが、それらは南洋式のものでなくて、實は印度の固有形式である。それが段々と南洋に及んで、今日

ては印度には其形式が亡んで、かへつて南洋のみに残つてゐると謂つてもよいほどの状態に達した。——さうしたことは日本とは全く無關係のこのやうであるが、實は無關係ではなくて、此腕木アウトリックを持つた船が日本の八丈島までも延長し、同島では島人が盛んにそれを乗り廻してゐることである。かうした點から觀ても、いつかしら極めて古い、忘られた時代に、ブルブール石壁の彫刻に見られるやうな印度式船舶の構造様式が日本に輸入せられ、今日の日本ジャンク、即ち『千石船』に其痕跡を止めてゐるといふことに疑ひはない。文化の流れは人種の流れと異つてゐるといふのが、普通の説であるが、私は文化の流れは常に人種の流れに伴ふものであることを主張してゐる。日本人の文化と血液とに、印度支那式要素の混入してゐることは最早論議の餘地がない。

第十節 刳舟と『天磐櫂樟船』

ひとしく刳舟であつても、其形式と系統とは異つてゐる。其異同を辨へな

ければ、文化移動と人種移動との跡が分らない。複雑な人類發達の歴史は、簡単な辭書などの説明を見るだけでは分らない。秋田縣の八郎潟に残つてゐるテン草採集の刳舟と、今回私の發見した木崎湖の刳舟——一つは今尙水面に浮び、他は既に半ば朽ちて洗ひ場の橋に充當されてゐる——とは、形式に於ても同じやうに、系統に於いても同じものであらうが、北海道アイヌの用ひてゐる刳舟、福島縣で鰻漁に用ひられてゐるドンボ舟などは同一形式、同一系統であると思ふことが出來まい。

舊アイヌ(近代アイヌと區別する爲めに、先住民としてのアイヌに與へた假定名稱)の刳舟は茨城縣の小谷沼に於いて發掘せられたものが示す如く、鯉節型(Sussex type)であつて、アイヌの刳舟や、福島縣のドンボ舟に類似してゐるが、八郎潟の刳舟や、木崎湖のトッコは割竹型(German type)であつて、舊アイヌ式とは全然異つた原日本人式のものである。前者を太平洋式とすれば、後者は日本海式とでも云はうか。

原日本人の刳舟は、首尾共に方形で、若干の平滑面が刳り残されてゐる。た

とへば私が千葉縣の殘し沼に於いて發見した先史時代の刳舟の如きは、原日本人式(刳竹型)に近い要素を持つてゐるのに、安房の濱田、常陸の大寶に残つてゐる古代刳舟の如きは、舊アイヌ式(鯉節型)に近い要素を持つてゐる。これから觀ると、舊アイヌの刳舟は先尖りであり、原日本人のそれは四角であつたと推想することが出来る。かうした船舶形式の差異は日本人の血管中に舊アイヌの血液の通つてゐることを示す一つの證據となる。

こゝに今一つ不思議の神話がある。それは天磐船アマノイハフネ或は天磐楹樟船アマノイハクサフネに關したもので、古代日本人の間に、楠材で造つた一種の刳舟のあつたことを想起せしめる。楠材から造られた刳舟の遺物は、今まで知られてゐるものが三通りある。一つは『尾張名所圖會』に載せられてゐるもので、江戸時代の末に尾張諸桑村で發掘せられたが、今は全く船體が失はれた。圖が残つてゐるのみである。一つは明治十七八年の頃難波ナニワの鮎川で發掘せられ、一つは十數年前大阪市外の今福で發掘せられたもので、共に楠材から造られた大型の刳舟である。これらの三つは何れも單材から造つたものでなく、二個以上の材を綴合

して造つたものである。刳舟は嚴密に云へば單材刳舟と複材刳舟との二つに分れるが、前述の三遺物は、いづれも複材刳舟の好標本で、二個の楠材を接合したものである。尾張のは接合法が不明であるけれど、難波のは組合せ榎合によつて兩材を接合し、今福のは釘着によつて兩材を接合したことが明らかに知られてゐる。難波のは接合法が幼稚であるけれども技巧は非常に進んだもので、縦通力と横通力についても彼等は多少の知識を持つてゐたことが分る。今福のは接合法は進歩してゐるが、技巧は極めて拙劣で、殆ど縦通力が缺けてゐるやうに思はれる。

言ひ傳へによると、これらの楠船は、最近まで九州、四國、伊勢などで用ひられてゐたやうであるが、楠材の減少した今日では全く其姿を認めることが出来ない。然るに臺灣の日月潭では、蕃人が一種の楠船を操縦してゐる。其楠船は樹幹を刳り抜いて造つたもので、首部と尾部との區別がなく、従つて艦板もなければ、舳材もないから、少し浪が立つと水がどしどし船内に入つて來る。節孔などから來る漏水は、草や粘土を詰めてそれを塞ぐことが出来るけれど

も、船部から入る水は防ぎ切れず遂に沈没することがあるといはれる。これらは多少、大阪發掘の二船と似てゐて、神話に現はれる磐櫂樟船イハクサツネフネが、かうした種類のものであつたとを想像せしめる。

日本人を南ツングース族の一派であるとすれば、彼等の故郷は當然大陸の寒い氣候の地帯であつたと見なければならぬ。寒冷な地帯には、熱温帯産である楠が生育する筈はないから、此神話並びに物體は、必らず南方のものであるらねばならない。私は日本人の血管中にはインドネジャ人の血潮が通つてゐるといふとを信じてゐるが、其一つの證據は此楠船神話と楠船遺物とである。勿論、大阪發掘の二つの刳舟は、日本人の造つたものに相違なからうが、其原形式はインドネジャ族——たとへば臺灣生蕃の如きが持つてゐたものであらう。動物には適應といふことがあるが、其原則は品物にも應用せられ、船の如きは常に地方化して、其行く先々で異つた材料を適當の方法で採擇利用する。原日本人がインドネジャ型の楠船を造つたことは決して疑ひを容れる餘地がない。

第十一節 筏の證明する文化移動

私はざつと十年がかりで、やつと一篇の小論文を書き上げた。それは『日本古代の筏』といふものであるが、其内容を極めて簡単に掻い摘んで書かうならば、筏には草筏と木筏との二種あり、木筏には縦結式と縦横交結式と二色ある。日本の筏は縦に幾本も丸太を列ねてそれを一乗とし、少くとも二三乗以上を聯結して河を下す。日本の筏は材木を高地から平地に運ぶ目的を持つてゐるだけで、貨物や乗客を運搬する目的は更でない。

然るに西方諸國の筏は縦横交結式（即ち十字式）で、縦に材木を幾本か列ね、其上へ横に更に材木を幾本か列ねて十字形に組み合はすことになつてゐる。東はアムール河から、西はチギリス、エウフラトに至るまで、皆殆ど此形式である。日本の筏は筏流しとしては技巧が發達してゐるが、形式は原始的のもので日本に渡來した後少しも發達しなかつたものである。かうした形式の差異は、日本の筏を單層に限らしめ、西方の筏を重層に發達せしめた。

古代の筏は屨、其下方に浮きをつけて浮力を増し、筏の河床に膠着するのを避けた。浮きは場所によつて異つてゐるけれど、日本を初め東洋では瓢箪をぶらさげた。支那では獸皮をも用ひたらしい、瓢箪と獸皮はたゞに浮きを用ひられたばかりではなく、古代人はそれにぶら下つたり、其上に跨つたりして水上を渡つた。新羅の瓠公は日本から瓢箪を腰につけて海を渡つた人であつた。朝鮮の濟州島では、今日でも尙ほ瓢箪を腰にして海中に浮んでゐる海女がある。獸皮といふのは水牛の腸を抜き取つて氣密にし、足から息を吹き込んで空洞を充たし、さて足を括つて外部から水の浸入しないやうにしたもので、英國人はそれを「Inflated Skin」と云つてゐる。これは今も盛んにチグリス河で用ひられ、或は船の用をなし、或は筏にぶらさげられて浮きの用をなしてゐる。日本では古い時代には鹿の皮を用ひた。支那の楊子江上流では今日でも犁牛の皮を用ひてゐる。神功皇后の朝鮮征伐神話中には、筏に瓢箪をぶら下げたとが記されてゐる。これらから観ると、たゞ一つの筏の工藝學的、考古學的研究によつても、日本とメソポタミヤあたりとが、文化的人種的に

順々に聯絡のついでゐることが知られるのである。

第十二節 日本の人種と文化

船舶といふ唯だ一つの器具から觀ても日本人の人種學的的位置が知られて来る。前述の如く、日本人は蒙古人種である原日本人 (Proto-Japanese) を骨子として、それに印度支那人の血潮が交り、また更にそれに高加索人種である舊アィヌとインドネジャ族との血液が加はつたといふことに疑ひはない。此外、支那人の血液も混合して居り、またネグリの血液も混合してゐる。日本人は全く一種特別の獨立した人種ではなくて、島國人であるイギリス人の如くに、多數の血液を混へた混血民衆である。

日本人を混血民衆だと信じ得る人は幾人あるであらう。中にはかうした私の假定を非常に亂暴な、大膽などのやうに思ふものもあらうが、考古學や、人種學の上から觀ると、どうしてもかうした假定に陥つて行かねばならない。一部の學者は、日本人が非常に古くから日本群島に住まつてゐたことを主張

するが、いくら古くても多寡が知れてゐる。ヨーロッパでは氷河期に既に人類が住まつてゐたけれど、日本では現世期の地層でなければ人類の棲息したことゝの痕跡はない。地質學的に云へば、日本が大陸の一部分であつた頃には、こゝにはどんな人類も住んでゐなかつたが、群島になつてから初めて人類が住み出したのである。

動物地理學上、孤島は人種の避難地であり、保存地である。原日本人は日本群島に於いて比較的、其原型を保つことが出来たけれど、尙ほ前述の諸種族の血液を混へて、今日の如き混血人種となつた。

アメリカ大陸が今日諸種族の移住地となつて、そこに世界的な血液の混淆が行はれてゐる如く、日本群島は古代に於いて東方の樂園として、そこに盛大なる血液混淆、自然の人種改良が行はれたのであつた。かうした人種の混淆は、同時に諸種の文化の融合でもあつた。歴史家は、殆どすべて日本には何らの固有文化もなく、朝鮮を通して支那、印度の文化が入つて來たとのみ考へてゐるが、私の考へては日本の文化はもつと深い淵源を持つてゐる。

私の假定にして誤りがないならば、日本の文化には少くとも三つの大きな流れがある。一つは沙漠、北路であつて、極めて古い、時代に、ゴビ沙漠の北方、即ちシベリヤの南部を西から東に通つて日本に移動し、一つは沙漠南路で、ゴビ沙漠の南方を通して日本に移入した。所謂「三韓支那印度の文化」はそれである。他の一つは印度海路で、印度洋、支那海を通して、水上から日本に移入したものである。此二つの陸線交通路と、一つの水線交通路とは、日本人に豊富なる血液を、日本文化に饒多なる要素を齎らしたのである。これらの三交通線は、一々これを船舶形式に當て嵌めて考へることが出来るほどに、私には日本人種、日本文化の移動の形跡がはつきりと見られる。

かうした歴史の概観をも捉へ得ることなしに、日本民衆の文化を論じ、人種を論じ、それらの改造を論ずることは餘りに大膽であり、無謀であり、無智である。日本人は今日歴史を棄てるよりも、もつと拾はなければならぬ位地にある。日本にどれだけの歴史があり、日本人にどれだけの自分自身を理解する力があるか。悠久な自分自身の發達、せめては人類發達の成跡をなりとも多

少窺つて見て、始めて人類の事に口を挟む権利があり得る。それらを知ることなしに、たゞ現在のみを觀ようとするのは鍍金の時計を見て、それを金時計として取扱ふのに等しい。さうした時代はいくら日本が貧弱でも、もはや過ぎ去つてゐる。日本はもはや研究をより深くし、より細くする時代に入つてゐる。机の上の空論、頭の中の空想を棄て、科學的な基礎の上に立つた考察、實行を云爲すべき時代に入つてゐる。私は船の發達の歴史が私達に與へるところの多いやうにもろくの物の發達の歴史が若し闡明せられたならば、私達はそれによつて一層確實に私達の過去を知り、現在を知り、併せて將來をも知ることが出來ようと思ふ。歴史を棄てるものをして棄てしめよ。創造の力を得ようとするものは、先づ眞正の自己を知り、純眞の自我を捉へる爲めに、自分自身の今日を迎へた歴史を知らなければならぬ。

- (一) Shinji Nishimura, *The Many-Paddled-Ships of Kamuro*, (A Study of Ancient-Ships of Japan, vol. I) pp. 19 ff.
 (二) *Ibid.* pp. 24, 25, 26.

- (三) Маак. *КЪ ПЪТЕШЕСТВІЕЮ НА АМЪРЪ.*
 (四) Shinji Nishimura, *Aieit Rafts of Japan*, pp. 127 ff.
 (五) Shinji Nishimura, *The Mamashi-Katana*, pp. 36 ff.
 (六) Radhakumud Mookerji, *A History of India, Shipping and Maritime Activity from the Earliest Times*, pp. 45 ff.
 (七) 西村眞次、文化移動論、二二三、二二三頁。
 (八) 同人、東部日本發掘の割舟遺物(造船協會々報、二三號)。
 (九) 同人、今福發掘の割舟調査報告(造船協會雜纂、一二號)。

第八章 日本神話の世界的位置

第一節 文化連續の證據

日本神話を検討して來ると、それらが日本だけに存在してゐるのではなくて、世界各國にも存在してゐることが知られ、従つて日本神話は世界神話の片割 (Counterpart) であつて、日本に獨立發生したものでないともわかつて來る。私達は文化が總て過去から現在に、甲地から乙地に、甲人種から乙人種に繼承、傳播、分布されたものであることを主張する文化連續説 (Theory of Continuity of Culture) の信者である。かうした考へから觀れば、神話傳説もまた連續してゐるもので、決して個々に分離してゐるものではないといふ議論に到達するが、其事實が我邦の説話によつても證明せられる。

第二節 天孫降臨神話

たとへば天孫降臨神話の如きも、ひとり我邦のみにあるのではなくて、近いところでは南洋にもあり、また蒙古にも存在してゐる。蒙古の天孫降臨神話は、著しく我邦のそれに似たところがある。ゲシル・ボグド (Gesir Bogdo) に関する説話はそれ、蒙古の土俗學的研究に従事したジエレミヤ・カーチンの著書中にはその三種を載せてゐる。其一つについては、私は既に譯出して置いたから、こゝでは残る二つの中の一つを次ぎに譯出して見ることにする。

『5つのことか知ら、古い時代に、此世界の前の世界に、マラツ (Marat) とシム人々がゐた。またマンガタイ (Mangathai) とシムものもゐて、シャルモ・カン (Shalmo Khan) —— 目に見えぬカンに支配せられてゐた。』

嘗て最高の神であるデルグエン・サガン (Delguen Sagan) がシムには、「シャルモ・カンと其屬人らを滅ぼして、新たに平和の民を生まれしめよ」と、其孫のゲシル・ボグドをカンたらしむべく地上に送つた。

南の方、アルタイ・デダ (Altai Dedai) と云ふ土地に、一人の老翁と老媪とが住んでゐた。翁は七十歳、媪は六十歳で、翁の名をスンドレイ・ウググン (Sundlei Uggun) とし、媪の名をスンドレイ・ハミヤガン (Sundli Hamiagan) とした。(ウググンは老翁の義、ハミヤガンは老媪の義)。これらの二人はマラツに屬してゐた。

或日、スンドレイ・ハミヤガンが云ふには、「私は何だか澤山な子供の母親になつたやうな氣がする。どうして此世界に生まれ出ようかと相談してゐる聲が聞える」と。

やがて多くの子供が、色々な方法で、スンドレイ・ハミヤガンから生まれて出た。生まれ出ると直ぐ、いづれも天へ昇つて往つた。十日経つて、一人の子が生まれて云ふには、「私の生れた方法で、これから後の人々は生まれるだらう」と。そして其言の通りになつた。

此子がゲシル・ボグドであつた。どんな小刀も臍帯を切り得なかつたので、其子は遂に父親に向つて云つた。「小屋 (Yulka) —— シベリヤに住んでゐる蒙古

族の小屋で、大抵丸太を組んで、其上に土だの、苔だのを葺いたもの)の屋根の西側に一本の木がある、其木は木のカンです。其木を採つて臍帯の上に置き、日光の中で三度振つて下さい。すると私は自由になるでせう」と。そこで、さうしたら、臍帯は萎びて、落ちてしまつた。人々が其子を裏んで母親の傍に置くと、子は父親に向つていつた。

「森へ行つて、九本の樺の樹を伐つて下さい。貴方の牧獸の中には、一頭の強い黒牡馬がゐます。小屋の戸の楣(まぐさ)の上に、私がエセゲ・マランから授かつた黄色い燧石があります、其燧石はマジックの力を持つてゐます。小屋の西側の箱の中には、鞍と鞍下と馬具一式とがあります」。スンドレイ・ウググンは、これらの物を知らなかつた。それらはゲシル・ボグドと一所に現はれたものであつた。

老翁が九本の樺の樹を持つて來て、ゲシルの言ふ儘にそれを繫馬柱に立てかけると、九頭の青馬になつた。其瞬間に九柱のシャルモが、繫馬柱のものとよく似た九頭の馬に跨つて來た。彼等が馬に乗つた時、其子は起ち上つて、小

屋の戸の方へ往つた。

「お前は私達の馬と競走するやうな馬を持つてゐないか」と、シャルモが尋ねた。

「私は子供です、まだ生れたばかりです。馬の乗り方も知りません。まあ私の馬へ乗つて試して見て下さい。大きくなつたら、私も貴方々と一所に乗りませう。」

九柱のシャルモが馬に乗ると直ぐ、馬は黄海の中に突進した。彼等は岸で喰ひ止めることが出来ず、海の真只中まで進んだ。と、馬は、そこで九本の樺の樹に變つて、水中に没したので、シャルモらは溺れた。

三歳になると、ゲシル・ボグドは十分成育した。彼れは強い黒牡馬と馬具とを一箇の燧石に變へて、^{ポケット}隱囊に入れ、徒歩で出かけて行つた。

どれほどの旅路であつたかは知らぬけれども、彼れは遂に三つの道の交叉點へ出た。そこで彼れは小さい、形の變つた子供になつた。片腕と片手とは背中から出て、片脚は腰の上まで伸び、眼は頭の中まで窪んでゐた。彼れは、ち

よつと見ても恐ろしいほど醜かつた。

南西の方から九十九のシャルモが、九十九の青馬に乗つて來た。彼等は畸形兒を見て、心の中に怪しんだが、何とも言はずに乗り續けた。子供はやや久しく坐つてゐたが、やがてマジックで彼等の周圍を一周し、彼等よりも前に黄海の傍に出た。そして、そこで其燧石を以て、^{ギョウ}檉柳の皮から九十九隻の小船を造り出し、大きくなれ、強くなれとそれらに命じた。それから海邊に假小屋を建て、自分の身を老翁に變へて、其假小屋の蔭に坐つてゐた。

九十九のシャルモは、九十九の青馬に跨つて、老翁と小船とを見て云つた。「私達は北西のテングリン(Tengerin——天)に向はうとしてゐるのだ。馬では海が越されぬ。私達の九十九頭の馬をやるから、お前の九十九隻の船をくれ」と。

シャルモらが船に乗ると、船は矢の如く飛び去つて、止めようとしても止めることが出来なかつた。船は海の真只中へ行くと、^{ギョウ}檉柳の薄皮になつた。そこで九十九のシャルモは溺れてしまつた。